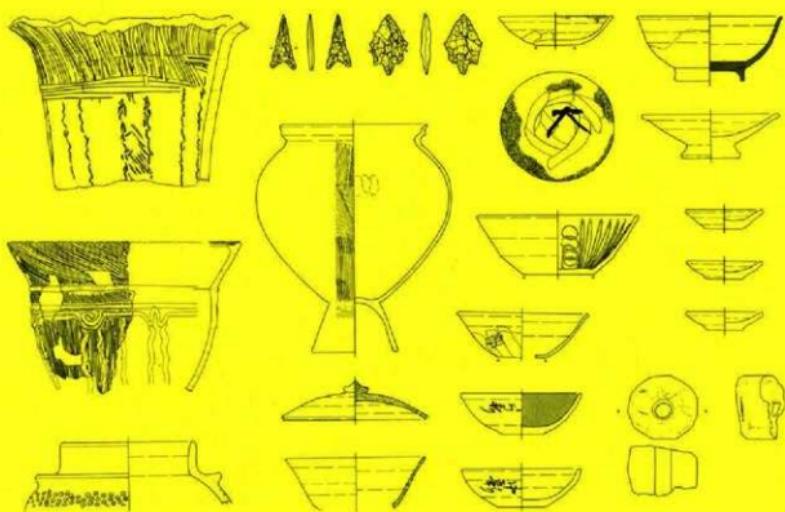


村之内II・III遺跡 高台・中谷井遺跡

県営圃場整備事業に伴う縄文時代・平安時代の
集落遺跡の発掘調査報告書



1995

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

むら の うち
村之内II・III遺跡
たか だい なか たに い
高台・中谷井遺跡

県営圃場整備事業に伴う縄文時代・平安時代の
集落遺跡の発掘調査報告書

1995

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

序

平成5年度に明野村では、県営闘場整備事業村之内工区および永井工区の施工が予定されました。この闘場整備事業に先立ち、3カ所で埋蔵文化財の発掘調査が明野村教育委員会により実施されました。この調査報告書には村之内II・III遺跡、高台・中谷井遺跡発掘調査の成果が収められています。

高台・中谷井遺跡周辺にはいくつかの縄文時代の遺跡があることが以前から知られていました。現在の明野小学校、明野中学校が建設された際にも、縄文時代の住居跡が発見されたと聞いております。また、遺跡がある永井地区には永井七池と呼ばれた湧水が点在し、かつては生活・農業用水として利用されておりました。縄文時代のはるか昔から、この湧水を人々が利用し集落を営んでいたわけです。

また、村之内II・III遺跡は闘場整備事業に先立つこと1年前に実施した試掘調査によりその存在が確認されました。茅ヶ岳山麓に所領を有したといわれる小笠原長清とほぼ同時代の平安時代末の集落ということに加え、県内でも類例の少ない、小鐵冶遺構が発見された遺跡でもあります。茅ヶ岳山麓の古代史に新たな知見が加えられたわけで、興味の尽きることはありません。

発掘調査にあたっては闘場整備施工区の関係者に有形、無形のご迷惑をおかけいたしました。お詫び申し上げるとともにご協力に深く感謝いたします。また、山梨県学術文化課、駿北土地改良事務所のみなさまには、多方面にわたりご指導、ご教示を賜りましたことを御礼申し上げます。最後に小雨が続くぐずついた夏に、濡れることもいとわず発掘調査に参加してくださった発掘作業員のみなさまのご苦労をねぎらい、御礼申し上げます。

平成7年3月31日

明野村教育委員会教育長 深澤正彦

例　　言

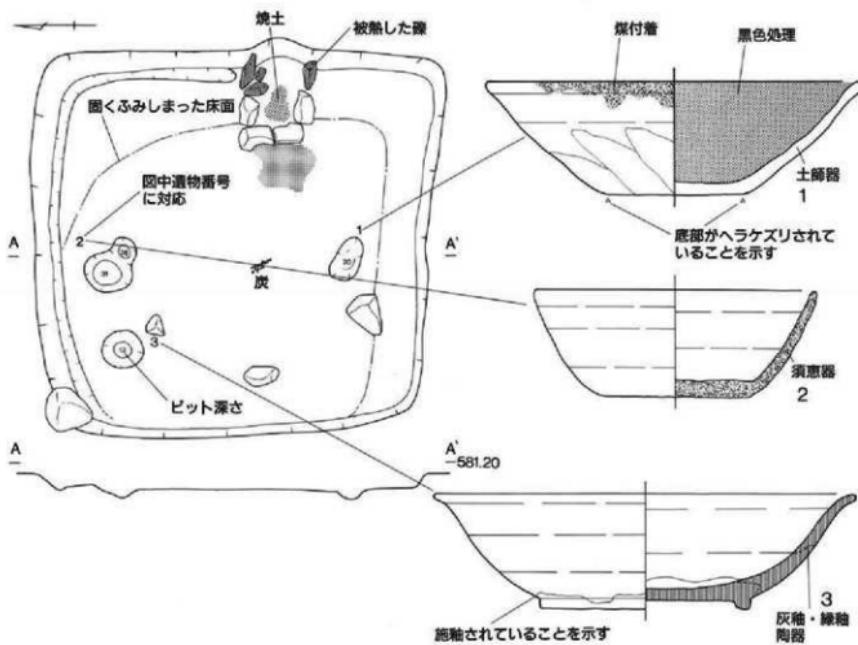
- 1 本報告書は、山梨県北巨摩郡明野村上手地内に所在した村之内II・III遺跡および高台・中谷井遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は1993年6月7日より同年9月16日まで現地での発掘調査をおこない、1994年4月1日より1995年3月31日まで遺物の整理、報告書作成作業を行った。
- 3 発掘調査にあたった組織は次のとおりである。
調査主体 明野村教育委員会 教育長 深澤正彦
調査担当者 明野村教育委員会社会教育係文化財担当 佐野隆
調査補助員 吉田光男
調査事務局 明野村教育委員会
- 4 本書の執筆・編集は佐野が行った。遺構、遺物の実測は佐野、吉川、前井、清水（さ）、入戸野（宏）が行つた。本書中の遺構、遺物の写真は佐野が撮影した。
- 5 本書作成にあたって次の方面に多くのご指導、ご教示を頂いた。ここにご芳名を記して感謝したい。（敬称略）
雨宮正樹、伊藤公明、今福利恵、梅原功一、小宮山隆、杉本允、瀬田正明、高橋みゆき、竹田眞人、萩原光雄、平野徳、保坂康夫
- 6 本文中の注、参照文献はすべて各章末にまとめた。
- 7 本遺跡の出土品および諸記録はすべて、明野村教育委員会が保管している。
- 8 調査参加者（敬称略）
阿部恵子、石渡節子、今村憲一、長田貢子、大崎喜久江、小林佳月、小松原千津、坂本依子、清水昭子、清水さゆり、清水みゆき、清水祐至、篠原愛子、鈴木晶子、筒井つや子、西川大、入戸野きぬよ、入戸野たかじ、入戸野つるじ、入戸野弘、入戸野みづ子、橋本隆廣、日比野真由、平賀あさじ、福田和久、水谷広徳、三井啓介、三井とも子、三振てつ子、皆川一子、宮川寛、守屋真弓

凡　　例

- 1 本文中の土器器胎土は次のとおり器種別に分類した。分類は肉眼観察による主観的なものであり、土器によっては異なる器種の胎土分類に近いものがある。そのような場合には器種にこだわらずもっとも近い胎土質分類にあてはめた。
- 2 A 1 類 赤色粒子が混じるキメの細かい緻密な胎土質で、色調は赤褐色もしくは明赤褐色。いわゆる甲斐型壺の胎土である。

- A 2 類 A 1 類とはほぼ同様の胎土質であるが、焼成が悪く色調が明赤褐色。
 A 3 類 赤色粒子が僅かに混じるが石英、長石の粒子が目立つややざらついてキメの粗い胎土質で、色調は暗褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。
- A 4 類 赤色粒子が僅かに混じるが石英、長石、雲母の小粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は赤褐色。甲斐型XIII期頃の环によくみられる。
- A 5 類 A 1 と同様の箇物粒子を含むがキメが粗くざらついた胎土質で、色調は赤褐色もしくは明赤褐色。
 北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。
- 甕 B 1 類 雲母、長石、石英粒子が混じるざらついたキメの粗い胎土質で、色調は暗赤褐色もしくは暗褐色。いわゆる甲斐型甕の胎土質である。
- B 2 類 B 1 類と同様の胎土質であるが、色調は黒色。
- B 3 類 B 1 類と同様の胎土質であるが、色調は黄褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。
- 非甲斐型环**
- C 1 類 雲母粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は乳白色もしくは乳灰色。現長野県で生産されたと思われる土師器。
- C 2 類 雲母粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は赤褐色もしくは暗赤褐色。
- C 3 類 雲母、長石、石英粒子とごく僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は暗赤褐色。
- C 4 類 雲母、長石粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は黄褐色。
- C 5 類 C 4 類と同様の胎土質でややキメが細かい。色調はにぶい黄褐色。
- ロクロ整形甕**
- D 1 類 雲母、長石、石英の大きめの粒子が混じるやや粗い胎土質で、色調は浅黄褐色。
- D 2 類 雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調はにぶい黄褐色。
- D 3 類 雲母、長石、石英の小粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は暗赤褐色。
- D 4 類 D 3 類と同様の胎土質で色調は黒色。
- 土師質土器**
- E 1 類 雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は暗赤褐色。甕 B 1 類胎土のキメを細かくしたような胎土質である。
- E 2 類 雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は赤褐色もしくは黄褐色。

2 本書挿図中にある数字、記号、スクリーントーンの意味は以下のとおりである。



本文目次

村之内II・III遺跡

第1章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の地理的環境	2
2 遺跡の歴史的環境	2
第2章 調査に至る経緯と発掘経過	3
第3章 縄文時代の遺構と遺物	6
1 縄文時代の遺構	6
2 縄文時代の遺物	6
第4章 平安時代の遺構と遺物	8
1 平安時代の遺構と遺物	8
第5章 その他の時期の遺構と遺物	32

高台・中谷井遺跡

第1章 遺跡をとりまく環境	44
1 遺跡の地理的環境	44
2 遺跡の歴史的環境	44
第2章 調査に至る経緯と発掘経過	46
第3章 縄文時代の遺構と遺物	46
1 遺構と遺物	46
2 遺構外出土遺物	48
第4章 平安時代の遺構と遺物	52
1 平安時代の遺構と遺物	52
2 遺構外出土遺物	65
第5章 その他の時期の遺構と遺物	65
第6章 まとめ	74
参考文献	75

図版目次

村之内II・III遺跡

第1図 村之内II・III遺跡位置図	4	第18図 8号住居跡及び出土遺物	25
第2図 村之内II・III遺跡位置図	4	第19図 9号住居跡及び出土遺物	26
第3図 平安時代道路位置図	5	第20図 10号住居跡及び出土遺物	27
第4図 銀文時代の遺物	7	第21図 11号住居跡及び出土遺物	32
第5図 1号住居跡及び出土遺物	9	第22図 11号住居跡出土遺物	33
第6図 1号住居跡出土遺物	10	第23図 12号住居跡	33
第7図 2号住居跡及び出土遺物	10	第24図 12号住居跡出土遺物	34
第8図 3号住居跡及び出土遺物	12	第25図 13、14号住居跡及び出土遺物	34
第9図 4号住居跡及び出土遺物	13	第26図 15号住居跡及び出土遺物	35
第10図 4号住居跡出土遺物	14	第27図 16号住居跡及び出土遺物	36
第11図 4号住居跡出土遺物	15	第28図 17号住居跡及び出土遺物	36
第12図 4号住居跡出土遺物	16	第29図 18~22号住居跡及び出土遺物	37
第13図 5号住居跡及び出土遺物	20	第30図 1号住居跡及び出土遺物	38
第14図 6号住居跡及び出土遺物	21	第31図 1号住居跡出土遺物	39
第15図 6号住居跡出土遺物	22	第32図 2号住居跡及び出土遺物	40
第16図 6号住居跡出土遺物	23	第33図 溝状壙構及び造掘外出土遺物	41
第17図 7号住居跡及び出土遺物	24	第34図 土坑・ピット位置図	42

高台・中谷井遺跡

第1図 磨削の櫛文時代遺跡位置図	45	第36図 土坑位置図	73
第2図 永井工区・調査区及び試掘坑位置図	45		
第3図 16号住居跡及び出土遺物	47		
第4図 遺構外出土遺物	49		
第5図 遺構外出土遺物	50		
第6図 漆器外出土遺物	51		
第7図 2号住居跡及び出土遺物	54		
第8図 3号住居跡及び出土遺物	55		
第9図 4号住居跡及び出土遺物	56		
第10図 4号住居跡出土遺物	57		
第11図 5号住居跡及び出土遺物	57		
第12図 6号住居跡及び出土遺物	59		
第13図 6号住居跡出土遺物	60		
第14図 7、8号住居跡及び出土遺物	60		
第15図 9号住居跡及び出土遺物	61		
第16図 10号住居跡	61		
第17図 10号住居跡出土遺物	62		
第18図 11号住居跡及び出土遺物	66		
第19図 11号住居跡出土遺物	67		
第20図 12、13号住居跡	67		
第21図 12号住居跡出土遺物	68		
第22図 12号住居跡出土遺物	69		
第23図 13号住居跡出土遺物	70		
第24図 遺構外出土遺物	71		
第25図 その他の時期の構造と遺物	72		

写真図版目次

村之内II遺跡

村之内II・須遺跡全景	78	10号住居	85・86
1号住居	79・80	11号住居	86
2号住居	79・80	12号住居	87・89
3号住居	80	13号住居	87
4号住居	81・82・89	14号住居	88
5号住居	82	15号住居	88・89
6号住居	83	17号住居	89
7号住居	84	18号住居	89
8号住居	84	19号住居	89
9号住居	85・86・89		

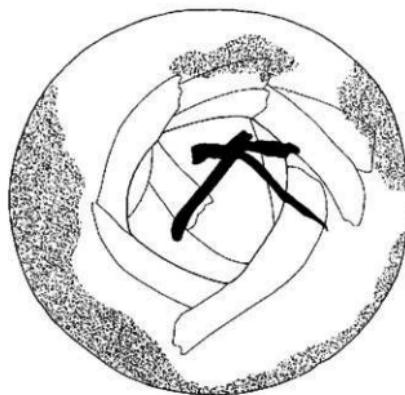
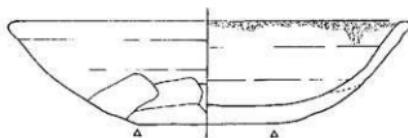
村之内III遺跡

1号住居	90・91	埋設土器	93
2号住居	92	遺漏外出土遺物	93
漆状漆構	92・93		

高台・中谷井遺跡

高台・中谷井遺跡全景	94
16号住居	95
绳文時代の土器・石器	96・97
2号住居	98・99
3号住居	99・108
4号住居	99
5号住居	100・101
6号住居	100・101
8号律器	101
9号住居	101
10号住居	102・103・108
11号住居	103
12号住居	104～108
13号住居	104～107
土壤	107・108

村之内II・III遺跡



第1章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の地理的環境 (第1図、写真1)

明野村は東に茅ヶ岳（標高1703m）、食ヶ岳（標高1764m）を望み、西は秩父山系より流れ出る塩川の断崖により区画された南北15km、東西8kmほどの茅ヶ岳山麓に位置する。茅ヶ岳山麓には、小河川が形成した谷が東西に数多くのがっているが、現在水流のある河川は北から、湯沢川、柳沢川、正業寺川などがあるだけである。いずれも小河川であり、古来、農業用水の便に苦しんだ土地柄である。しかし、茅ヶ岳山麓には南北に連なる湧泉列があり、そのうちのいくつかは現在も清水をたたえている。遺跡の多くもこれらの小河川、湧泉の近くに分布する（佐野1993）。

村之内II・III遺跡は茅ヶ岳山麓の西端を塩川が切り取るように形成した3枚の段丘面のうちの中位段丘（神取面）上に位置し、標高は492m～497mほどで、湯沢川左岸にあたる。遺跡周辺は東からの土石流や柳沢川の開削により段丘崖が浸食されながらかな傾斜面になっている。塩川との現地高差は約30m、柳沢川との現地高差は約10mである。

本遺跡から東へ600mほど離れた、同じ柳沢川左岸には縄文時代中葉から平安時代の遺跡である桑森遺跡があり、本遺跡の調査に先立ち実施された試掘調査では縄文時代前期後半の遺物も少量ながら発見されている。これらのことから、本遺跡周辺の地形は縄文時代前期後半頃まではある程度安定し、人々が生活の場として選択し得たことが推測される。また、遺跡周辺にはつい最近まで湧水があったといわれ、柳沢川と並んで生活用水としても利用されたと思われる。

2 遺跡の歴史的環境 (第3図)

本遺跡周辺の平安時代の遺跡分布をみると、本遺跡から南西方向、藤井平には宮ノ前遺跡をはじめとする平安時代の遺跡が濃厚に分布する。宮ノ前遺跡は奈良・平安時代の住居跡423軒が検出された集落遺跡で、藤井平における条里制水田の形成過程までが把握された。また、宮ノ前第2遺跡では白鳳期の寺院跡が発見されている。塩川の氾濫により形成された平坦な藤井平は、その地理的条件より奈良時代から平安時代全般を通して巨摩郡北部の一中心として位置づけられていたと思われる。

藤井平北邊部は現須下川・大豆生川から若神子にかけての塩川と須下川により形成された平底部へと連続しており、北および西側は八ヶ岳の噴火活動により形成された山麓台地に比高30mの崖を介して接している。若神子の平坦部を見おろす台地上には牧監の館ともいわれる官衙的要素をもつ湯沢遺跡や土師器焼成遺構が検出された大小久保遺跡などがある。中世初頭では政治的拠点として營まれた若神子城がある。

茅ヶ岳山麓はこの藤井平北邊部と塩川を挟んで接している。茅ヶ岳山麓にも平安時代の遺跡が点在し、これまでに明野村だけでも10遺跡が発掘調査されている。さらに慈坂牧を私牧化した小笠原の牧を管理したとされる小笠原長清居舎跡と伝えられる中世期の土塁、馬廐跡がある。

藤井平を囲む八ヶ岳南麓および茅ヶ岳山麓は平安時代中頃、9世紀代から10世紀代に属するとされる遺跡数が非常に多い。その背景に公権力による計画集落の形成や官牧の設置などにともない集落が急増したとする説（木本1986、秋原1986、岡本1990）がある。

しかし、それら集落が廃絶される10世紀末以降の遺跡数は多くなく、中世への移行期の検討はあまり進んでい

ない。現北口摩都下で発掘調査がなされた平安時代の遺跡のうち10世紀後半以降の遺構遺物がみられるのは、並崎市宮ノ前遺跡、中田小学校遺跡、中道遺跡、令山遺跡、須玉町中尾城遺跡、武川村宮間田遺跡、白州町新居道上遺跡、上北川遺跡、大泉寺寺跡遺跡、木ノ下・大坪遺跡、城下遺跡などがある（注1）。

平安時代巨摩郡に属したハナ岳南麓と茅ヶ岳山麓、藤井平周辺は甲斐源氏勃興の中心地としての位置づけが考えられるだけに、平安時代末から中世初頭の資料の蓄積とその検討が待たれる。

注1 11世紀以降としたのは平安型土器編年別以降の遺物を出土する遺構がある遺跡を挙げた。既に報告書の刊行されているものは、報告書中の時期判定に準じた。

第2章 調査に至る経緯と発掘経過

明野村では平成5年度に県営団地整備事業村之内工区の施工が計画されていた。そのため、明野村教育委員会では平成4年12月、工区内の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認するための試掘調査を工区全域で行った（第2回）。村之内工区東端は、縄文時代と平安時代の集落遺跡である桑森遺跡と工区外水田と畑を挟んで接しており、試掘調査に際して工区東部で埋蔵文化財の発掘調査が必要とされるのではという予想をもって臨んだ。

ところが、試掘調査の結果、桑森遺跡の範囲は工区まで及んでいないことが確認され、同時に工区西端で平安時代から中世と思われる遺構と遺物が集中して検出される区域が確認された。また、南側工区でも同様に住居跡が検出されたことから、前者を村之内II遺跡、後者を村之内III遺跡として遺跡の発見を文化庁に届け出た。

村之内II・III遺跡は広い面積を挟んで同一聚落を形成していたと思われるが、土地改変により現在の包蔵地は100メートル以上離れているために別個の遺跡として扱うこととした。

以上の結果を受けて、平成5年5月岐北土地改良事務所と明野村教育委員会で工事施工に先立ち、発掘調査を実施するために協議をもち、現地での調査期間を平成5年6月より8月31日とし、整理報告作業は平成6年度に実施すること、現地の発掘調査費は413万円とする発掘調査委託契約及び発掘調査経費負担協定を平成5年6月3日付けで締結した。

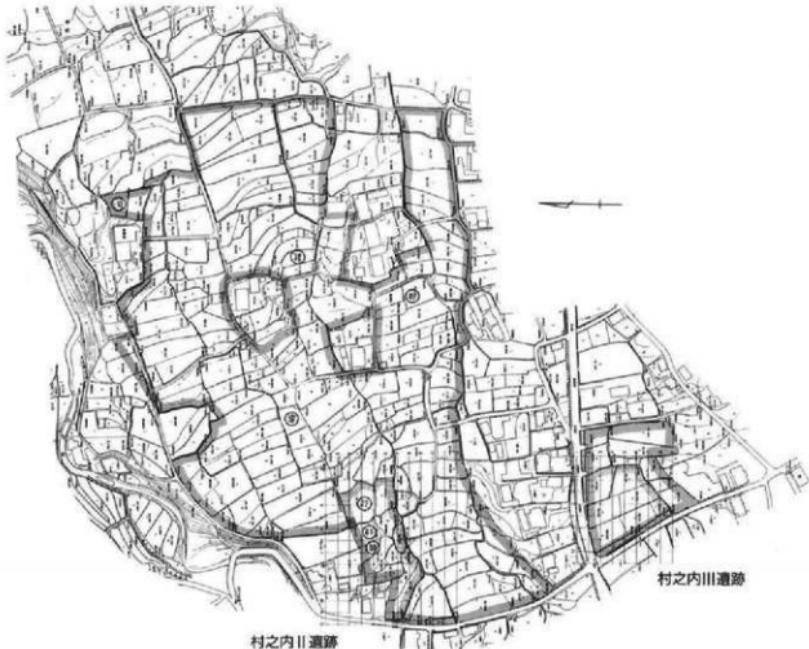
現地での発掘調査は平成5年5月20日より直轄による表土剥ぎ作業を開始し、作業員による精査、遺構調査は6月7日より始めた。調査対象範囲は、試掘調査結果をもとに遺構が土地改変による削平を免れた範囲を想定し決定した。その結果、村之内II遺跡は4、100m²、村之内III遺跡は3、500m²を調査することとなった。

平成5年の夏は雨が多くぐずついた天気が続いた。それでも村之内II・III遺跡の調査中はまだ晴れる日が多くあった。そのため、調査は順調に進行し村之内III遺跡では、明野村で初めての鍛冶遺構を検出するなどの成果を得、7月17日には調査をほぼ終了し7月19日俯瞰写真を撮影して完了した。その間、6月27日には遺跡見学会を開き、地元施工区の地権者を始めとする多くの方々に発掘調査の成果を見学してもらった。

調査により得られた資料、遺物の整理作業は、平成6年6月8日に整連作業のための調査委託契約及び調査経費負担協定を岐北土地改良事務所と明野村教育委員会とのあいだで締結し着手した。平成6年度、明野村教育委員会では5件の発掘調査を実施し多忙を極め、整理作業は順調に進んだとはいがたい。また、遺跡からの出土遺物は土器小片が多く、それらをできる限り資料化しようと心がけたため整理作業は遅れがちであった。整理作業が完了し、報告書原稿を印刷作業に入稿できたのは平成7年3月に入ってからである。



第1図 村之内II・III遺跡位置図(1/25,000)



村之内II遺跡

第2図 村之内工区・調査区及び試掘坑位置図(1/5,000)



第3図 平安時代遺跡位置図(1/100,000)

周辺の平安時代遺跡

1 中尾城跡	2 湯沢遺跡	3 小久保遺跡	4 若神子城跡	5 宮後遺跡
6 諏訪原遺跡	7 麻糬堂遺跡・中村道桂神道跡	8 北原遺跡	9 梅の木遺跡	10 肥巻遺跡
11 大豆生田遺跡	12 神取遺跡	13 桑森遺跡	14 普門寺遺跡	15 村之内II・III遺跡
16 高台中谷井遺跡	17 墓敷添遺跡	18 中道遺跡	19 伝小笠原氏館跡	20 中田小学校遺跡
21 前田遺跡	22 金山遺跡	23 宮ノ前第2遺跡	24 駒井遺跡	25 宮ノ前遺跡
26 北後田遺跡	27 堂の前遺跡	28 北下条遺跡	29 後田遺跡	30 宮間田遺跡
31 新居道上遺跡				

第3章 繩文時代の遺構と遺物

1 繩文時代の遺構

村之内II・III遺跡では繩文時代中期初頭の埋設土器1基と上坑3基が検出されたほか、繩文時代と明確に位置づけられる遺構は検出されなかった。土坑は第4章で報告してある。

第4図-1に示した埋設土器(写真16)はM-8グリッド、14号住居跡床下より検出された、繩文時代中期初頭五領ヶ台式の深体である。正位で、腹下半部が失われた状態で埋設されていた。口縁部が欠けているのは14号住居壁穴を掘り込む際に破壊されたものか、当初より尖われた状態であったのかわからない。

2 繩文時代の遺物(第4図、写真16)

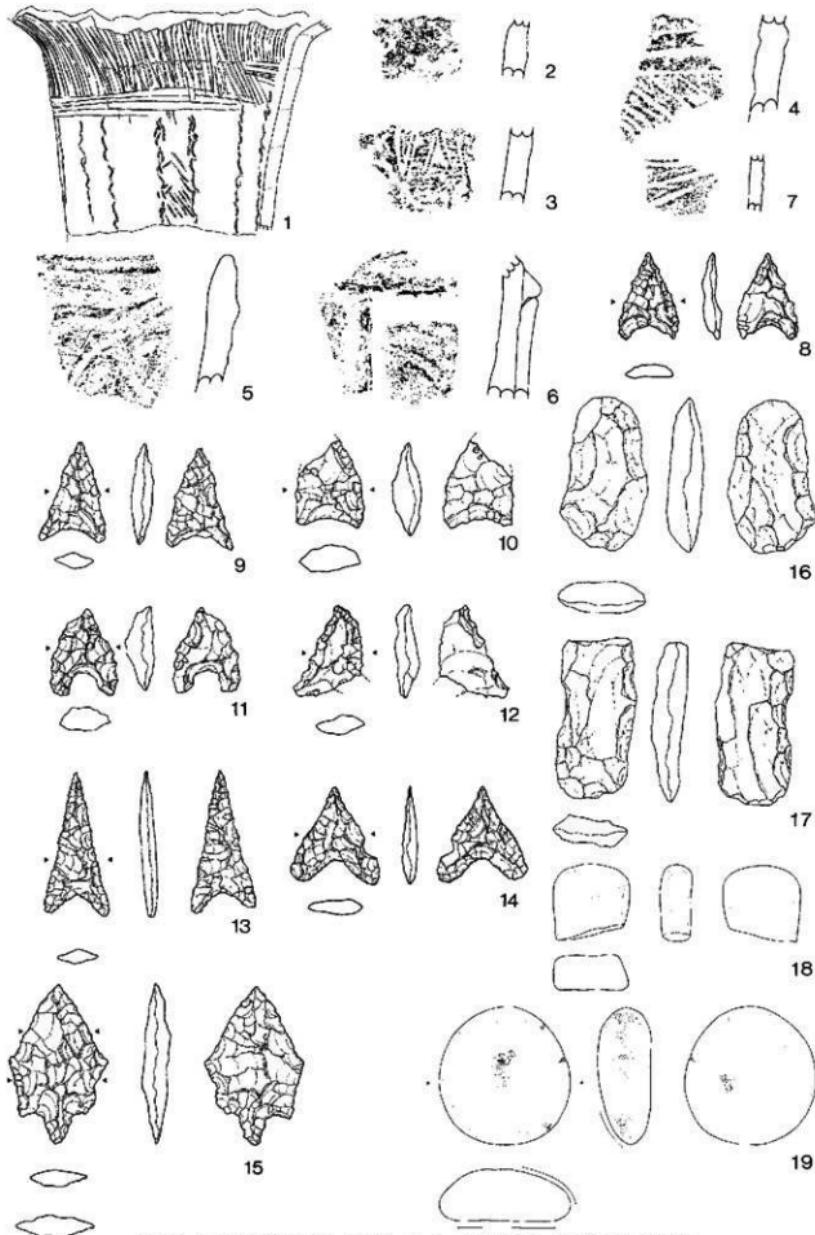
第4図に繩文時代に属する遺構外出土遺物と試掘調査で得られた遺物を掲載した。出土位置と観察所見は第1表と第2表にまとめた。

第1表 土器

図版番号	出土位置	胎土質・色調	観察所見	推定時期
2	8住覆土	織維が混入する		繩文時代早期末葉
3	9住覆土	長石粒子が目立つ 赤褐色	割りに近い深い刻みと押し引きにより施文する	繩文時代前中期末葉十三世紀式
4	9住覆土	長石、雲母粒子が目立つ さらついた胎土黒褐色	半截竹管による刻みを降線に施し、平行沈線を施す	繩文時代中期初頭五領ヶ台式
5	8住覆土	長石粒子が目立つがやや キメの粗かい胎土黄褐色	口縁底下に低い幅広隆帯を貼り付け下に沈線を施す 器内面に擦痕あり	繩文時代中期末葉～後期初頭
6	8住覆土	長石粒子が目立つ さらついた胎土黄褐色	断面三角形の隆帯を丁字状に貼り付ける 器内面に擦痕あり	繩文時代後期前半
7	15住覆土	長石、雲母粒子が目立つ さらついた胎土 暗赤褐色	浅い幅広沈線を施す	繩文時代後葉～晚期？

第2表 石器

図版番号	出土位置	石材質	重さ	図版番号	出土位置	石材質	重さ	推定時期	備考
8	6住覆土	黒曜石	0.582*	14	TP32	黒曜石	0.652*		
9	9住覆土	黒曜石	0.832*	15	18住覆土	黒曜石	1.552*	繩文時代晚期	
10	11住覆土	黒曜石	1.22*	16	6住覆土	頁岩	1252*		
11	不明	黒曜石	1.12*	17	TP81	頁岩	1102*		
12	15住覆土	黒曜石	1.052*	18	9住覆土	安山岩	2002*	全面に擦痕あり	
13	村之内III溝状遺構	黒曜石	0.82*	19	3住覆土	安山岩	7002*	一部擦痕あり	



第4図 縄文時代の遺物(1 1/4, 2~7, 8~15 1/1, 16~17 1/3, 18~19 1/4)

第4章 平安時代の遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、村之内II遺跡で住居跡22軒、村之内III遺跡で2軒が検出された。村之内III遺跡1号住居跡は、羽口、鉄洋の出土から平安時代末の鐵冶遺構と考えられる。両遺跡で検出された住居跡は、概して土地改変による削平を受けて遺存状態が悪く、豊穴掘り込みは数センチから10センチ程度にしか残っていない。また、カマドについても僅かな礫と焼土、浅い掘り込みなどからカマドであることを判断した。従ってここに報告する住居跡実測図には、一部を除いて住居所面と覆土セクション、カマド実測図を省略した。

出土遺物は床面出土遺物を優先して図示し報告した。ただし床面がはっきりしない住居は、カマド焼上の高さを床面推定高として、床面出土遺物を想定した。

遺構の時期は甲斐型土器集成グループ（1992）、森原（1994）の総年により床面出土遺物をもとに推定した。

村之内II遺跡

1号住居跡（第5図、第6図、写真2・3）

遺構の概要 5m×4.2mのややいびつな方形の平面形をもつ住居跡で、東壁南寄りにカマドをもつ。豊穴掘り込みは10cmほどが残るが、固くしまった床面は検出されなかった。

カマドの概要 東壁南寄りに焼土と赤変した礫が検出されたため、カマドと判断した。

出土遺物 1は推定口径12.5cmの甲斐型小型甕で、胎土はB1類。2は推定口径17.7cmの甲斐型小型甕で、胎土はB1類。3は推定口径22cmの土師器鉢で、胴下部は回転ヘラ削りされる。胎土はC3類だが色調は乳白色。4は推定口径19cmの甲斐型小型甕で、外面はハケメ、内面はナデで調整される。胎土はB1類。5は推定口径27.6cmの甲斐型甕で、外面ハケメ、内面はナデで調整される。胎土はB1類。

遺構の時期 磁器遺物の主体であるため、甲斐型X～初期、9世紀後半から10世紀中頃までの幅で考えておく。

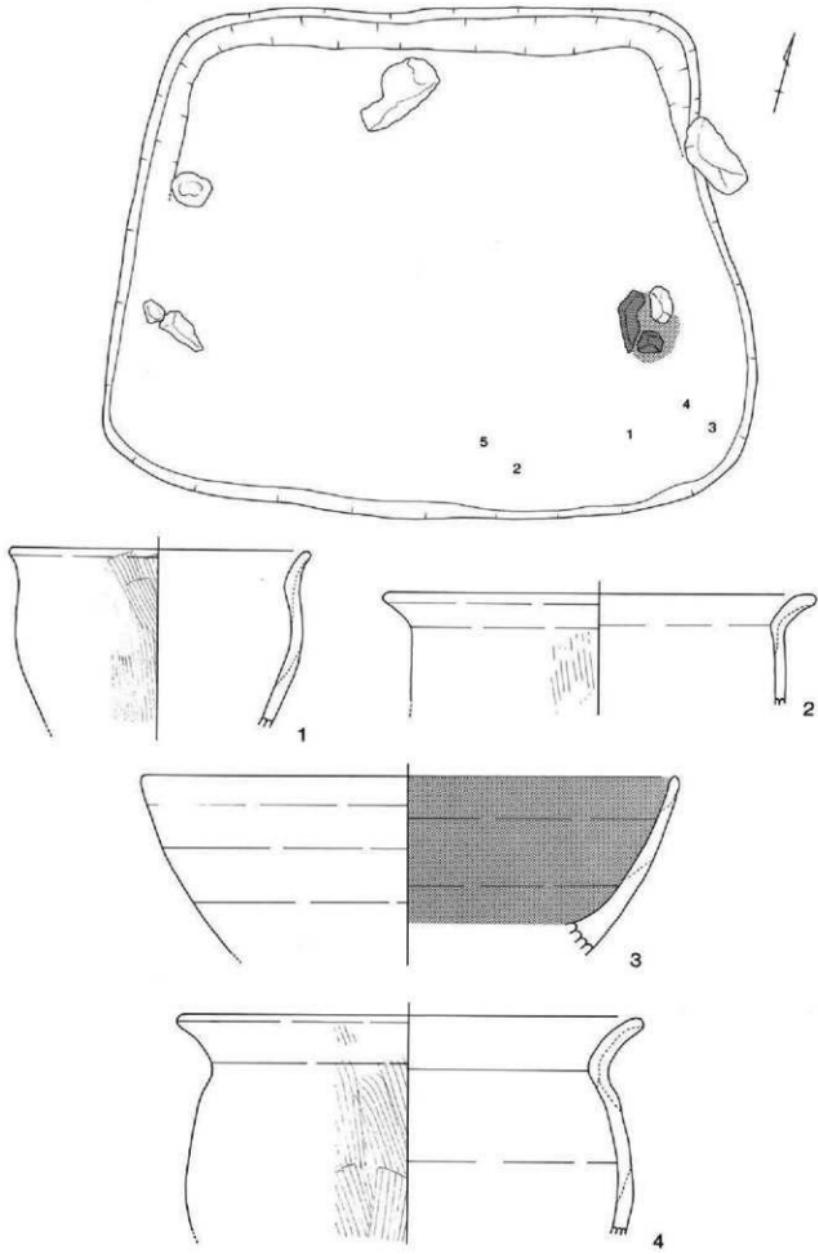
2号住居（第7図、写真2・3）

遺構の概要 1号化居西隣で検出された。4m×4.4mの方形の平面形だったと考えられる。南側は削平され、床面は検出されなかった。周溝が検出された。

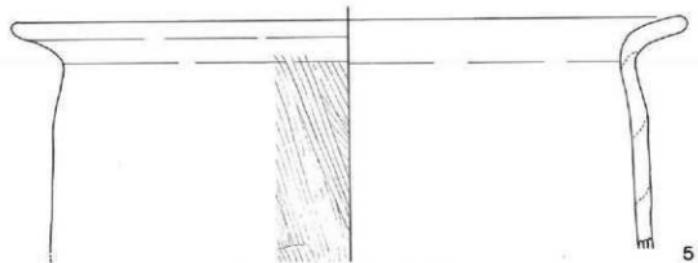
カマドの概要 住居中央で焼土が検出された。窓から離れておりカマドとは考えにくいが、東壁中央あたりにカマドがあったとも考えられる。

出土遺物 1は住居中央の焼土中から出土した甲斐型小型甕で、口径10.5cm、器高8cmの完形品である。胎土はB1類。外面ハケメ、内面はナデ調整のみ。2は推定口径26cmの平底型甕で、外面ハケメ、内面はナデ調整のみ。胎土はB1類。3も甲斐型甕で推定口径27.2cm。内外面ハケメ調整。胎土はB1類。

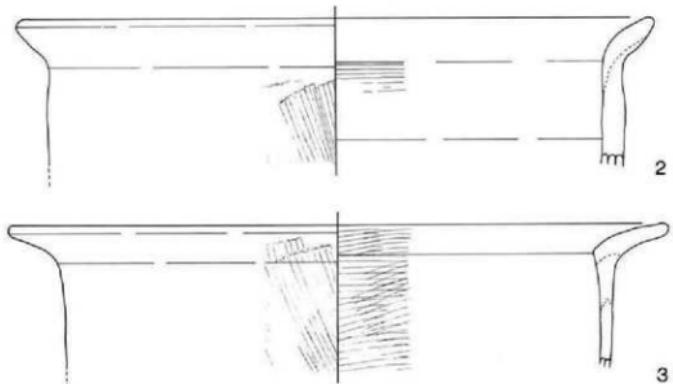
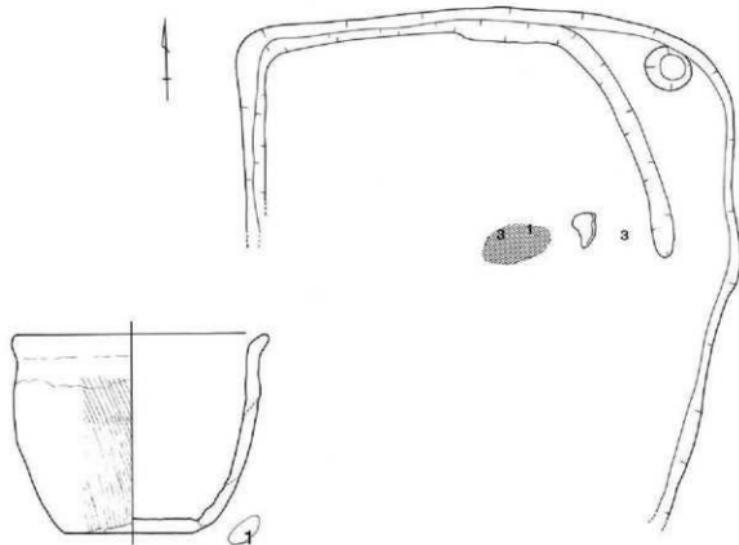
遺構の時期 遺物が少なくはっきりしないが、壺、皿の小器片には底部が全面ヘラ削りされるものがあり、内面に暗文をもつもの、口唇部が肥厚するものがないことから甲斐型VII～X期、9世紀前半から後半と推定できる。



第5図 1号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第6図 1号住居跡出土遺物(1/2)



第7図 2号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

3号住居（第8図、写真3）

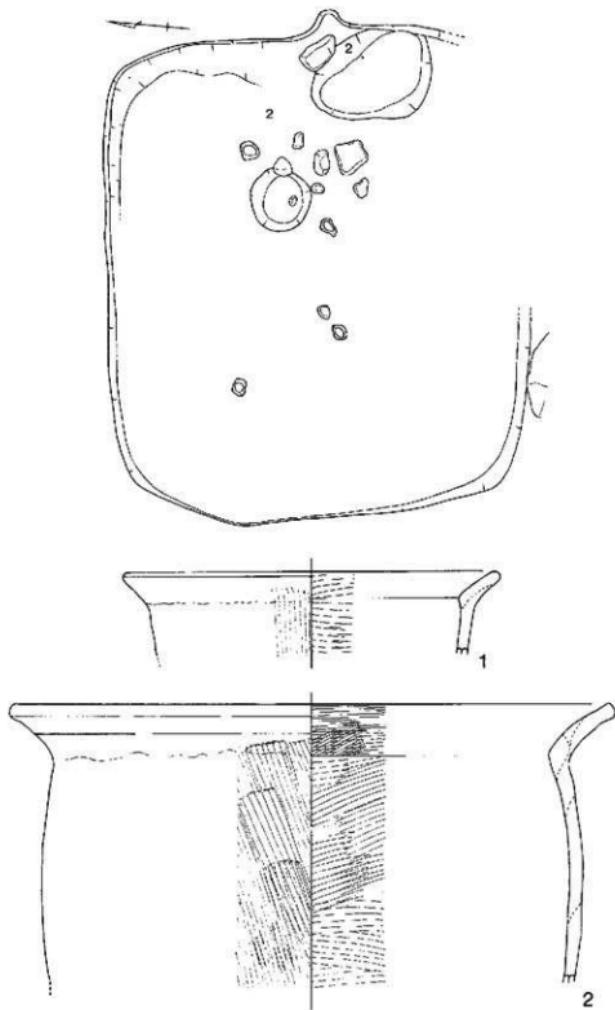
- 遺構の概要** 3.9m×3.5mの方形の平面形をもつ住居跡で、床面が全面で良好に検出された。周溝が北東隅で検出された。住居内の土坑は後段のものと思われる。
- カマドの概要** 東壁南よりに焼土と浅い掘り込みが検出された。カマドを構築した石材は残っていない。
- 出土遺物** 1は推定口径15.5cmの甲斐型小窓竈の小器片で、内外面ハケメ調整。内面の口縁屈曲部は真っ黒に焦げついている。胎土はB1類。2は推定口径25cmの甲斐型窯で、内外面ともハケメ調整。口縁が4分の1周する器片である。胎土はB1類。
- 遺構の時期** 遺物が少なく、上記2個体の窯をもとに推測すれば甲斐型Ⅳ～X期、9世紀前半から後半頃と思われる。

4号住居（第9図～第12図、写真4・5・12）

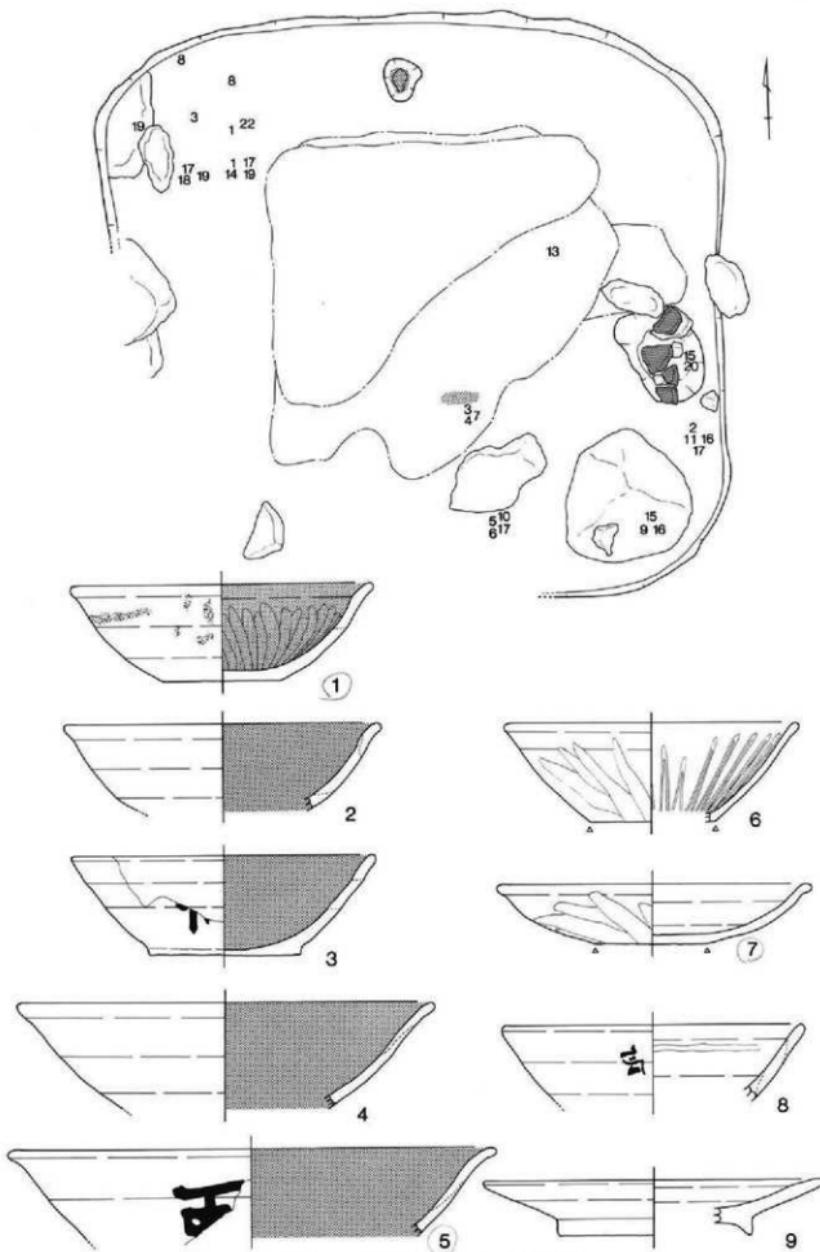
- 遺構の概要** 4.9m×4.7mの方形の平面形をもつ。床面は住居中央で良好に検出され、異なる高さで3枚が検出された。周溝は検出されなかった。住居内には地山の礫が露山しており、南北隅は平面形が確認できなかった。
- カマドの概要** 東壁南寄りに焼土と赤茶した礫、掘り込みが検出された。これが一番高い床面に伴うカマドと考えられる。さらに、北壁中央の2枚目の床面高上で小ピットと崩上がりが検出された。これは2枚目の床面に伴うカマドと推定される。
- 出土遺物** 1は推定口径12.4cm、器高4cm、底径4.8cmのIである。外面はナデ調整、内面は黒色処理され、みこみ部から口縁部にかけて放射状の磨き痕がある。胎土はC4類。2は推定口径13cm、胎土はC4類。3は12.5cmで、器高4.1cm、底径6.2cm、胎土はC3類。4は口径17.2cm、5は口径20cm。胎土はいずれもC4類。2から5はいずれも内外面ナデ調整、内面黒色処理される。4が4分の1個体分の比較的大きな器片である以外はいずれも小器片である。3、5、8には墨書きがみられるが、読みは不明である。6は推定口径12cm、器高4cmの甲斐型窯で、5分の1個体分の小片である。外側はナデに下半部ヘラ削り調整、内面には放射状暗文が施される。底部はヘラ削り。胎土はA1類。7は甲斐型Ⅲで推定口径12.9cm、器高2.5cm。Iは完形品で、外側はナデに下半部ヘラ削り調整、内面はナデ調整のみ。底部はヘラ削りされる。胎土はA1類。8は口径12.5cm、胎土はC3類。9は高台付皿で、推定口径14cm、器高2.3cm、底径7.8cm。胎土はE1類。床面高より出土しているが、他の遺物よりも若干時期が新しいと思われる。10はカキメ調整のロクロ整形小型窯で、推定口径12cm。胎土D3類。2枚目床面高より出土している。11もカキメ調整のロクロ整形小型窯で、推定口径17.6cm。小器片のみの出土であるが、口縁部から底部まで各部位の器片が揃っている。胎土はD3類。内外面ともロクロナデのみの調整である。12、13もカキメ調整によるロクロ整形小型窯で、口径はそれぞれ19.2cm、17.2cm。胎土はD2類、13がD3類。14はナデ調整のロクロ整形小型窯で、推定口径17.5cm。胎土はB3類。8号住居カマド出土の器片と接合している。15は推定口径28cmの甲斐型窯で、小器片ばかりがカマド周辺より出土している。胎土はB1類。16も推定口径26cmの甲斐型窯で、口縁が4分の1周するやや大きめの器片である。胎土はB1類。17は推定口径29.5cmの口縁3分の1周の器片で胎土はB1類、18と19は推定口径34cmと28cmの甲斐型窯で胎土はともにB1類。小器片ばかりが出土した。20、21は底部片のみの甲斐型窯で胎土はB1類。いずれも小器片である。22は須恵器壺片で、推定口径23.7cm。もっとも下の床面高で出土した。

遺構の時期

もっとも高い1枚目の床面を生活面とする住居の時期は、甲斐型X～XI期、9世紀後半から10世紀前半と思われる。2枚目、3枚目の床面については、出土遺物が限られるため、時期の推定は難しい。



第8図 3号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



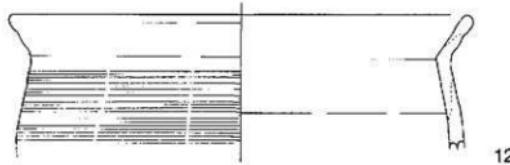
第9図 4号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



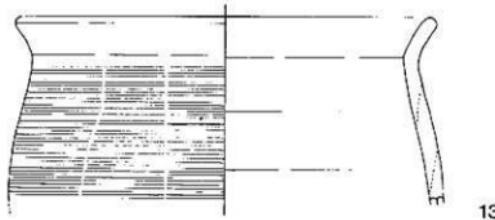
10



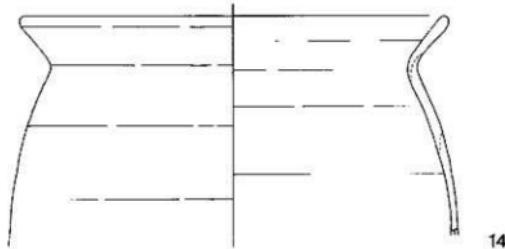
11



12

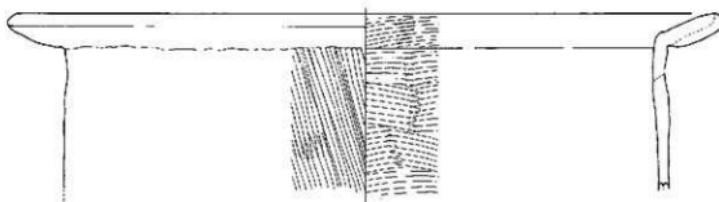
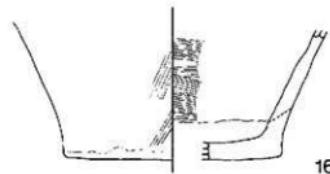
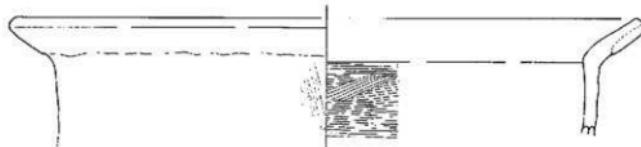
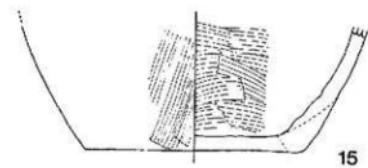
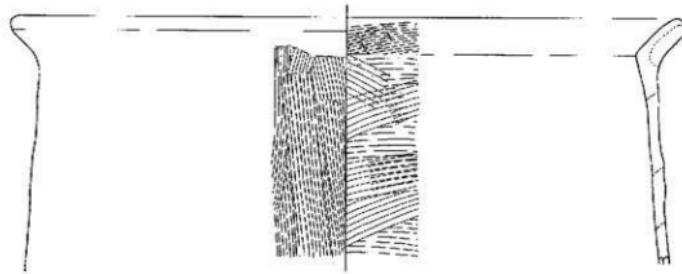


13

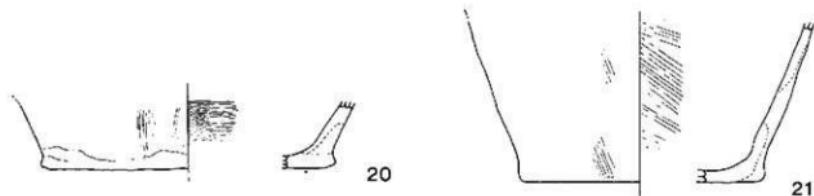
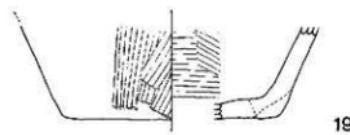
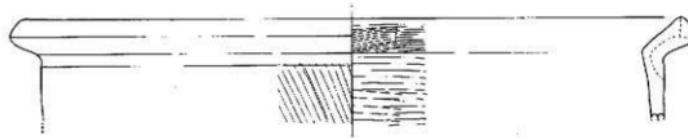
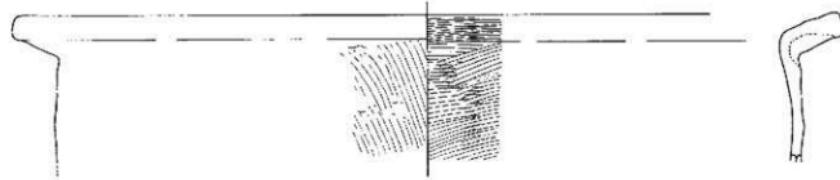


14

第10图 4号住居跡出土遺物(1/2)



第11図 4号住居跡出土遺物(1/2)



第12図 4号住居跡出土遺物(1/2)

5号住居（第13図、写真5）

遺構の概要	推定3.1m×3.8mの方形の平頂形をもつ住居跡で、西側には地山より露出する瓦礫がある。床面は住居中央部で良好に検出されたが、周溝は検出されなかった。掘り込みは10cmほど残るのみである。7号住居に切られている。
カマドの概要	住居東南隅で赤変した礫と焼土が検出された。礫はカマドの原形をとどめておらず、重ねられるようにして検出された。礫はすべてが赤変しているわけではない。
出土遺物	1は推定口径17.6cmの环小器片である。内面は黒色処理され、外面ともナデ調整のみである。胎土はA 5類。覆土より出土している。2は覆土より出土した推定口径12cmの十師質環の小器片である。器壁ははてっと厚手で、胎土はE 2類。内外面ともナデ調整のみである。3は推定口径8cmの土師質环の小器片で、覆土より出土している。内外面ともナデ調整のみ。胎土はE 1類。4はほぼ完形の甲斐型直で、住居中央部床面で逆さまになって出土した。口径は13.5cm、器高2.3cm。外面はナデ、下半部から底部は回転ヘラケズリされる。内面はナデ調整に渦巻き状の暗文がみられる。胎土はA 1類。5は推定口径32cmの甲斐型甌の小器片で、カマドより出土している。胎土はB 1類。6は甲斐型甌底部の小器片で、覆土より出土している。推定底径10cm。胎土はB 1類。
遺構の時期	遺物は少ないので、4がもっとも信頼できる資料であり、甲斐型IX-X期、9世紀中頃から後半と思われる。

6号住居（第14図～第16図、写真6）

遺構の概要	5号住居を切る7号住居をさらに切るようにして検出されたが、地山が黒色土であるため、6号住居と7号住居との切り合い関係は7号住居内の焼上の分布状態から判断したものである。また、南壁は確認できなかった。周溝は検出されなかったが、固くしまった床面は点在している。住居内には小礫が散在しているが、赤変したものは2個しかみられなかった。
カマドの概要	東壁中央に掘り込みと赤変した礫、焼土が検出されたが、カマドは原形をとどめていない。
出土遺物	1はカマド内掘り込みより出土した甲斐型环で、推定口径12.8cm、器高4.5cm。焼成が悪く胎土はA 5類。外面下半と底部はヘラケズリされる。2はカマド右側より出土した甲斐型环で、床面より20cmほど浮いた灰土内で出土した器片と、床面下で出土した器片が接合している。推定口径12cmの小器片で、口唇部はかなり肥厚している。外面下半はヘラケズリされている。胎土はA 5類。3は甲斐型环の5分の1個体分の器片で、推定口径12.5cm。胎土はA 5類。4は推定口径15.5cm、器高4.7cmの甲斐型环で、5分の1個体の器片である。焼成がやや悪く、胎土はA 5類。外面下半と底部はヘラ削り、内面は黒色処理されているようであるが、真っ黒ではなく煤けた程度である。5は推定口径16cmの甲斐型环で、6分の1個体の器片である。口唇部はやや肥厚し、外面下半はヘラケズリされる。胎土はA 1類。6は推定口径12cm、器高2.9cmの甲斐型直で、2分の1個体の器片である。焼成が悪く、胎土はA 5類。7は推定口径13.4cmの直で、内面が黒色処理される。胎土はC 4類。8も内面が黒色処理される环小器片で、推定口径は13.6cm。胎土はC 5類。9は推定口径13.4cmの小器片で、内面黒色処理される。胎土はC 5類。10は推定口径15.8cmの环小器片で、内面は黒色処理されている。胎土はC 4類。11は内面を黒色処理した甲斐型环で、推定口径15cmの小器片である。外面下半がヘラケズリされる。胎土はA 5類。12は底部3分の1個体の器片で、内面が黒色処理される。外向下半と底部がヘラケズリされる。胎土はA 1類。13は推定

口径16cm、器高5.5cm、底径6.2cmの环で、4分の1個体分の器片である。内外面ともナデ調整され、底部は回転糸切り痕が残る。胎土はC 1類。14は推定口径20cm、器高6.8cm、底径10cmの灰釉焼で、カマドより出土している。釉薬は濁け掛けされる。15も灰釉焼で、推定底径9.2cm。14と整形技法、胎土質がよく似ている。16は甲斐型小型窓の口縁部小器片である。胎土はB 1類。17、18は須恵器窓小片である。19は半斐型窓の小器片で、カマド右側覆土より出土した。胎土はB 1類。20は甲斐型窓小器片で推定口径34cm。内面はナデ調整のみ。胎土はB 1類。21は住居南東隅の覆土より出土した甲斐型窓の小器片で、推定口径33cm。胎土はB 1類。22はカマドより出土した甲斐型窓で口縁部が3分の1残する器片である。推定口径29.6cm。胎土はB 1類。23はカマドより出土した推定口径30cmの甲斐型窓小器片である。外面にはハケメがなく、縱方向のナデ調整のみらしい。胎土はB 3類だが雲母粒子を含む。24はカマドより出土した甲斐型窓小器片で、推定口径30cm。胎土はB 1類。25は推定口径28cmの甲斐型窓小器片で、口縁は肥厚している。胎土はB 1類。20と25は两者とも底部がカマド内で出土し、体部が住居南壁沿いの板上中より出土している。

遺構の時期 甲斐型XI-XII期の遺物が出土したことから、9世紀後半から10世紀前半と思われる。

7号住居（第17図、写真7）

遺構の概要 6号住居に切られる。5号住居の床面を切るように検出されたが、地山は黒色土であるため確認面で正確に切り合った関係が判定できたわけではない。7号住居のカマドは焼土を残して全く原形をとどめていないため、5号住居が7号住居を切っている可能性もある。

カマドの概要 東壁南寄りに焼土が検出された。この焼土の下から敷石を施した焚き口が検出された。

出土遺物 1はカマド左側の床土10cm高で出土した环で、推定口径17cm。内面は黒色処理される。胎土はA 5類。2はカマド手前の床面で出土した环で、推定口径17.3cm。内面は黒色處理され、内外面ともナデ調整のみである。胎土はC 4類。3は推定口径13cm、器高2.8cmの甲斐型窓で、カマドと東壁のあいだで出土した。外面下半から底部にかけてヘラケズリされる。内面の体部屈曲は比較的明瞭である。墨書きがあるが、読みは不明。胎土はA 1類。4はカマド焼土内より出土した甲斐型窓である。胎土はB 1類。5は2と同じ位置で出土したロクロ整形小型窓で、推定口径14.5cm。胎土はB 3類。6は1とは同じ位置で出土したロクロ整形窓の底部部で、底部は回転糸切り未調整。胎土はB 3類。7はカマドと東壁のあいだで出土した甲斐型窓小器片である。胎土はB 1類。

遺構の時期 甲斐型上師器は甲斐型X期、9世紀後半頃と思われる。

8号住居（第18図、写真7）

遺構の概要 削平のため、東側3分の1だけが検出された。區くしまった床面がカマド北側で検出された。周溝は検出されなかった。住居内のピットはいずれも後世のものと思われる。中世の遺物が出土し、住居内には赤変した礫が散在するため、中世の遺構が切っている可能性もあるが、そのような遺構は削平のためか検出されなかった。

カマドの概要 東壁南よりに焼土と赤変した礫が検出された。

出土遺物 1は推定口径28cmの甲斐型窓で、口縁部3分の1残の器片である。カマドより出土している。胎土はB 1類。

遺構の時期 出土遺物が限られるため、時期の推定は困難であるが、1の甲斐型壺は甲斐型X期頃と思われる。また、カマドより出土したロクロ整形小型壺の小器片が4号住居床面出土の小器片と接合していることから、9世紀後半から10世紀前半頃と考えておく。

9号住居（第19図、写真8・9・12）

遺構の概要 3.7m×3.7mの方形の平面形で、本遺跡中では掘り込みが比較的良好に検出された。広くしまった床面は残っていない。周溝が北壁側で検出された。住居内には小礫が散在しているが、赤変したものを見たらない。

カマドの概要 東壁南寄りで櫛込みと焼土、赤変した礫が検出された。

出土遺物 2はカマド側で出土した甲斐型壺底部片で、体部下半から底部がヘラケズリされている。胎土はA3類。3は推定口径13cmの甲斐型壺小器片で、「匂」の墨書がある。覆土より出土している。胎土はA1類。4は推定口径13cmの甲斐型壺の小器片で、口唇部が肥厚する。覆土より出土している。胎土はA4類。5は覆土より出土した甲斐型と思われる壺で、5分の1個体分の器片である。推定口径は15.2cm、内面が黒色処理される。口縁部の外反具合は若干甲斐型壺とは感じが違うようと思われ、胎土もA1類だから色調は暗黄褐色でやや異質である。6はカマド左側床面高で出土したロクロ整形小型壺の4分の1個体分の器片で、推定口径17cm。胎土はD2類。7もカマドより出土したロクロ整形小型壺片で、胎土はD2類。8はカマド左側で出土した推定口径34cmの甲斐型壺小器片である。胎土はB1類。以上の遺物の他に8号住居で出土した内耳土器と同一個体と思われる内耳土器片が覆土で出土している。

遺構の時期 覆られた遺物から推測すると9世紀末から10世紀中頃と思われる。

10号住居（第20図、写真8・9・12）

遺構の概要 東西10mの住居で、削平のため北側2分の1だけが検出された。11号住居を切る。中央部で広くしまった床面が検出された。周溝は検出されなかった。焼土と炭が散在しているが、被災住居を思わせるほどの量は検出されていない。

カマドの概要 住居北東隅で焼土と炭、礫が検出された。この位置にカマドが検出される例は本遺跡中、10号住居だけである。

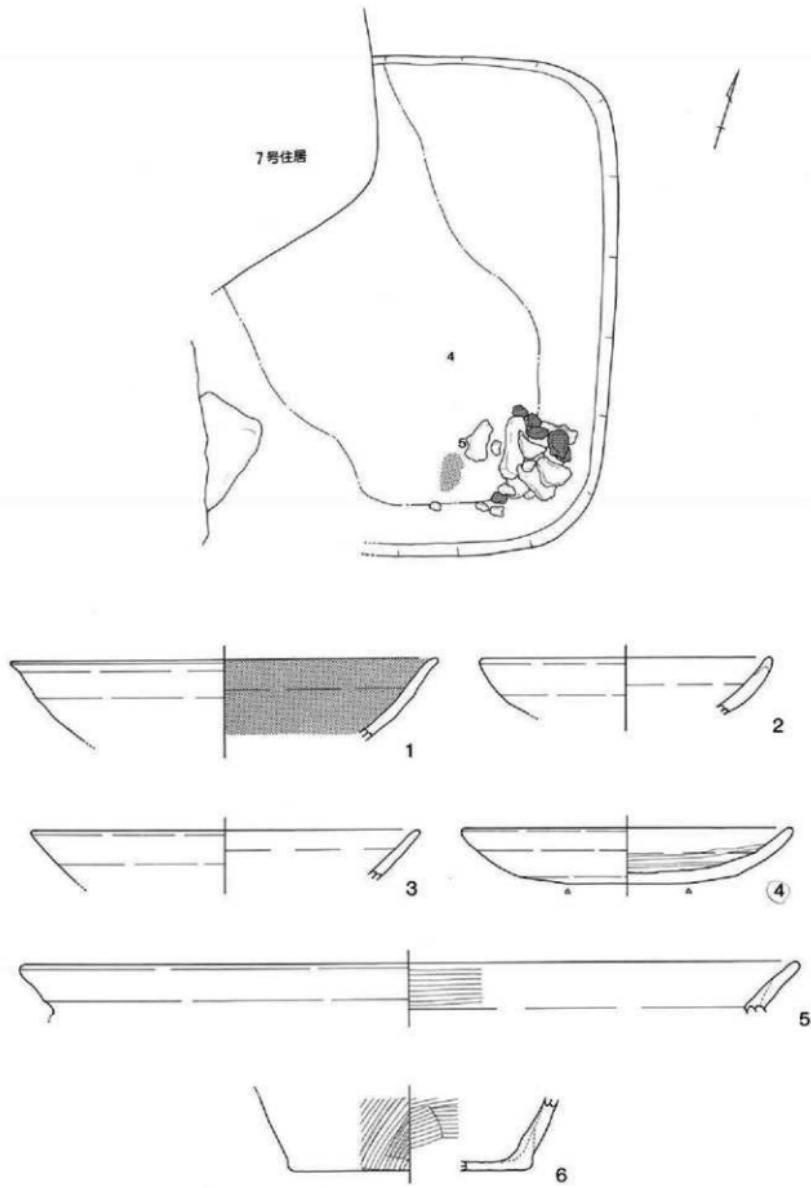
出土遺物 1はカマドより出土した土師質皿で3分の2個体の器片である。推定口径8.2cm、器高1.8cm、底径4.4cm。胎土はE1類。2は覆土より出土した甲斐型小型壺の小器片で、推定口径19cm。胎土はB1類。3はカマドより出土した推定口径29cmの甲斐型壺小器片である。胎土はB1類。

遺構の時期 覆土より出土している遺物は甲斐型壺-X期頃と思われる小器片が多いが、1とカマドの特異な位置から平安時代末から中世初頭と考えたい。

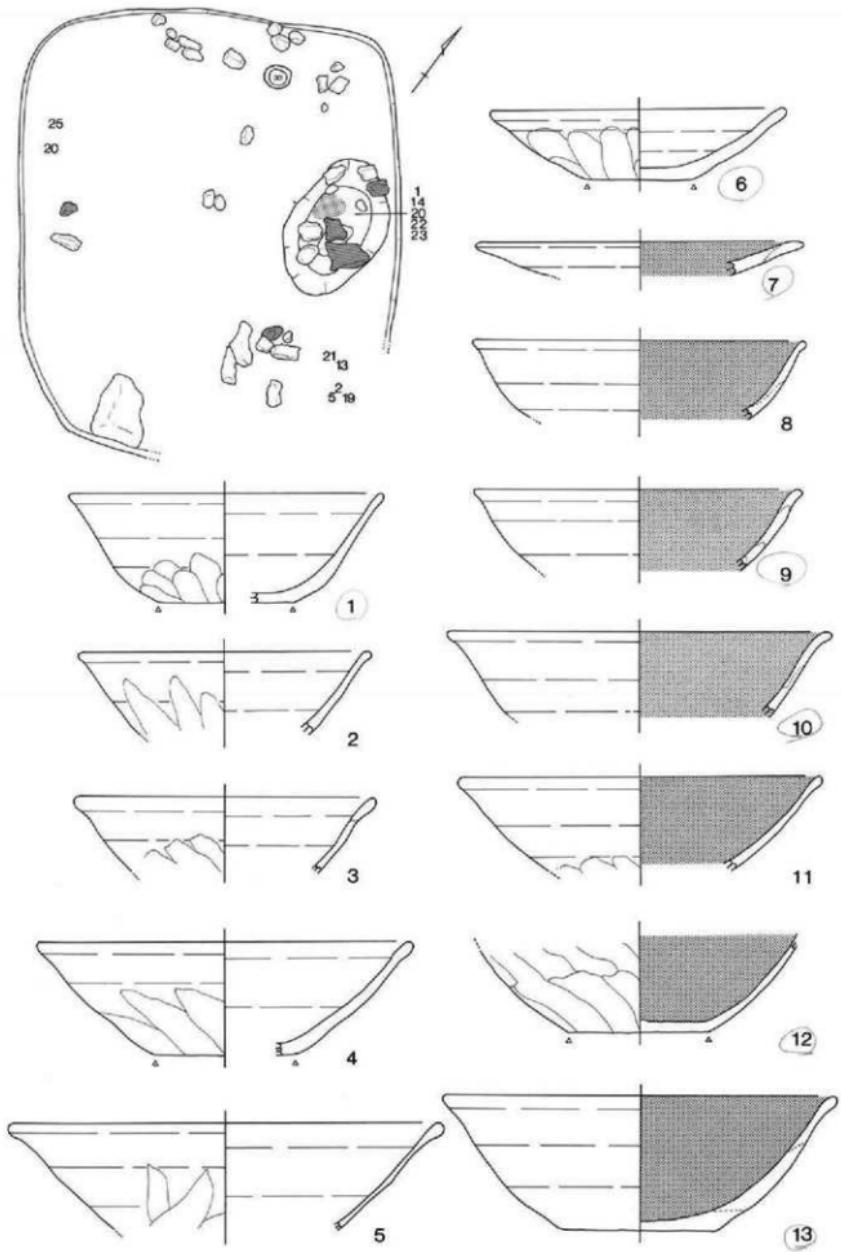
11号住居（第21図、第22図、写真9）

遺構の概要 東西3.7mのやや小型の住居で、11号住居に切られるが、南壁は明晰に検出できなかった。北壁沿いには周溝が検出された。床面は全面に良好に残る。焼土と炭が散在するが床面より10cmほど浮いている。

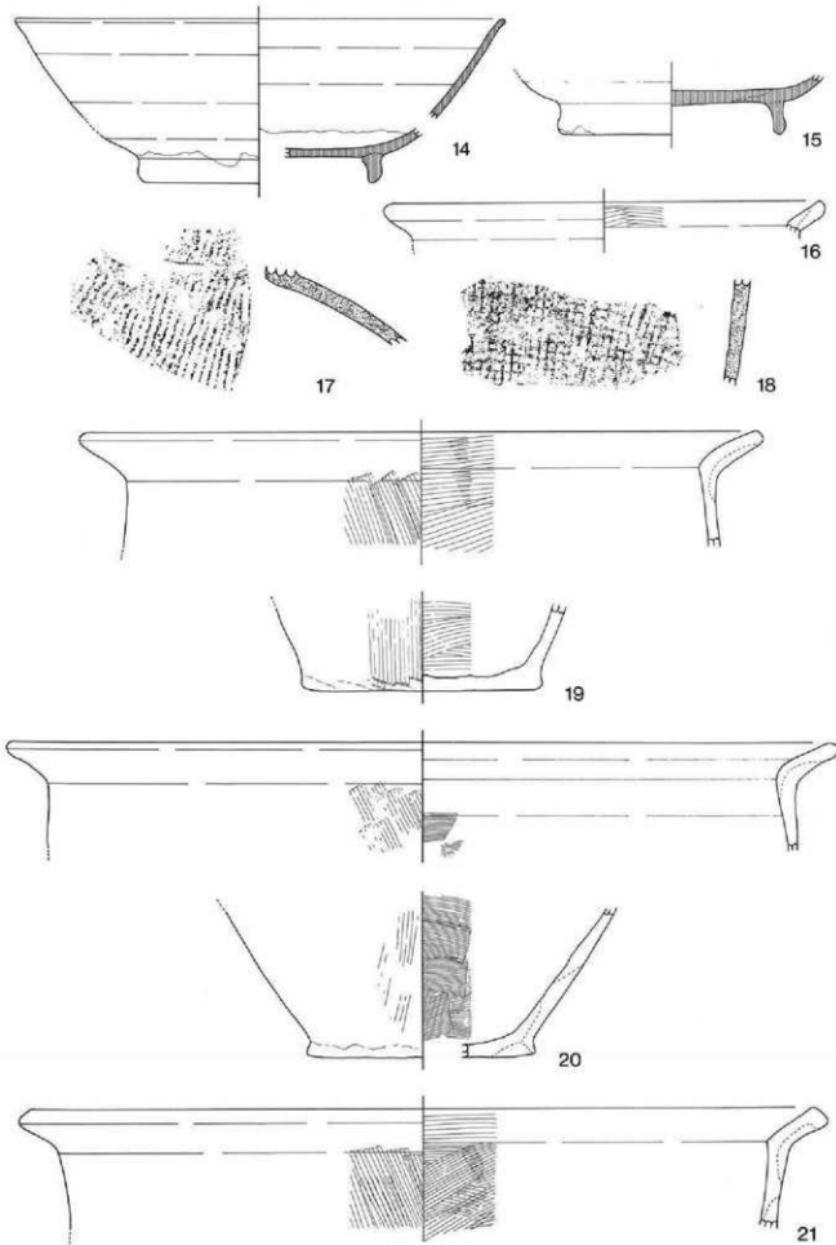
カマドの概要 東壁南寄りで焼土と礫が検出されたが、カマドは原形をとどめていない。礫は被熱した痕跡がみられないが偏平で長方形のものが多い。



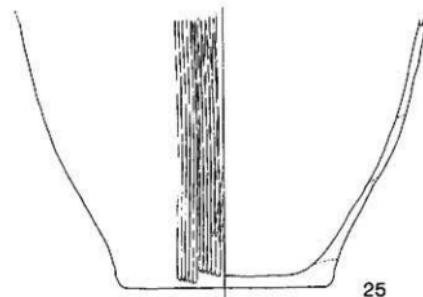
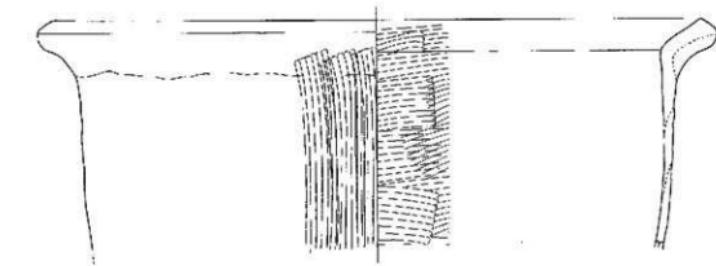
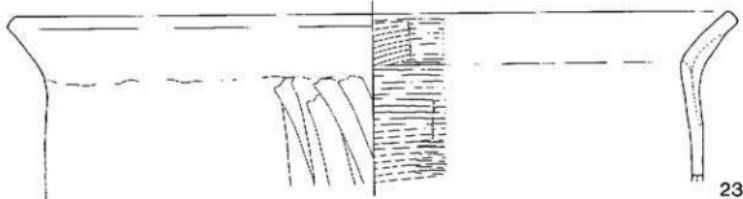
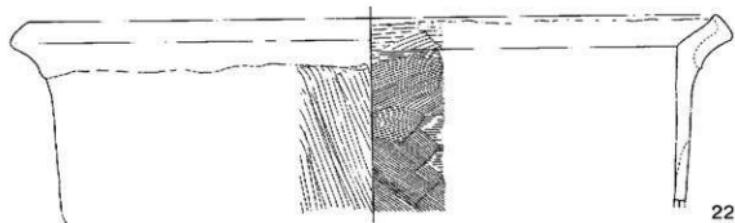
第13図 5号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



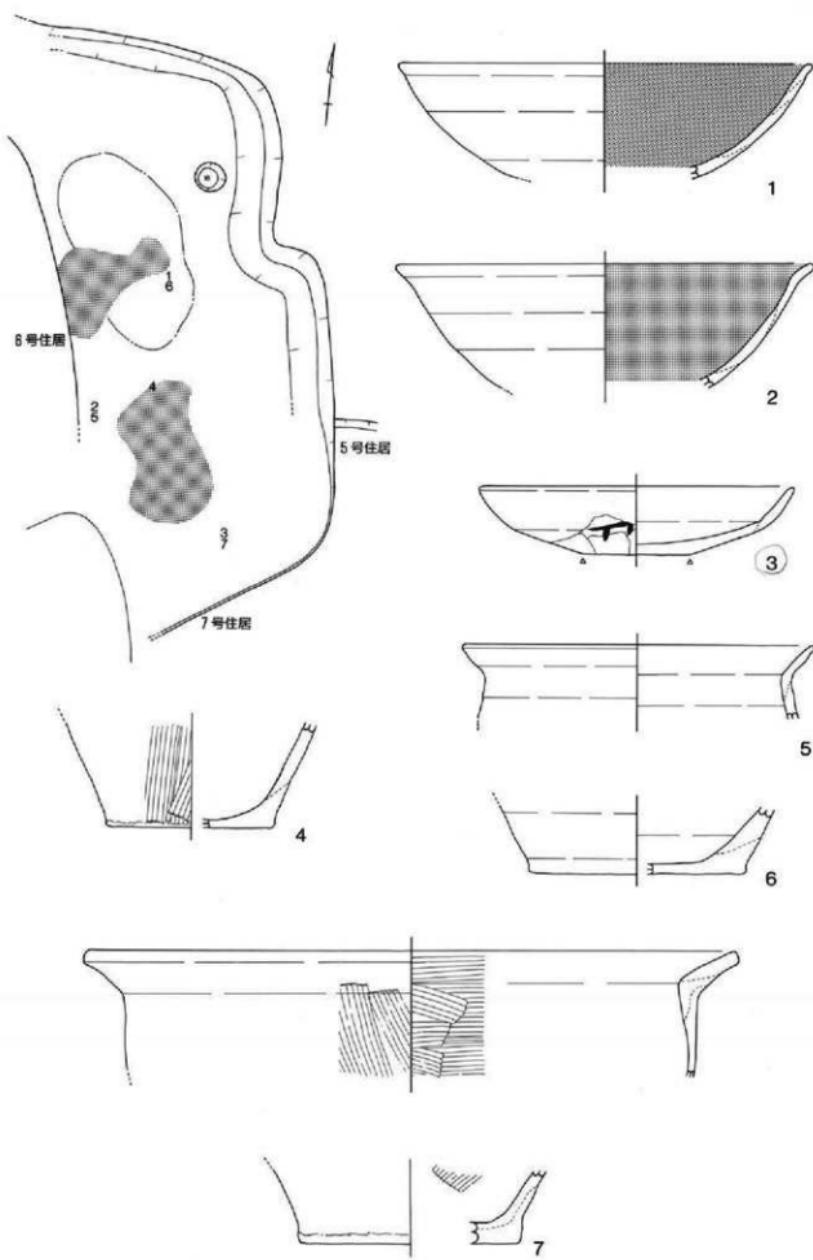
第14図 6号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



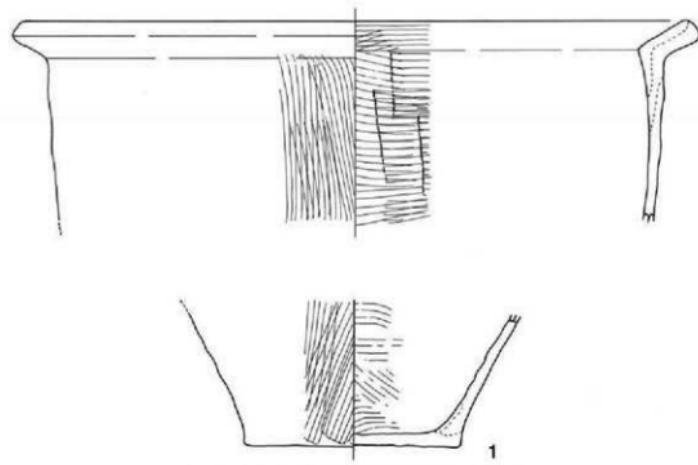
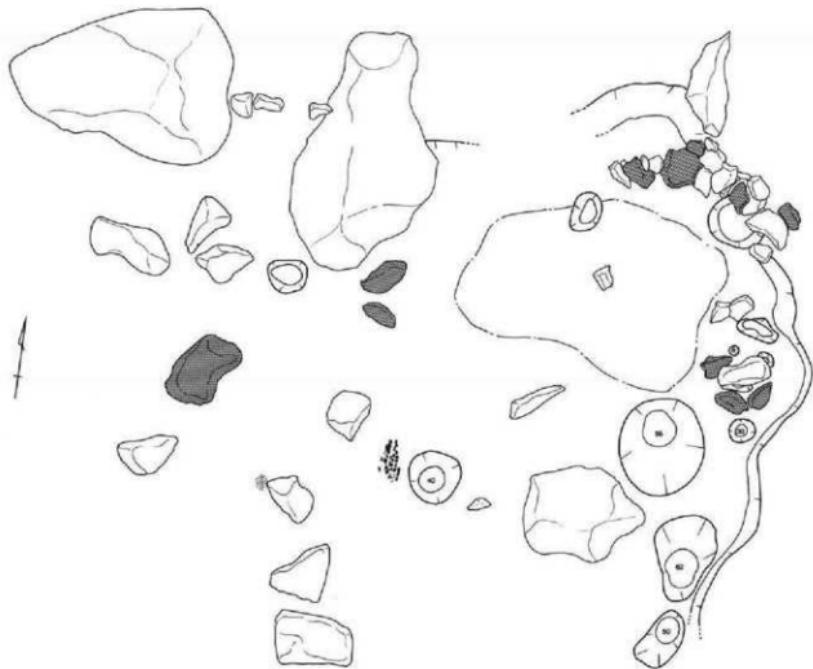
第15圖 6號住居跡出土遺物(1/2)



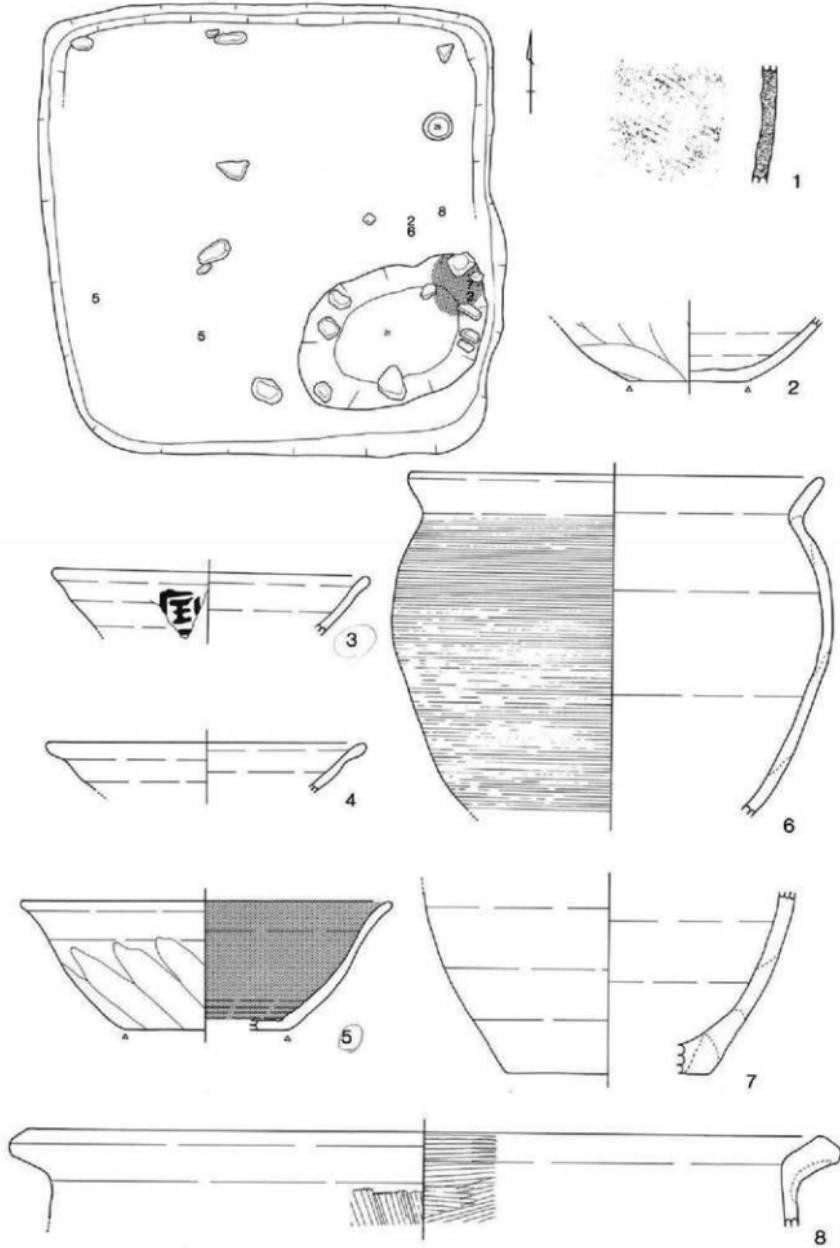
第16図 6号住居跡出土遺物(1/2)



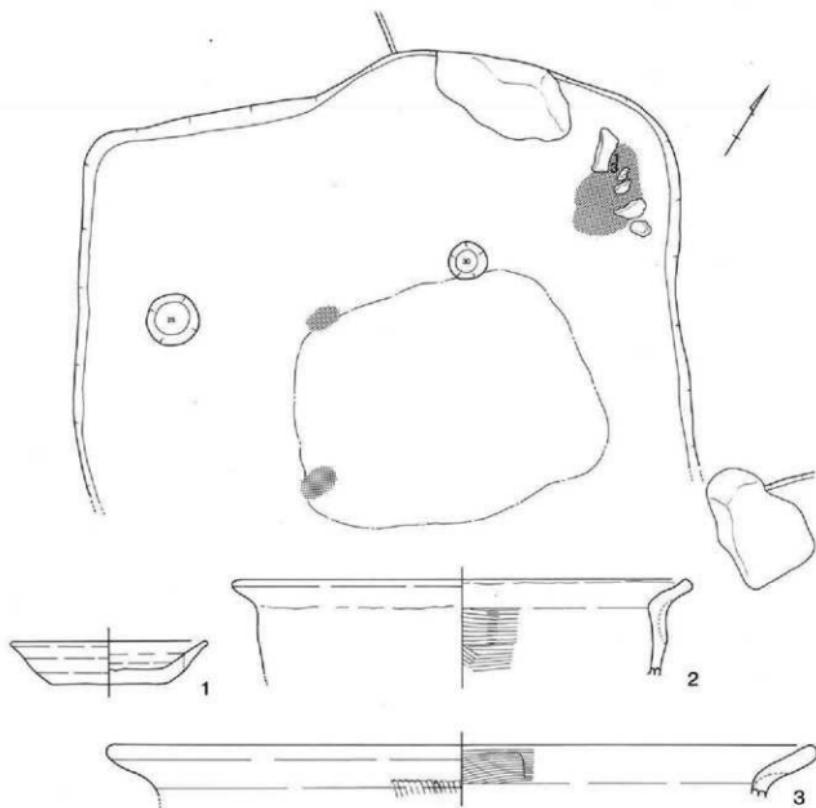
第17図 7号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第18図 8号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第19図 9号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第20図 10号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

出土遺物

1はカマド内焼土より出土した推定口径14.8cmの甲斐型環の小器片で、外面下半はヘラケズリされる。胎土はA 1類。2もカマドより出土した甲斐型皿の小器片で、推定口径14.8cm。外面下半はヘラケズリされる。口唇部は肥厚している。胎土はA 1類。3は東壁沿いで出土した完形の環で、口径12.7cm、器高4.2cm、底径5.5cm。内面は黒色処理され、底部は回転糸切り未調整。胎土はC 5類。4も3と同位置で出土した環で、口径12.6cm、器高4.5cm、底径5cm。整形技法は3と同様で、内面は黒色処理される。みこみ部から口縁にかけて放射状の縱方向の磨き痕がみられる。胎土はC 2類。5はロクロ整形小型甌で出土位置は不明。推定口径17cmの小器片である。胎土はD 3類。6はカマド焼土内より出土した甲斐型小型甌の小器片で、推定口径18cm。胎土はB 1類。7はカマド手前の焼土より出土した推定口径34cmの甲斐型甌の小器片である。胎土はB 3類だが色調は乳灰色。8は推定口径35cmの甲斐型甌の小器片である。胎土はB 3類だが乳灰色。

遺構の時期 出土遺物は甲斐型X期が多いことから9世紀末から10世紀前半と思われる。

12号住居（第23図、第24図、写真10・12）

遺構の概要 南側は後世の暗渠により破壊されている。また、内側は10号住居と接し、おそらく切られていると思われる。東壁沿いに僅かに窓溝が検出された。北壁側には20cmほど高くなった棟状の角があるが、住居に直接接する施設なのか、それとも古い住居なのか判定できなかった。カマド手前の上坑は検出面上にカマドの焼上が散在しており、住居よりも以前のものである。固くしまった床面がカマド周辺で若干残っていた。

カマドの概要 東壁南寄りに浅い掘り込みと焼土が検出された。

出土遺物 1はカマドより出土した平菱型壺の小器片で、推定口径16.2cm。内面には放射状の暗文がみられる。胎土はA1類。2は平菱型壺の小器片で、読み不明の墨書きがみられる。胎土はA1類。出土位置不明。3はカマドより出土した甲斐型小型甕で、推定口径16.6cm。口縁が3分の1周する器片である。胎土はB1類。4はカマドで出土した甲斐型甕の底部片で底径は9.2cm。胎土はB1類。

遺構の時期 見られた小器片をもとに推定すれば甲斐型X期前後、9世紀後半から10世紀前半と考えられる。

13号住居（第25図、写真10）

遺構の概要 住居中央を後世の暗渠により破壊され、南側を14号住居に切られる。東西6mのやや大型の方形の平面形をもつ住居で、固くしまった床面が全面で検出された。窓溝がほぼ全周で検出された。炭と焼上が散在するが被災住居と判断するほどの量ではない。

カマドの概要 東壁南東隅に炭と焼土、礫が検出された。

出土遺物 1は住居内西側の小ピットより出土したロクロ整形甕小器片で、胎土はE1類。底部は回転糸切り未調査である。胎土質より考えると信州系のいわゆるロクロ整形甕ではなく、平安時代末から中世の十師質甕と思われる。

遺構の時期 出土遺物がごく少量のため、推定は難しい。1の胎土質よりすれば、平安時代末から中世と思われるが、住居構造から平安時代末、11世紀代としておきたい。

14号住居（第25図、写真11・12）

遺構の概要 北壁一部が遺構のように見えたが、塚山が黒色土であるため確実に住居とは断定しきれない。13号住居を切る。周溝、床面は全く検出されなかった。绳文時代中期初頭、五領ヶ台式の深鉢が埋設されていた。

カマドの概要 東壁沿いに示唆した礫が一個出土しただけで、カマドらしい遺構は全く検出されなかった。

出土遺物 2は13号住居との境で出土した土師質小皿で、ほぼ完形である。口径は9cm、器高2.2cm、底径4.5cm。胎土はE1類。底部は回転糸切り未調査。

遺構の時期 14号住居が住居ではないとすれば、2は13号住居に属する遺物であろう。2は平安時代末、11世紀代と考えておく。

15号住居、竪穴状遺構（第26図、写真11・12）

遺構の概要 6.4m×5.6mのやや大型の住居で、西壁は住居状の竪穴遺構と削平のため、明瞭に検出されなか

った。床面は中央部で良好に残り、北壁沿いで周溝が検出された。住居中央の周溝状の溝と小ピットは本住居に属するものか判定できなかった。堅穴状遺構では炭、焼土、被熱した礫が検出されたが遺物は出土しなかった。

カマドの概要 南東隅に焼土が検出されたのみで、ほかにカマドらしい施設は検出されなかった。

出土遺物 1は土師質小器片で、胎土はE 1類。2は推定口径14cmの灰釉碗の小器片で、カマドより出土している。釉薬は内面にだけ施され外面には施釉されていない。3はほぼ完形の土師質皿で、カマド焼上上で出土した。口径は14.8cm、器高4.6cm、底径5.8cm。胎土はE 1類。5は3と同様の胎土質の土筋質高台付皿もしくは壺の小器片である。4は灰釉碗で胎土より出土している。推定口径14cmで6の同一個体と考えられる底部片が住居内小ピットより出土している。

遺構の時期 土師質土器より推測すると平安時代末、10世紀末～11世紀後半と考えられよう。

16号住居（第27図）

遺構の概要 東西4mの方形の住居で、北半分は水路と石垣により破壊されている。床面は中央部で良好に残るが、周溝は検出されなかった。

カマドの概要 南東隅に焼土と礫が検出された。

出土遺物 1は住居西壁沿いで出土した灰釉碗で推定口径17.4cm、器高4.7cm、推定底径8.5cm。施釉は内面のみで外面にはまったく施釉されない。

遺構の時期 灰釉1点で判断すると平安時代末、11世紀前半と思われる。

17号住居（第28図、写真12）

遺構の概要 南北5.3mのややいびつな方形の住居で、西半は石垣と道路により破壊されている。床面は中央部で良好に残るが、周溝は検出されなかった。

カマドの概要 南東隅に焼土が検出された。

出土遺物 1は土師質小皿の2分の1個体片で、推定口径8.1cm、器高1.9cm、底径4.3cm。カマド手前の小ピット肩より出土している。胎土はE 2類。2は土師質小皿で、カマド左側より出土。ほぼ完形である。口径は8.3cm、器高1.9cm、底径4cm。胎土はE 1類。3も土師質小皿で口径8.2cm、器高2cm、底径3.8cm。住居中央床面上より出土している。胎土はE 1類。5はほぼ完形の柱状高台付皿で、口径14.8cm、器高4.8cm、底径6cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はE 1類。4は土師質の鉢で底径9.6cm。胎土はE 1類。

遺構の時期 11世紀後半～12世紀前半と思われる。

18号住居（第29図、写真12）

遺構の概要 南東隅だけが検出された。北半は後世の暗渠により破壊され、西半は道路と石垣により破壊されている。床面が南北で良好に残るが、周溝は検出されなかった。

カマドの概要 南東隅で焼土と掘り込み、赤変した礫が検出された。

出土遺物 1は壺の底部小器片で、住居内の小ピットより出土した。胎土はC 1類。

遺構の時期 出土遺物はわずか1点のみで推測のしようもないが、カマドの位置を他の住居と比較して平安時代末と考えておく。

19号住居（第29図、写真12）

遺構の概要 方形の平面形が何となく見えたのだが、カマドらしい施設も床面も周溝も検出されず、住居であるかどうか判断できない。中央部に焼上が僅かに検出された。4号住居との切り合い関係も不明である。

カマドの概要 住居中央の焼土を除けば、カマドらしい施設は全く検出されなかった。

出土遺物 2は軟質須恵器坏で、推定口径13cm、器高3.6cm、底径5cm。「生」の墨書がある。3は軟質須恵器坏で、推定口径12cm、器高3.4cm、推定底径4.8cm。4は軟質須恵器坏で、推定口径12cm、推定器高3.5cm、推定底径4.8cm。底部は回転糸切り未調整。5は土師質坏の小器片で、推定口径は15.4cm。胎土はE1類。

遺構の時期 須恵器坏より推測すると9世紀後半頃と思われる。

20~22号住居（第24図、写真12・16）

遺構の概要 削平のため北壁の一部と周溝のみが検出された。さらに西側には礫を並べた溝状の造構と固くしまった床面状のものが検出されたが、どのような性格の造構か不明。

カマドの概要 20号住居では東壁中央と思われる位置で焼土が検出された。

出土遺物 6は20号住居で出土した甲斐型小型甕の小器片で、推定口径18.6cm、胎土はB1類。7は21号住居より出土した砥石片である。

遺構の時期 平安時代としかわからない。

村之内川・1号住居（第30図、第31図、写真13・14）

遺構の概要 3.9m×3.6mの小型の住居で、羽口、鉄滓等が出土したことから鍛冶造構と推定される。床面と周溝が良好に検出され、住居東南隅のカマド右側に焼土と炭が集中する箇所が見られた。住居中央には浅い掘り込みが検出されたが、掘り込み内に焼土、炭は検出されなかった。また、住居南東側の焼上たまりと中央の掘り込みのあいだに、炭と若干の焼上がたまた小ピットが検出された。金末瓦らしき礫はなかった。出土遺物中に、他の住居ではよく出土する要器片がほとんどみられなかった。このことからは、この造構が通常の住居として使用された住居ではない可能性が示唆される。

カマドの概要 東壁南寄りに礫、焼土、掘り込みが検出された。カマドの礫は住居中央側になぎ倒されるようにな重なっており、原形をとどめていない。鍛冶作業のためのカマドなのか通常の使用に供されたカマドなのかは判断できなかったが、他の住居のカマドと比較して特に焼土の量が多いとか火床の被熱が著しいということはなかったが、礫の被熱具合はやや強いように思える。

出土遺物 灯明器として使用されたと思われる皿が北東隅でまとまって出土している。1は完形の土師質皿で、口径12cm、器高2.4cm。底部は回転糸切り未調整である。口縁部内外面に礫が付着する。胎土はA4類。2は土師質坏の3分の2個体片で、推定口径12.5cm、器高3.5cm、底径5cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はA4類。口縁部内外面に炭が付着する。3は土師質坏の完形品で、口径12.1cm、器高4cm、底径5.9cm。底部は回転糸切り未調整。口縁部内外面に炭が付着する。胎土はA1類。4は土師質坏で、カマドより出土している。推定口径12.8cm、器高3.8cm、底径5.1cmの3分の2個体分の器片である。みこみ部には凹凸のはっきりしたナデ痕が残されている。胎土はA4類。5はカマドより出土した推定口径12.7cm、器高3.9cm、底径5.2cmの土師器坏で、3分の

1個体分の器片である。みこみ部に渦巻き状の凹凸のはっきりしたナデ痕が残る。胎土はA 4類。6は完全な平底型皿で、口径12.3cm、器高3cm。「大」の墨書きがみられる。内外面上半には煤が付着している。底部は回転糸切り後、外周をヘラケズリされる。胎土はA 1類。7は推定口径12cmの上部質坏の小器片である。胎土はA 4類。8は土師質坏の3分の1個体器片で、推定口径12.5cm、器高3.4cm、底径5cm。底部は磨滅しているが、おそらく回転糸切り未調整のままと思われる。胎土はA 5類。9は推定口径12cmの土師質坏の小器片で外面に鉄滓がこびりついている。胎土はA 4類。10は4分の1個体分の上部質坏で、推定口径14cm、器高4.1cm、底径4.6cm。胎土はA 1だが色調は黄褐色でやや異質。11は推定口径13.5cmの上部質坏の小器片である。胎土はA 4類。12は4分の1個体分の土師質坏片で、推定口径14cm、器高4.7cm、底径6.5cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はA 5類。13は推定口径14.4cmの土師質坏の小器片である。胎土はA 4類。14は推定口径17cmの土師質坏の小器片で、墨書きがみられるが読みは不明。胎土はA 4類。15は内面を黒色処理した上部質坏で、3分の1個体分の器片である。推定口径15.8cm、器高5.1cm、底径7.5cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はA 4類。16は上部質坏底部片で「大」の墨書きがある。胎土はA 1類だが色調は褐色でやや異質。17は土師質の坏もしくは皿と思われる底部で、墨書きがあるが、読みは不明。底部はヘラケズリされる。胎土はA 1類。18は环小器片で、覆土より出土している。推定口径14.9cm。胎土はD 1類。19は覆土より出土した灰陶碗で、推定口径15cmの小器片である。20も覆土より出土した灰陶碗で推定口径14.4cm。21は羽口の破片で、植物質纖維はあまり混入せず、キメも細かく揃った胎土質である。鉄滓が付着する。22はお口片で、最大径が7.4cm、内径は1.6cm。羽口の先端は被熱して灰色に変色し、鉄滓が付着する。胎土には植物質纖維が混ぜ込まれている。

遺構の時期 故多く出土した土師質坏と皿、甲斐型の範疇でとらえられそうな土師質の皿、坏が混じることから、10世紀中葉～末葉と考えられる。

村之内III 2号住居（第32図、写真15）

遺構の概要 南北4.1mの方形の住居で西半は削平されて残っていない。周溝と床面が一部で検出された。

カマドの概要 東壁南寄りに焼土と掘り込み、礫が検出された。

出土遺物 1はカマドより出土した土師質坏の4分の1個体分器片で、推定口径13cm。胎土はA 4類。2は甲斐型坏の4分の1個体分器片で、推定口径14cm、器高4.5cm。外面下半から底部がヘラケズリされる。内面には暗文がみられる。胎土はA 1類。3はカマドより出土した土師質小型甕で、推定口径13.5cmの2分の1個体器片である。外面は縦方向のナデ、もしくは磨滅したハケメ調整、内面はハケメ調整されるがほとんど触れる程度で整形の用を足していないと思われる。胎土はE 2類。4は口径23.3cm、器高34.7cm、底径11cmの上部質坏で、内面は手で押さえて整形するだけである。同一個体の底部片が1号住居覆土より出土している。胎土はC 3類。

遺構の時期 出土遺物と、カマド出土の甕が1号住居胎土出土遺物と接合することから、10世紀中葉～末葉、1号住居とさほど変わらない時期と考えておきたい。

第5章 その他の時期の遺構と遺物

溝状遺構（第33図、写真15・16）

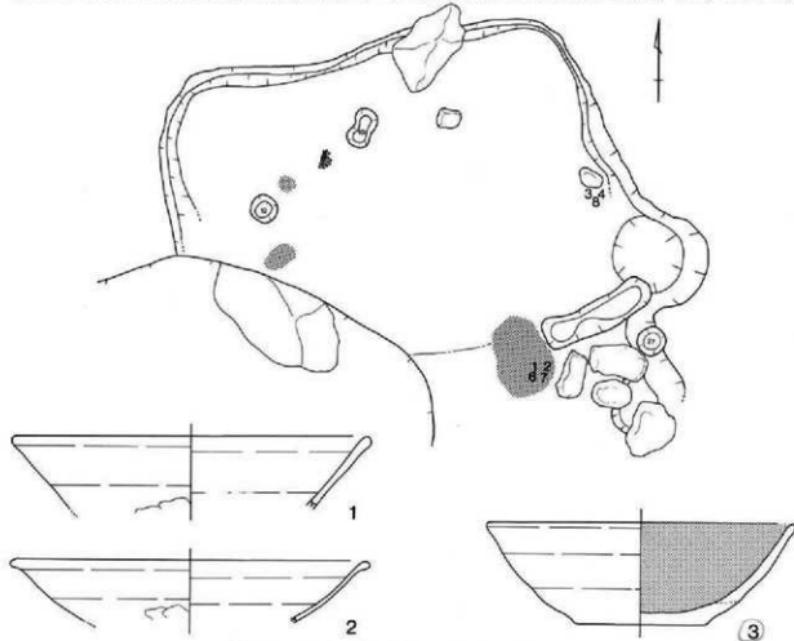
断面が浅いV字状もしくはU字状の溝であるが、遺物は縄文時代の石器や土器小片、平安時代、中世の土器片とばらつきがある。覆土は暗褐色で、他の住居覆土とさほど変わらない。

土坑・ピット（第33図、第34図）

L-7グリッド周辺でピットが検出されたが、建物址を構成するピットは確認できなかった。SK1からは縄文時代中期初頭五領ヶ台式と思われる土器片、SK2からは縄文時代中期末葉曾利式と思われる土器片、SK4からは縄文時代晚期と思われる土器片、SK5からは平安時代末から中世と思われる土器片（第33図6、7）が出土している。

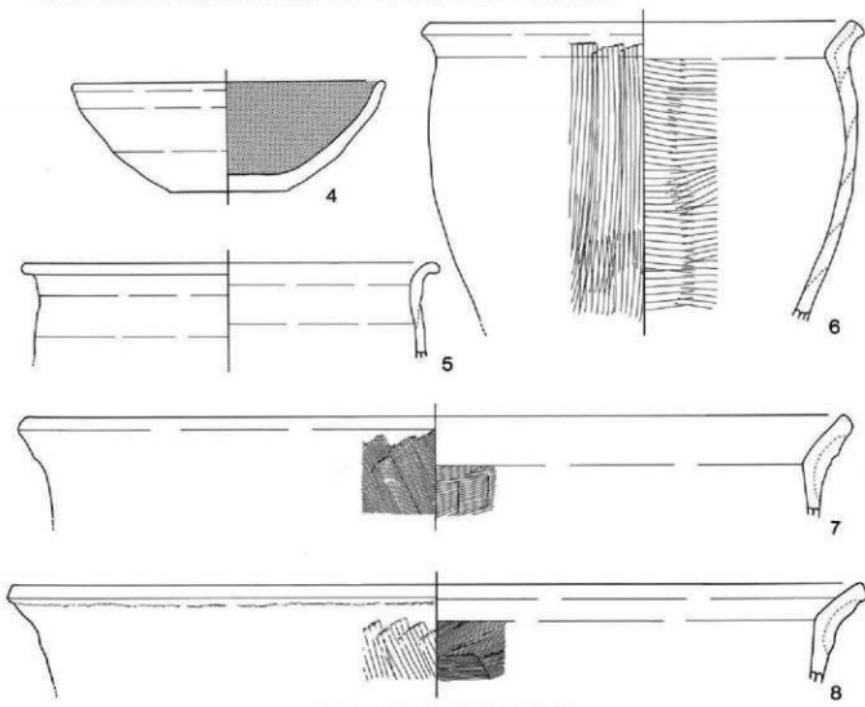
遺構外出土遺物（第33図、写真16）

平安時代から中世と思われる遺構外出土遺物を、試掘調査の際の出土遺物とともに報告する。試掘坑はTP○○と表示する。1はTP1で出土した偏平の石製品で、石帶具かと思われるがげて薄くなっている。2、3、4はTP72で出土した近世と思われる高台付柄である。褐色で半透明な釉薬がかけられている。胎土は淡い乳白色であるが、焼成はやや弱い感じである。5はTP80で出土した施釉碗で近世のものと思われる。8、9、10はTP57で出土した壺で、内面に黒色処理が施されている。推定口径はそれぞれ14cm、13.1cm、17cm。11はTP89

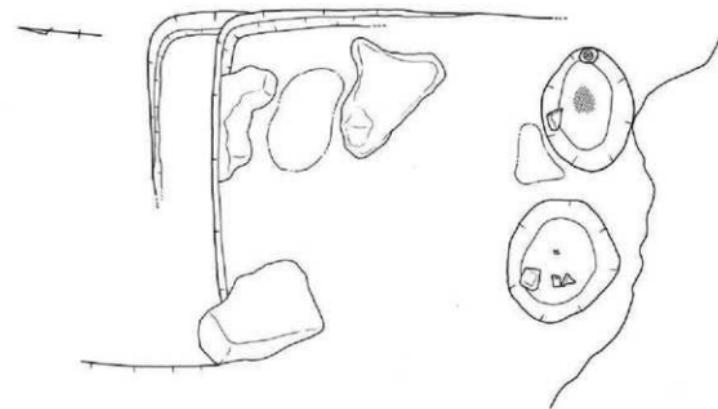


第21図 11号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

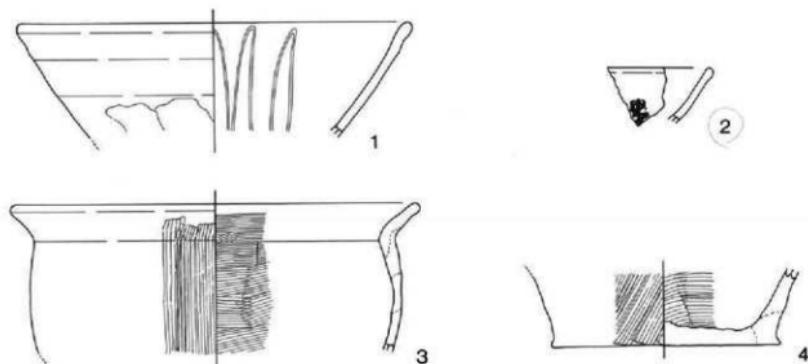
で出土した須恵器底である。12は15号住居床面より出土した内耳土器である。13は8号住居西寄りで出土した内耳土器である。両者とも住居に属するものか不明であるためここに報告した。



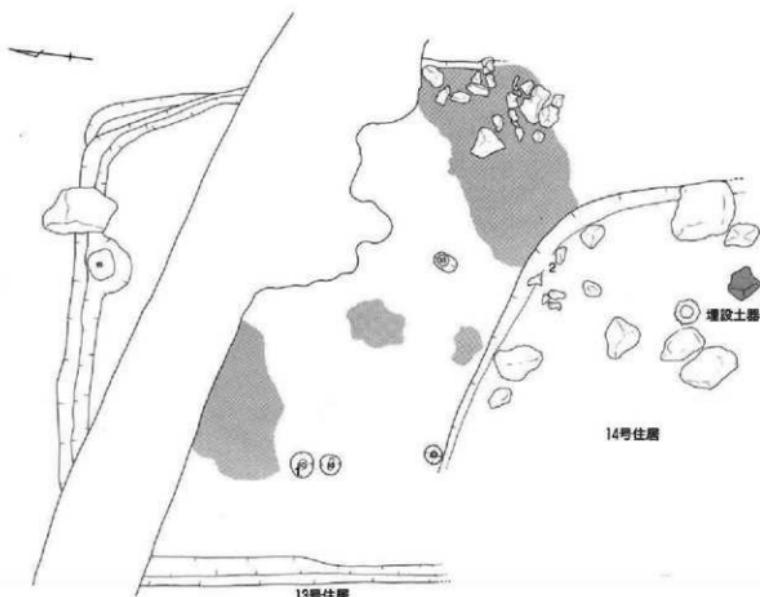
第22図 11号住居跡出土遺物(1/2)



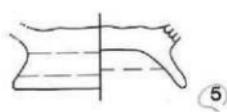
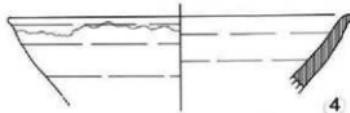
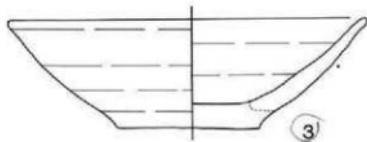
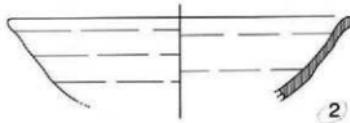
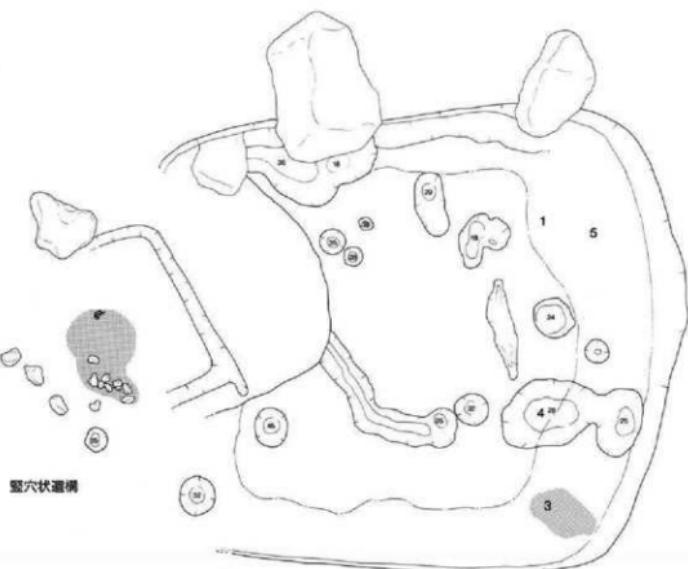
第23図 12号住居跡(1/40)



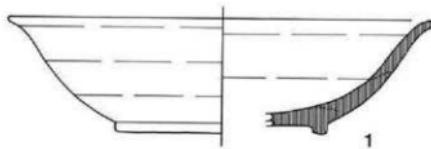
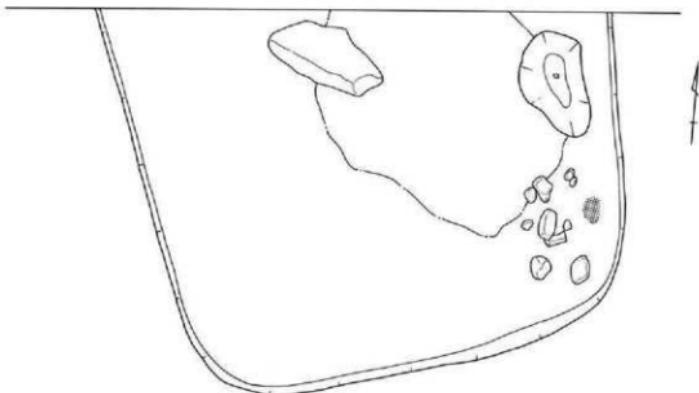
第24図 12号住居跡出土遺物(1/2)



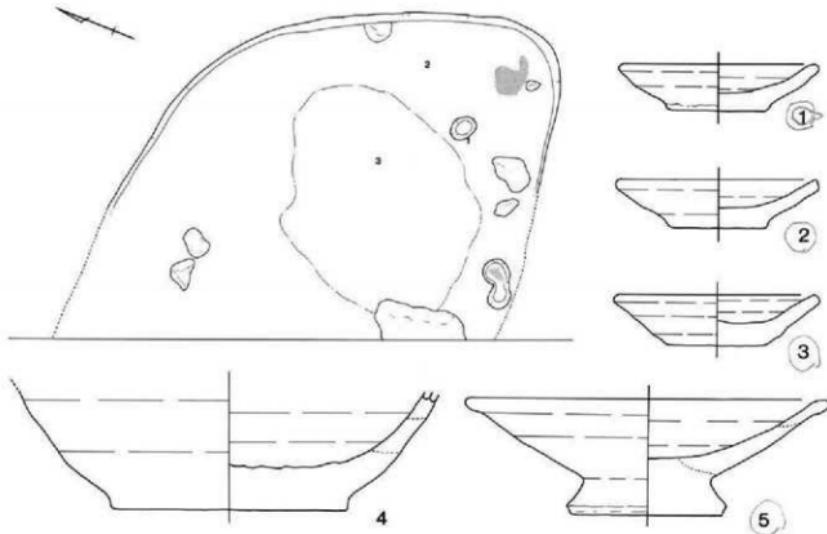
第25図 13・14号住居跡(1/60)及び出土遺物(1/2)



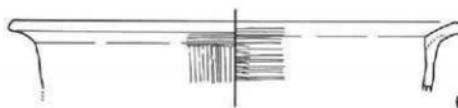
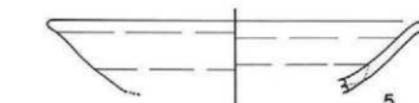
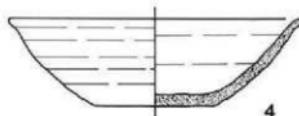
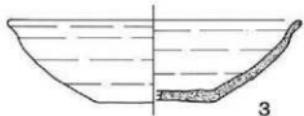
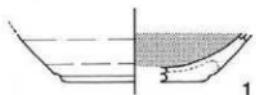
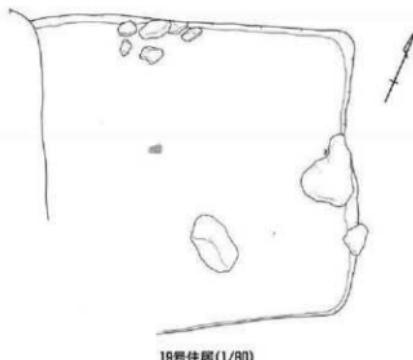
第26図 15号住居跡(1/60)及び出土遺物(1/2)



第27図 16号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第28図 17号住居跡(1/60)及び出土遺物(1/2)

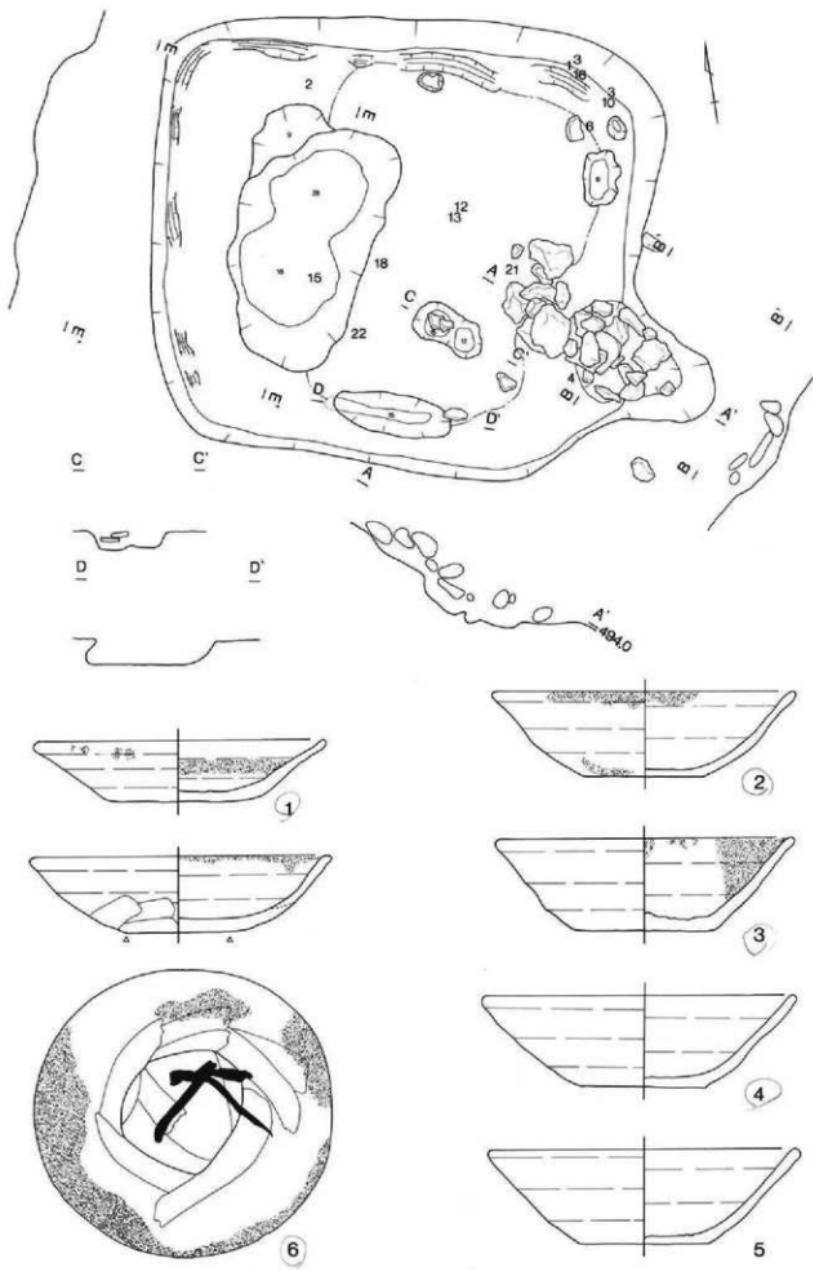


22号住居

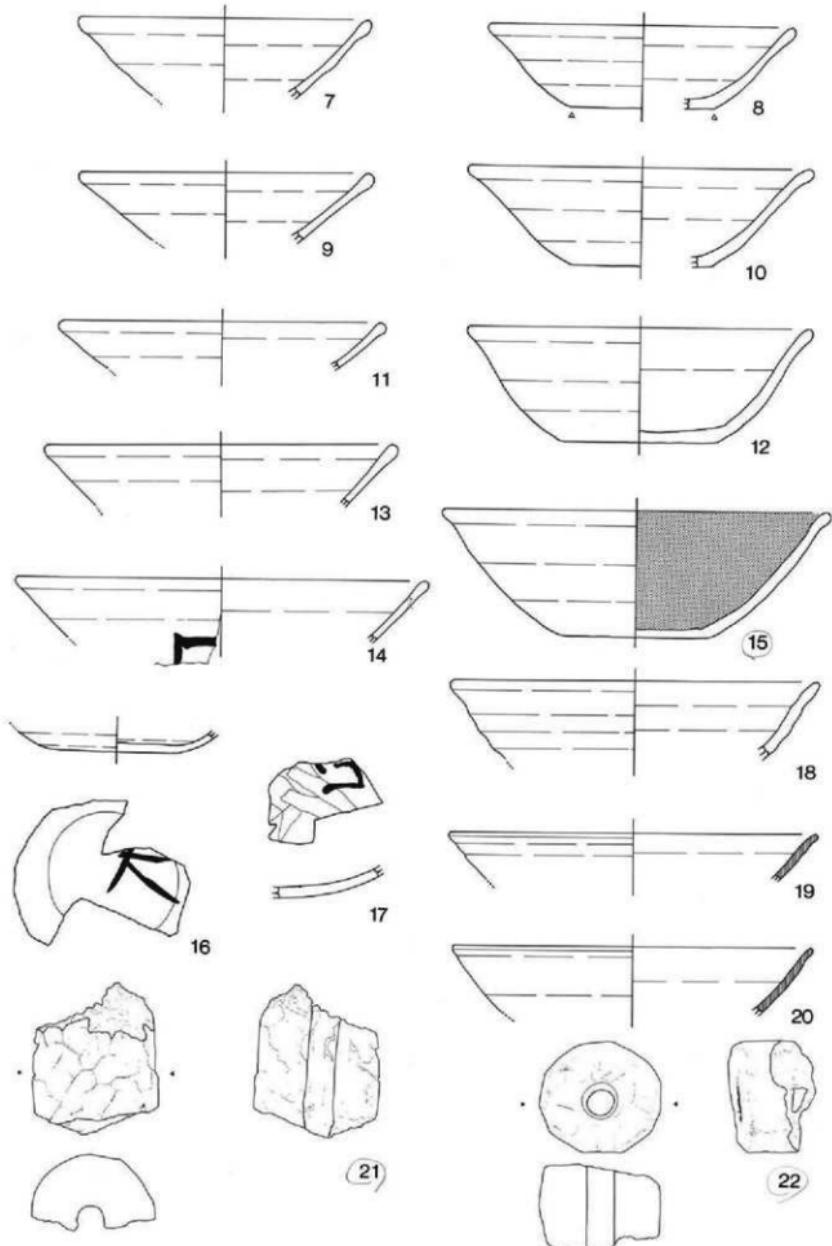
21号住居

20号住居

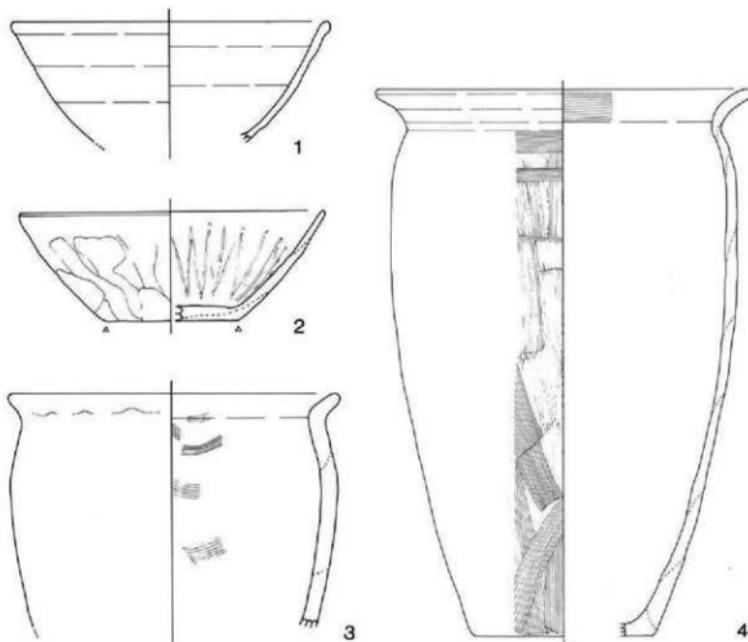
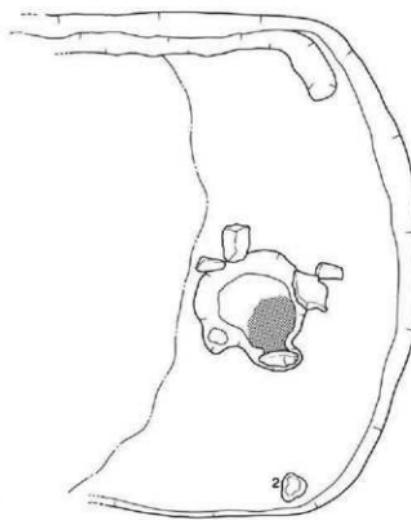
第29図 18~22号住居跡(1/40,1/80)及び出土遺物(1/2)



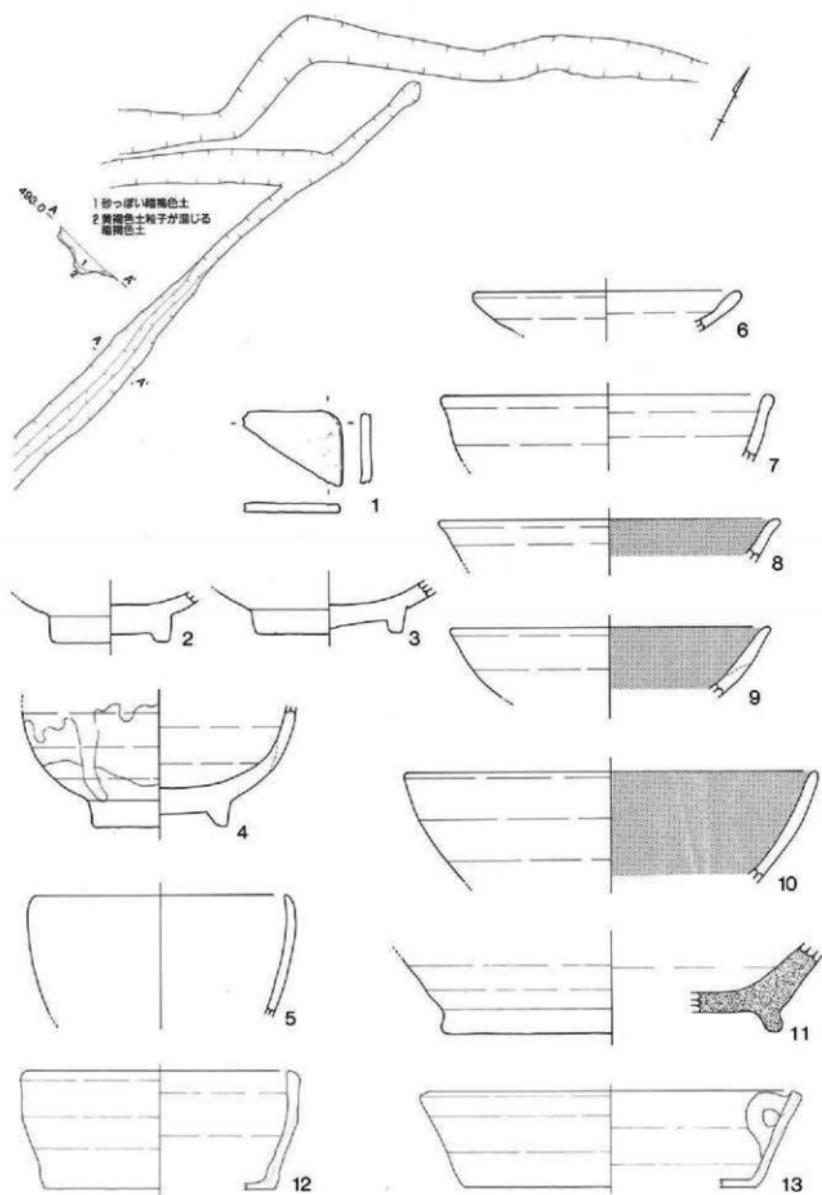
第30図 1号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



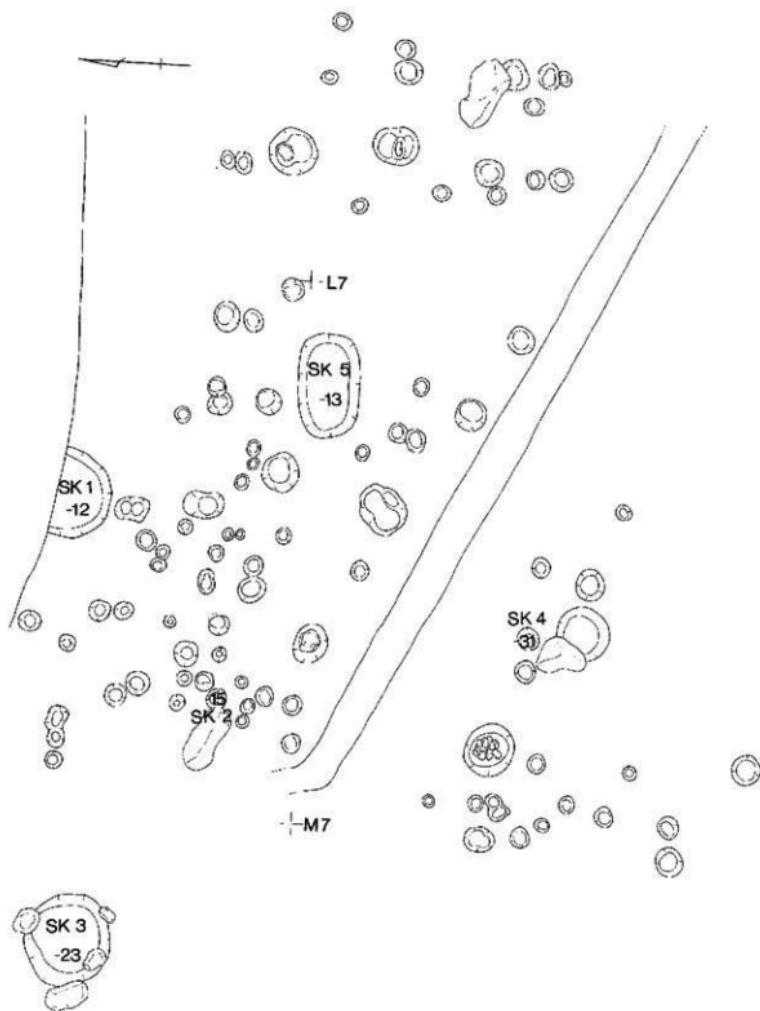
第31図 1号住居跡出土遺物(1/2, 21, 22のみ1/4)



第32図 2号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

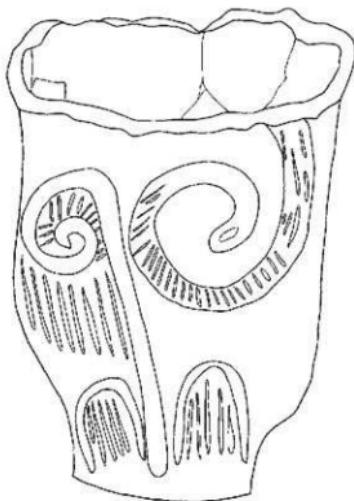


第33図 溝状造構(1/200、断面図1/100)及び造構外出土遺物(1/2, 12, 13のみ1/4)



第34図 土坑・ピット位置図(1/90)

高台・中谷井遺跡



絵：筒井毛毛子（明野小3年）

第1章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の地理的環境 (第1図、写真17)

茅ヶ岳山麓の地理環境については村之内II・III遺跡の報告のなかで触れてあるため、ここでは重複をさけ許しくは触れない。高台・中谷井遺跡が立地する尾根は茅ヶ岳山麓から東西方向にのび、南北を現在は水流がない潤沢に挟まれている。尾根の南北方向の幅はおよそ80mほどである。遺跡の周辺は現在水井と呼ばれる集落であるが、「水井七派」と地元では呼ばれる湧水地がいくつもみられたところである。現在、湧水が確認されるのはそのうちの1カ所だけである。そのうちのひとつは今回発掘調査を行った調査区のすぐ東側に接しており、湧水池の畔には周辺の細から耕作中に発見された縄文時代のものと思われる石棒が20本ほど並べられ、道祖神とも木神ともつかぬ形でまつられている。

さらに遺跡の北側には清水端という地名が残り、縄文時代中期から後期までの広い包蔵地が知られている(平林遺跡、清水端遺跡)。尾根の南北にある潤沢は、縄文時代に水流があったか定かではないが、仮に水流がなくとも湧水に恵まれたため、集落を営むに不都合はなかったろうと思われる。

2 遺跡の歴史的環境 (第1図)

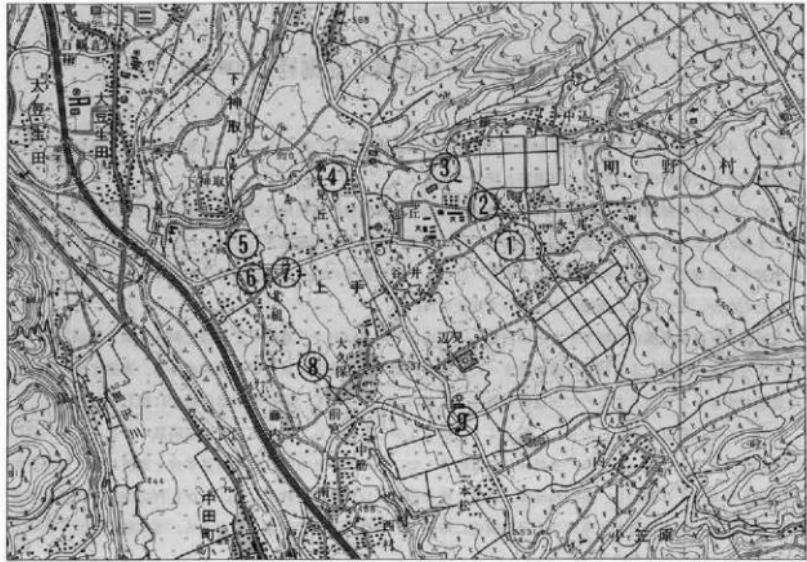
高台・中谷井遺跡周辺の平安時代の遺跡については村之内II・III遺跡の報告にゆずるとして、ここでは高台・中谷井遺跡周辺の縄文時代の遺跡について記及したい。

高台・中谷井遺跡のすぐ北側には先述した縄文時代中期の平林遺跡がある。この遺跡は昭和37年と50年に明野村立中学校、小学校をそれぞれ建設した際に大半が破壊されてしまったが、工事中に出土したという遺物は縄文時代中期後半～木葉のものが多い。高台・中谷井遺跡で出土した縄文時代の遺物の大半が同様の時期であることから、両者は同一の集落として意識され営まれていた可能性が十分に考えられよう。

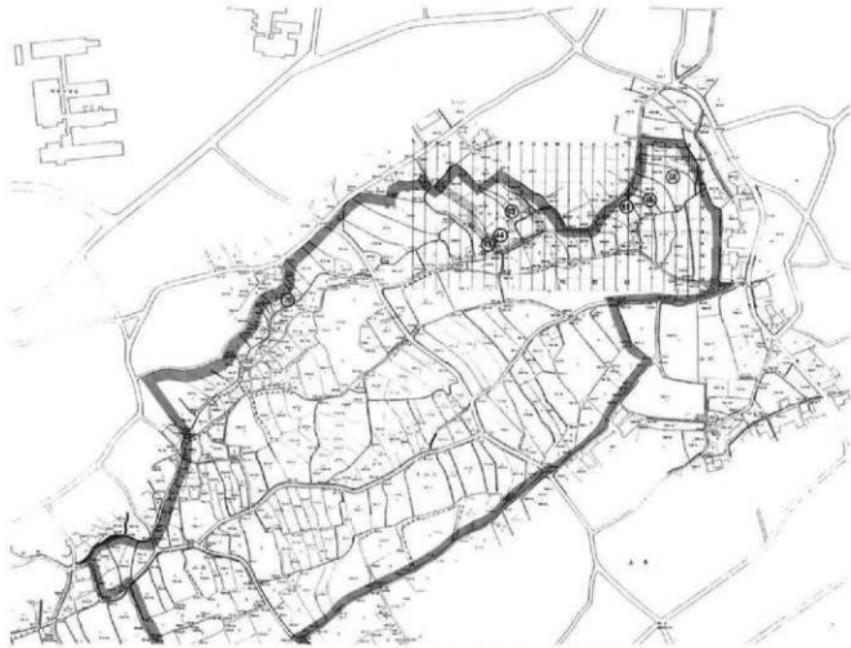
高台・中谷井遺跡では縄文時代後期初頭の遺物が若干みられたが、平林遺跡のさらに北側には縄文時代後期前半から中葉の集落である清水端遺跡がある。また、西へ約1kmには縄文時代中期木葉から後期中葉の集落である尾根遺跡がある。南方には縄文時代中期末葉の集落である駒場遺跡が700mほど離れてみられる。

高台・中谷井遺跡周辺の縄文時代遺跡

- | | | |
|------------------------|--------------------------|---------|
| 1 高台・中谷井遺跡 (縄文時代中期末葉) | | |
| 2 平林遺跡 (縄文時代中期末葉) | | |
| 3 清水端遺跡 (縄文時代後期前葉～中葉) | 搬石住居 3軒ほか検出 | 1986年報告 |
| 4 木葉遺跡 (縄文時代中期中葉～末葉) | 藤内式…曾利IV式 | 1994年調査 |
| 5 村之内II遺跡 | | |
| 6 村之内III遺跡 | | |
| 7 村之内I遺跡 (縄文時代中期末葉) | | |
| 8 尾根遺跡 (縄文時代中期初頭～後期中葉) | 住居跡中期末葉 4軒、後期前葉 3軒、中葉 1軒 | 1991年調査 |



第1図 周辺の縄文時代遺跡位置図(1/25,000)



第2図 永井工区・調査区及び試掘坑位置図(1/5,000)

第2章 調査に至る経緯と発掘経過（第2回）

高台・中谷井遺跡周辺の水田地帯が平成5年度県営圃場整備事業の対象となり、事前に発掘調査を行うことで協議がなされた経緯は村之内II・III遺跡と同様である。

高台・中谷井遺跡周辺の埋蔵文化財所在確認のための試掘調査が明野村教育委員会により行われたのは、平成5年1月のことである。圃場整備施工区の大半では埋蔵文化財が一切確認されなかったが、予想どうり平林遺跡に南接する区域で、遺跡の所在が確認された。ただし、試掘調査の時点では縄文時代が主体となる遺跡と予想していたのだが、平安時代の遺物が少なからず出土した。

遺跡調査区は試掘調査の結果をもとに設定し、平成5年6月14日より重機による表土剥ぎ作業を開始し、7月19日より発掘作業員による精査作業が始まった。精査の結果、溝区に設定した区域のうち、東側半分については遺物が少なからず出土するのだが遺構が検出されないことが判明し、調査の立証を西半に移して続行した。

現地での発掘調査は雨の日が多く、思うように進まなかった。それでも検出された遺構数が少なく、かつ遺構の遺存状態が良くなかったために9月16日には終了した。その間、8月29日に遺跡見学会を開催した。整理作業は平成6年4月より開始し、遺物の洗浄、注記、接合作業は12月までに終了した。しかし村之内II・III遺跡の章でも触れたが、調査担当者が現地での発掘調査に時間をとられ、遺物の実測、トレース、写真撮影と版下作成までが完了したのは3月末であった。

第3章 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構と遺物

高台・中谷井遺跡では縄文時代の住居跡が1軒検出されただけである。しかし、遺物が集中して出土するグリッドもあり、木米存在した住居跡が削平されて失われていることも考えられる。また、畠土より縄文時代の土器片が出土した土坑も検出されているが、時期が特定できないため第5章で報告した。

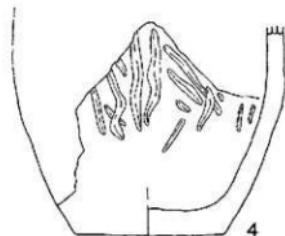
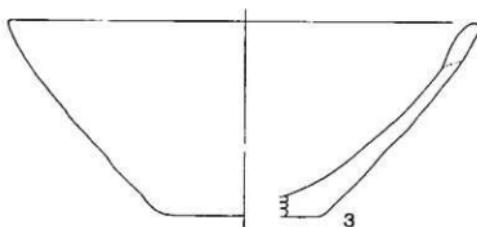
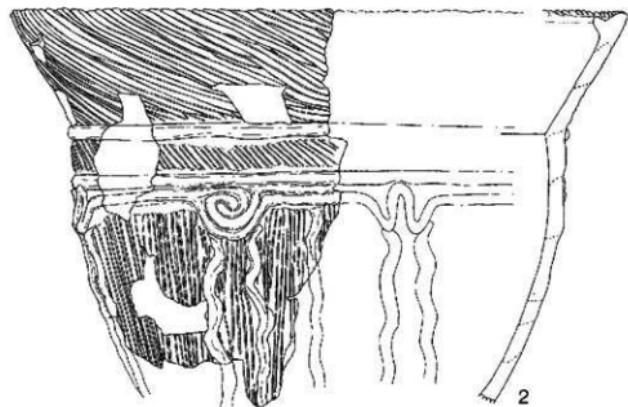
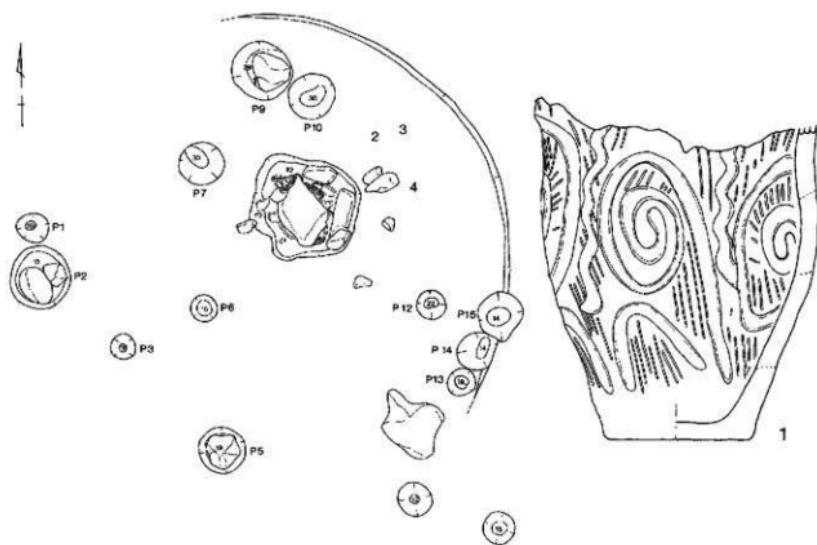
16号住居（第3回、写真18）

遺構の概要 大半が削平され、北壁と炉だけが検出された。床面、周溝は検出されなかった。住居内にはピットが検出されているが主柱穴はP-2、P-5、P-9、P-12の4本と思われる。

炉址の概要 30cmほどの掘り込みに、被熱して破砕した長方形の礫が2個残っていた。焼土は少量だが、検出された。炉底には深鉢上半部がつぶれるようにしてあり、土器の上に偏平の炉石と思われる礫が載っていた。

出土遺物 2は、炉内より出土した深鉢上半部で、曾利II～III式の重弧文土器である。1は現存高14.2cmの小型の深鉢形土器で、炉北側床面高で出土した。曾利III式と思われる。3は炉北側床面高で出土した浅鉢で、口径19cm、器高8cm、底径6.3cm。内面はよく磨かれている。4は住居内のピットP-9から出土した深鉢で、現存高8.8cm、底径6cm。曾利III式と思われる。

遺構の時期 2は曾利II式によくみられる重弧文土器であるが、文様の退化が認められ曾利III式と考えたい。その他の出土遺物は縄文時代中期末葉曾利III式でまとまるため、曾利III式期と思われる。



第3図 16号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2, 2のみ1/4)

2 造構外出土遺物（第4図、第5図、第8図、写真19・20）

本遺跡からは検出された縄文時代の造構は少ないものの、縄文時代の遺物が包含層で多く出土した。試掘の際に出土した遺物については試掘坑番号をT P C Oで記す。

1はU-4グリッドで出土した、大きめの鉱物粒子が混じる粗い胎土質の小器片である。色調は赤褐色。縄文時代早期木葉～前期初頭と思われる。2はTP44で出土した小器片で、雲母他の鉱物粒子が混じるざらついた胎土質である。色調は赤褐色。半截竹管による沈線と押し引きで施文する。前期後半、縄文C式と思われる。

3はU-5グリッドより出土した浅鉢片で口唇部上端と内面に施文される。井戸尻式と思われる。4はU-5グリッドより出土した、深鉢口縁部で、井戸尻III～曾利I式と思われる。

5、6はT-5、P-5グリッド出土の把手片で、曾利式と思われる。7もU-5グリッドより出土した、水煙形の大型把手片である。曾利I式。8はTP43で出土した水煙形大型把手器片で、7と同一個体と思われる。曾利I式。9は断面が三角形の厚みのある隆帯に丸みを施した深鉢削部片で、曾利I式と思われる。

曾利II式と思われるものを集めた。10はU-4グリッドで出土した大型の深鉢脇部器片で、半截竹管による隆帯と平行沈線文で施文する。11はU-4グリッドで出土した。平行沈線にソーメン状の細い隆線を貼り付ける。12はU-5グリッドで出土した口縁部片で、重弧文を施した深鉢と思われる。13はU-5グリッドで出土した深鉢口縁部で、R L単節縄文地文に連弧文形隆帯と懸垂隆帯を施す。口縁部には波状隆帯を貼り付ける。隆帯は地文施文後に貼り付けられる。

以下は曾利III式と思われるものを集めた。14はU-4グリッドで出土した小器片で、沈線と刺突により施文される。15はU-4グリッドで出土した小器片で、D字状に区画されたなかを刺突により充満する。16はU-4グリッド出土。17はU-5グリッド出土の器片で、池渦文と縦沈線で施文する。18はTP148で出土した器片で、幅広沈線とR L単節縄文が施される。曾利III～IV式と思われる。19はTP66で出土した広口壺頸部と思われる器片で、幅広でやや深めの沈線と先が3つに分かれた施文具による刺突で施文する。21はU-5グリッドで出土した広口壺の頸部と思われる器片で、浅く幅の広い沈線によりつくられた疑似隆帯とそれに囲まれる空間に施文する。22はQ-8グリッドで出土した器片で、指頭による幅広の沈線で施文される。

20はQ-8グリッド出土の口縁部片で、沈線による渦巻き文が口唇部直下に描かれる。23はTP48出土の器片で、幅広で厚みのない隆帯と沈線で施文される。いずれも曾利IV式。24は出土位置不明の器片で、幅広で厚みのない隆帯で区画された中にR L単節縄文による地文が施される。垂下する隆帯の一番上には円形の浅い刺突が施される。25は広口壺で幅広の沈線による渦巻き文とハの字文が描かれる。把手が頸部につけられていて、1単位と思われる。26はU-4出土の口縁部器片でいびつで細なつくりの深鉢である。沈線を用いた文様だが、既にハの字すら造っていないほど退化した文様である。以上は曾利V式と思われる。

以下には加曾利EIV式を集めた。27はQ-6グリッドより出土した口縁部片で、幅広で浅い沈線とR L単節縄文により施文される。28はQ-8グリッドで出土した突起状把手の付け根の器片で、沈線とL R R R 多条縄文で施文される。29はL R 単節縄文と沈線で施文される。30はP-5グリッドより出土した器片で、器面がよく磨かれている。L R 単節縄文と沈線が施される。31はQ-8グリッドで出土した広口壺と思われる器片で、細な隆帯とL R 無節縄文で施文される。32はTP68で出土した口縁部片で、断面が三角形の低く細い隆起線とR L 単節縄文により施文される。33はQ-8グリッドで出土したやや薄手の深鉢削部器片で、L R 単節縄文に沈線で施文される。35は4号住居廻土出土の深鉢片で、大型の把手が1カ所につくものと考えられる。

34以下は称名寺式と思われるものを集めた。34は6号住居廻土出土の深鉢片である。把手が2単位か4単位かは不明である。36は3号住居廻土より出土した器片で、L R 単節縄文が施文される。やや砂っぽい胎土で、色調



第4図 遺構外出土遺物(1/3,25のみ1/8)



第5圖 遺構外出土遺物(1/3)

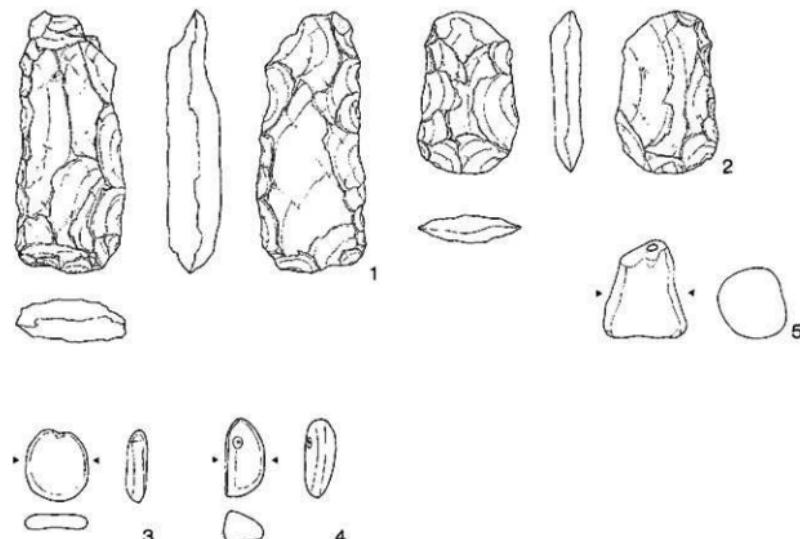
は乳白色。37は6号住居覆土より出土した器片で、R L単節繩文が施文される。胎土質は36と同様である。38はTP20で出土した器片で、L R無節繩文、胎土質から称名寺式と思われる。39はQ-8グリッド出土の器片で、L R単節繩文と沈線で施文される。40は9号住居覆土より出土した把手で、細かいL R単節繩文が施文される。41は広口の深鉢口縁部で二十都場式古段階の模倣土器と思われる。

以下は後期前半迄之内式を集めた。42、43はQ-8、R-8グリッドで出土した器片で、輪広の沈線と列点文で施文される。44はTP44で出土した波状口縁部片で、浅い沈線で渦巻き文が描かれる。胎土はやや白っぽくて砂が混じる質である。45はU-5グリッド出土で、沈線で渦巻き文を描いてある。46はT-5グリッド出土の口縁部片で円形の刺突文を施す。47はU-4グリッド出土、48はTP48出土である。

49はQ-7グリッド出土で沈線と列点文が施される。50は3号住居覆土出土で、沈線で施文される。器面はよく磨かれている。51は12号住居覆土出土の把手片である。

52は5号住居覆土出土の口縁部片で、口唇部に1カ所凹み状の刻み目がある。L R単節繩文を口縁部に施文、その下に沈線を3本横走させる。器面はよく磨かれ、赤彩の痕跡がみられる。加曾利B1式か。53は3号住居覆土出土で、表面に広めで浅い沈線が施文される。後期後半と思われる。54-58はR-8グリッド出土の粗製深鉢片で、胎土質、調整より同一個体と思われる。条痕状のナデ痕があり、鉱物粒子が混じる胎土質より後期と思われる。比較的まとまって出土している。59はTP63出土で、粗製深鉢片である。外面にはナデ痕が残り、器内面はよく磨かれている。胎土質から後期と思われる。

図6-1、2は打製石斧で、石質は頁岩、硬砂岩である。3はP-9グリッドより出土した石製品で切り込みが入っている。4は3号住居覆土より出土した勾玉形石製品の未成品で穿孔し始めた跡がみられる。石質は蛇紋岩と思われる。5はU-4グリッドで出土した土偶頭部と思われる土製品で、胎土質と形態より繩文時代中期と思われる。



第6図 遺構外出土遺物(1/2)

第4章 平安時代の遺構と遺物

高台・中谷井遺跡では、平安時代の住居跡12軒が検出されている。一部を除いて淀川の際に削平されて、遺存状態は良くなかった。また、O-7グリッドには焼土塊と遺物が出土しており、住居跡として調査はしなかったもののかつては住居があったものと思われる。1、14、15号住居は欠番である。

1 平安時代の遺構と遺物

2号住居（第7図、写真21・22）

遺構の概要 西半は削平されている。凹くしまった床面がカマド横で検出された。周溝は検出されなかった。

カマドの概要 北東隅に掘り込みと焼土が検出された。

出土遺物 1は床面出土の土師質坏で、3分の2個体器片である。口径12.9cm、器高4.1cm、底径5.2cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はA4類。2は覆土上出の土師質坏の2分の1個体器片で、推定口径12.8cm、器高3.5cm、底径5.5cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はA4類。3はカマド手前で出土した土師質坏で、推定口径14cmの小器片である。胎土はA1類。4は覆土出土の土師質坏3分の1個体器片で、推定口径12.6cm。注ぎ口状に口唇を外反させた箇所がある。胎土はC1類。5はカマド手前の覆土出土の土師質坏で、推定口径14.4cm。内面が黒色処理される。胎土はA1類。6はカマドより出土した推定口径14cmの小器片である。胎土はA4類。7は住居中央部床面で出土した土師質坏で、推定口径12.2cm、器高2.5cm、底径5cmの2分の1個体分器片である。底部は回転糸切り未調整。胎土はA4類。8はカマド出土の土師質坏で、底部2分の1個体分の器片である。推定底径6.2cm。底部は回転糸切り未調整。みこみ部には渦巻き状の凹凸のナデ痕がある。胎土はA4類。9は覆土出土の小型の壺もしくは壺で、ロクロを用いずに整形したものである。推定口径は9cm前後、器高7cm前後、底径は7cmほど。底部には木葉痕がみられる。胎土はE2類。10はカマドで出土した小型壺片で、推定口径は12cm。外面はハケメ、内面はナデ痕、ロクロを用いずに成形した感じである。胎土はB3類。

遺構の時期 出土遺物の大半は平野型土器の特徴を何となく感じさせる上師質上器であることから、甲斐型III期、10世紀後半と思われる。

3号住居（第8図、写真22）

遺構の概要 掘り込みが10cmほどしか残らない。東西5.4m×南北4.6m。床面、周溝は検出されなかった。住居北西隅床面に小窓が集積しているが、礫に被熱痕、煤が付着した痕跡はみとめられない。

カマドの概要 北東隅に焼土と礫が検出された。掘り込みは検出されなかつたがカマドと考えよいと思われる。

出土遺物 1は覆土出土の土師質坏で、推定口径14.3cmの小器片である。内外面はナデ調整。ヘラ削りはみられない。「六」もしくは「大」と思われる墨書きあり。胎土はA3類。2は覆土上出の土師質坏で、推定口径14.2cm。胎土はA3類。器面調整は雑である。墨書きがあるが、読みは不明。3はカマド上出の土師質坏で、推定口径12cmの小器片である。胎土はA4類。4は覆土上出の土師質坏小器片で、推定口径13.6cm。胎土はA4類。5はカマド手前で出土した推定底径6cmの土師質坏底部小片である。底部は回転糸切り未調整。胎土はA4類。6はカマド出土の土師器皿と思われ

る小器片で、推定口径7.7cm。胎土はB 3類。7は床面出土の灰釉瓶で、推定口径15.8cmの小器片。釉は濁け抜け。胎土は灰色の緻密な質で、釉色調は乳白色である。

遺構の時期 遺物は小器片ばかりであるが、甲斐型X～XII期、10世紀後半頃と考えておきたい。

4号住居（第9図、第10図、写真22）

遺構の概要 造出による削平と暗渠排水による擾乱のため、北東隅だけが検出されたが、遺物は遺構周辺で比較的多く出土している。

カマドの概要 東壁南寄りで僅かな焼土と礫が検出された。周辺では遺物が集中して出土していることから、これがカマドにあたるものと思われる。

出土遺物 1はカマド右側床面より出土した甲斐型窯で、推定口径14cm、器高4.8cmの5分の1個体分器片である。「東」の刻書がみられる。焼成後に縦割されたものである。胎土はA 1類。2は覆土上出土の甲斐型窯で、推定口径15.3cmの小器片である。胎土はA 1類。3はカマド右側で出土した甲斐型窯で、推定口径15.5cmの小器片である。内面には晴文がみられる。胎土はA 2類。4は上部質窯の底部片で、覆土より出土している。底部は回転糸切り未調整で、ヘラ削りは一切されない。胎土はA 4類。5はカマド左側床面より出土した甲斐型窯で推定口径14.4cmの2分の1個体片。内面は黒色処理される。底部は回転糸切り後、外周をヘラケズリする。胎土はA 4類。6は推定口径15.5cmの平窯型小型臺で、口縁部が2分の1回する器片である。カマドと東壁のあいだから出土した。胎土はB 1類。7はカマドより出土した甲斐型小型臺で、推定口径15cm。口縁部が2分の1周する器片である。胎土はB 1類。8、11はカマドより出土した甲斐型臺の底部片である。胎土はともにB 1類。9は東壁沿いで出土したロクロ整形小型臺の小器片で、推定口径15.8cm。胎土はD 3類。10はカマドより出土したロクロ整形甕底部片で、胎土はD 3類。色調は暗赤褐色。12は覆土より出土した手捏ね成形の甕で、推定口径は12cm前後。外周はヘラ削り、内面はナデ調整される。胎土はE 2類。13は覆土より出土した甲斐型甕底部片である。胎土はB 1類。14はカマド左側で出土した須恵器人焼胴部器片で、内面側がつるつるに磨耗しており、皿か何かに転用されているが、墨痕等はみられない。15はカマド手前で出土した羽釜器片で、推定口径30cm、鋲部長は4cm前後、鋲部厚は1.4cmである。胎土はB 1類。鋲部と体部は接合しないが、胎土質から同一個体と判断し、図上で復元した。本住居にはこれ以外にも2個体分の羽釜鋲部が出土しているが、小器片であり復元できなかった。

遺構の時期 出土遺物は甲斐型X～XII期でまとまるため、9世紀後半頃と考えられる。

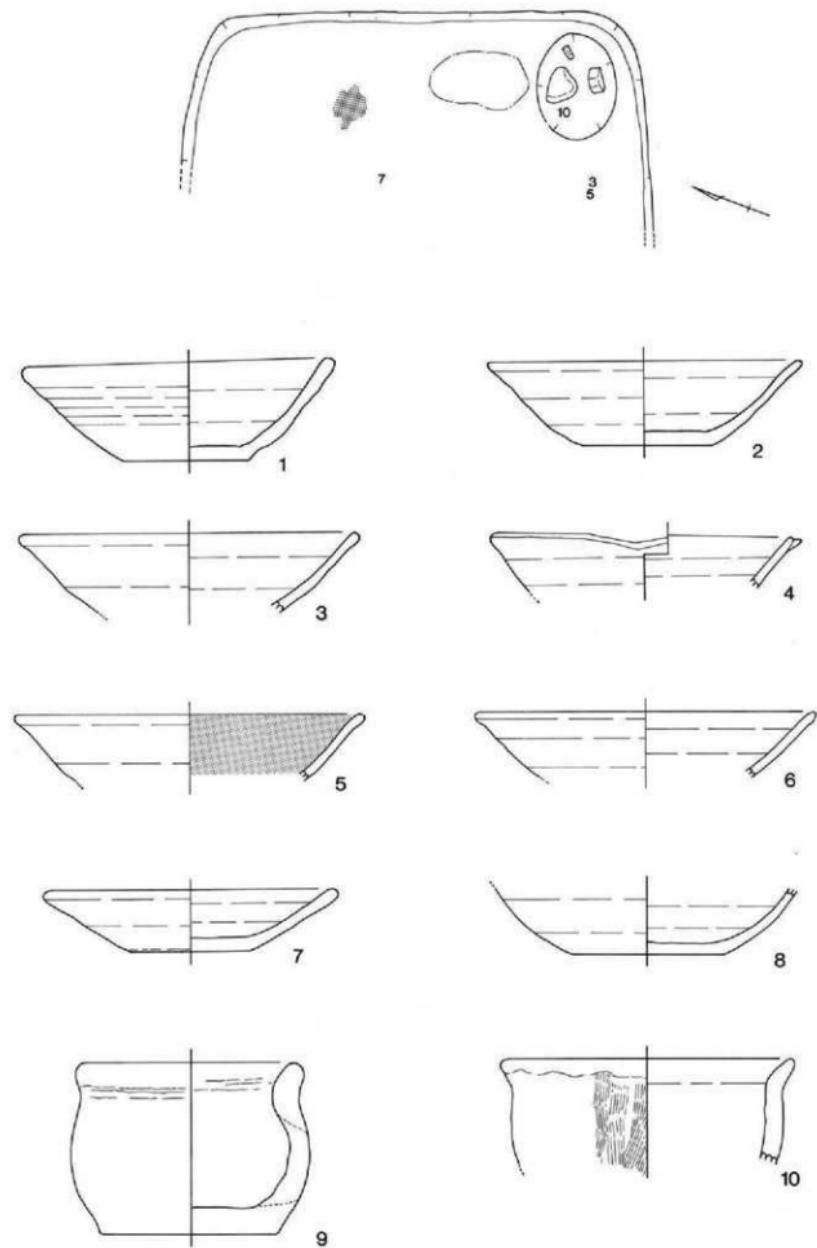
5号住居（第11図、写真23・24）

遺構の概要 犀り込みは比較的よく残っていた。南北3.8m×東西4.1m。床面が一部に残るが、周溝は検出されなかった。南西隅に深さ20cmほどの掘みがあり、住居に付属する施設と思われる。

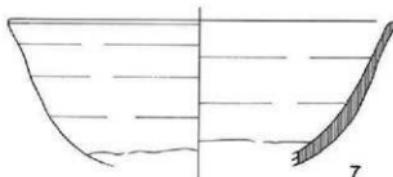
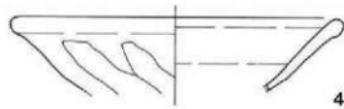
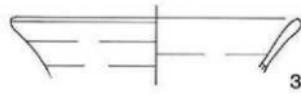
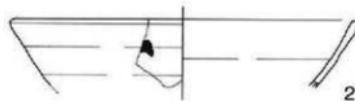
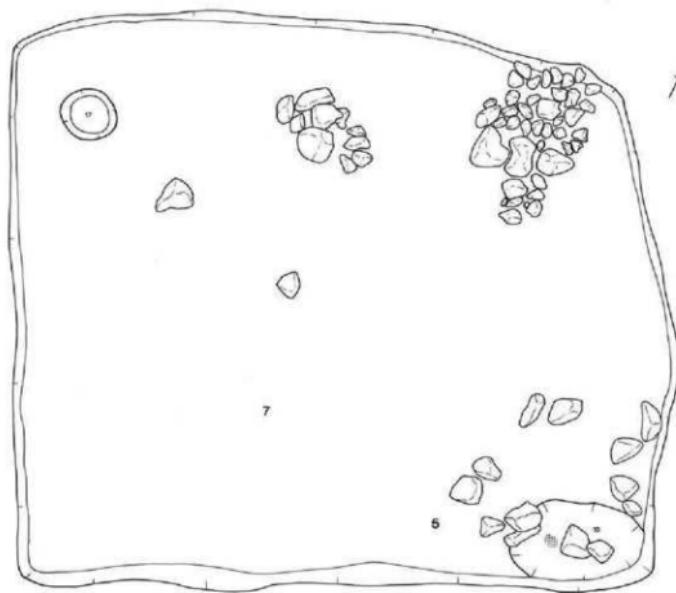
カマドの概要 南東隅は犀り込みと焼土が検出された。カマドを構築した際などは一切検出されなかったが、これがカマドと考えられる。

出土遺物 1は覆土出土の土師質窯小器片で、推定口径11cm。胎土はA 1類。

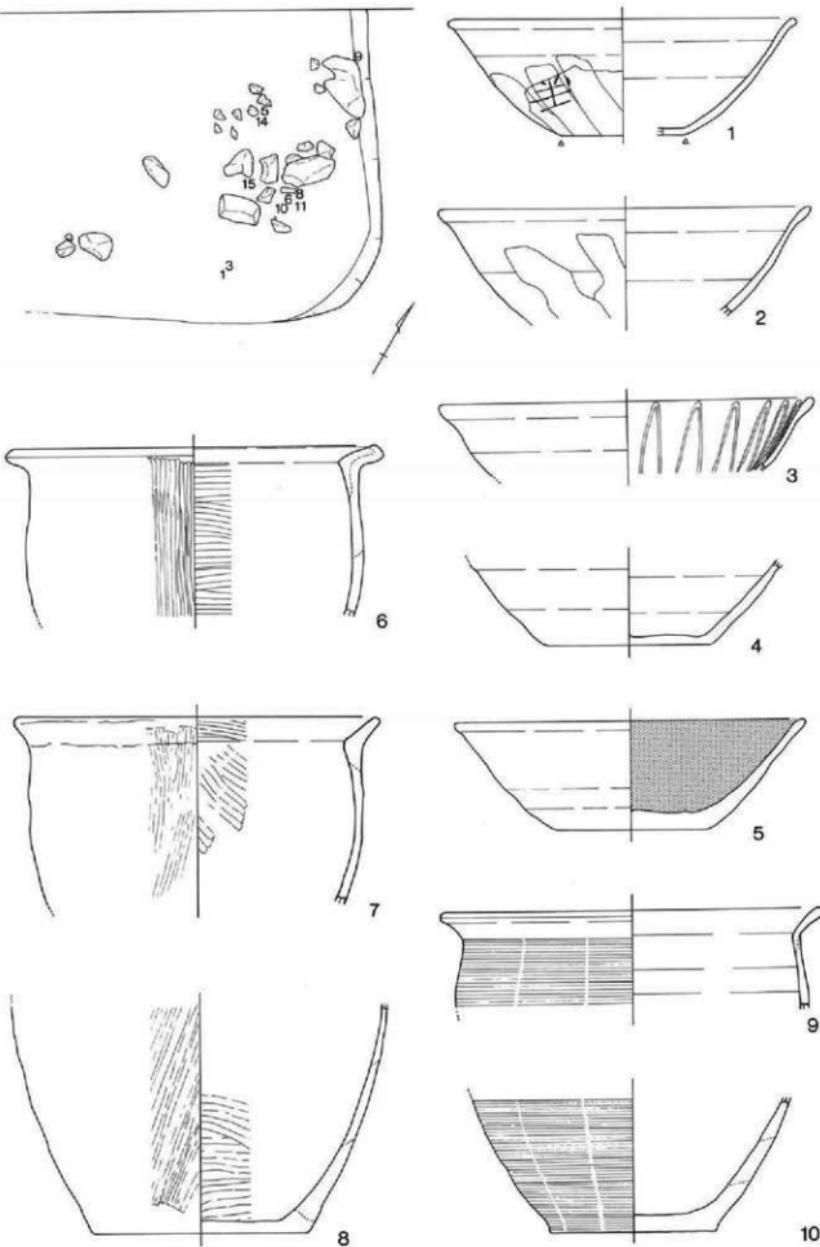
遺構の時期 確実に住居に属すると考えられる遺物はないが、カマド位置などから平安時代末、10世紀後半から11世紀前半ではないだろうか。



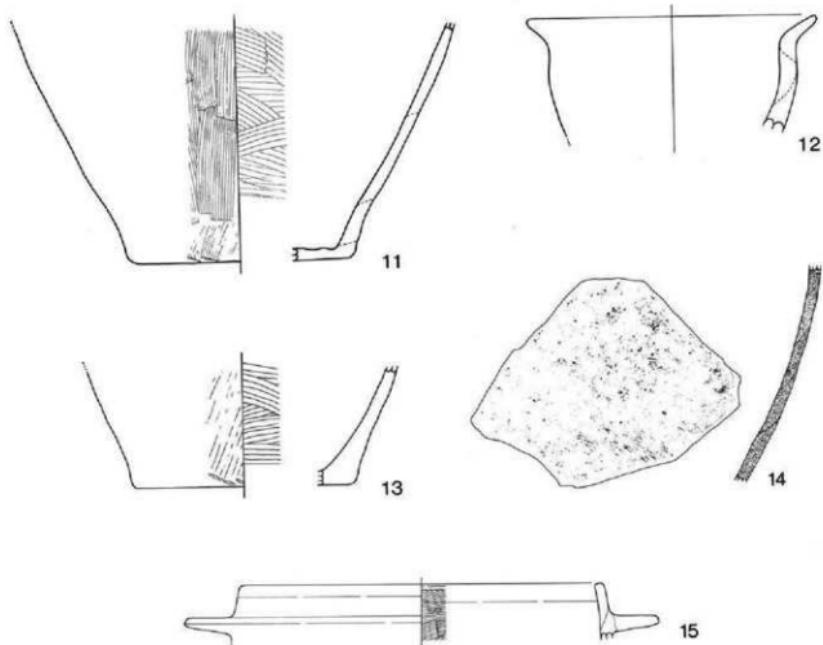
第7図 2号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



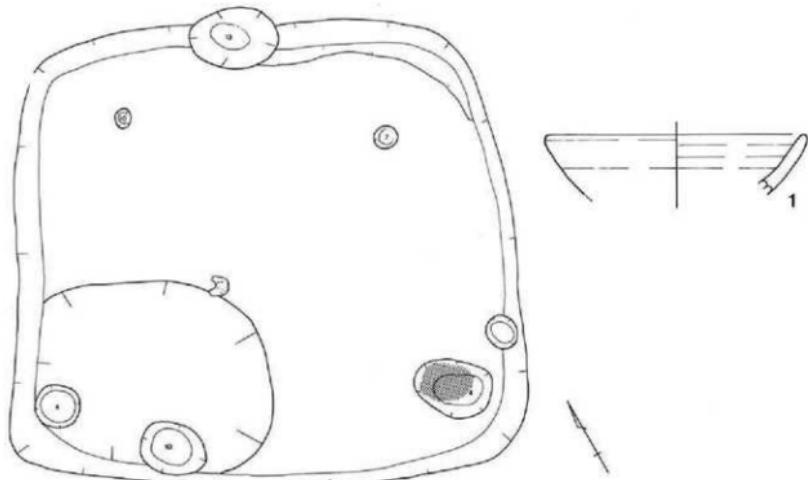
第8図 3号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第8図 4号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第10図 4号住居跡出土遺物(1/2,14,15のみ1/4)



第11図 5号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

6号住居（第12図、第13図、写真23・24）

遺構の概要	遺存状態は良好で、床面は全面によく残り、周溝も北壁沿いで検出されている。住居内に礫がいくつかあるが、いずれも床面よりやや浮いている。礫に被熱痕、煤付着は認められなかった。
カマドの概要	東壁中央に位置する。焼上、掘り込みのはか、右組みと支石が検出された。
出土遺物	1はカマド出土の甲斐型壺で、推定口径17.5cmの小器片である。外面下部は回転ヘラ削り、底部は全面をヘラ削りされる。内面には放射状暗文と漫巻き状の暗文の組み合わせがみられる。胎土はA 1類。2はカマド手前で出土した甲斐型壺で、推定口径12.7cmの小器片である。胎土はA 1類。3はほぼ完形の甲斐型壺で、住居北西隅で出土した。口径13.5cm。底部から外面下半部にかけて回転ヘラ削りされる。胎土はA 1類。4は推定口径13.5cmの甲斐型壺で、覆土出土。底部から外面下半部にかけて回転ヘラ削りされる。胎土はA 5類。5は覆土出土の壺で、推定口径12.2cm、3分の1個体分器片である。底部から外面下半部は手持ちのヘラ削り調整、内面には放射状の磨き痕が残る。胎土はA 3類。6は覆土出土の壺で、推定口径15.7cmの3分の1個体分器片である。内面は黒色処理され、横方向の磨き痕が残る。胎土はC 2類。7は覆土出土の壺で、推定口径12cmの小器片。内面は黒色処理される。胎土はC 1類。9はカマド出土の甲斐型壺である。いずれの焼も胎土はB 1類。10はカマド周辺で出土した平斐型壺で、3分の2個体分の器片である。11はカマド横の壁沿いで出土した甲斐型壺底部で、胎土はB 1類。
遺構の時期	甲斐型X期、9世紀後半頃と思われる。

7、8号住居（第14図、写真24）

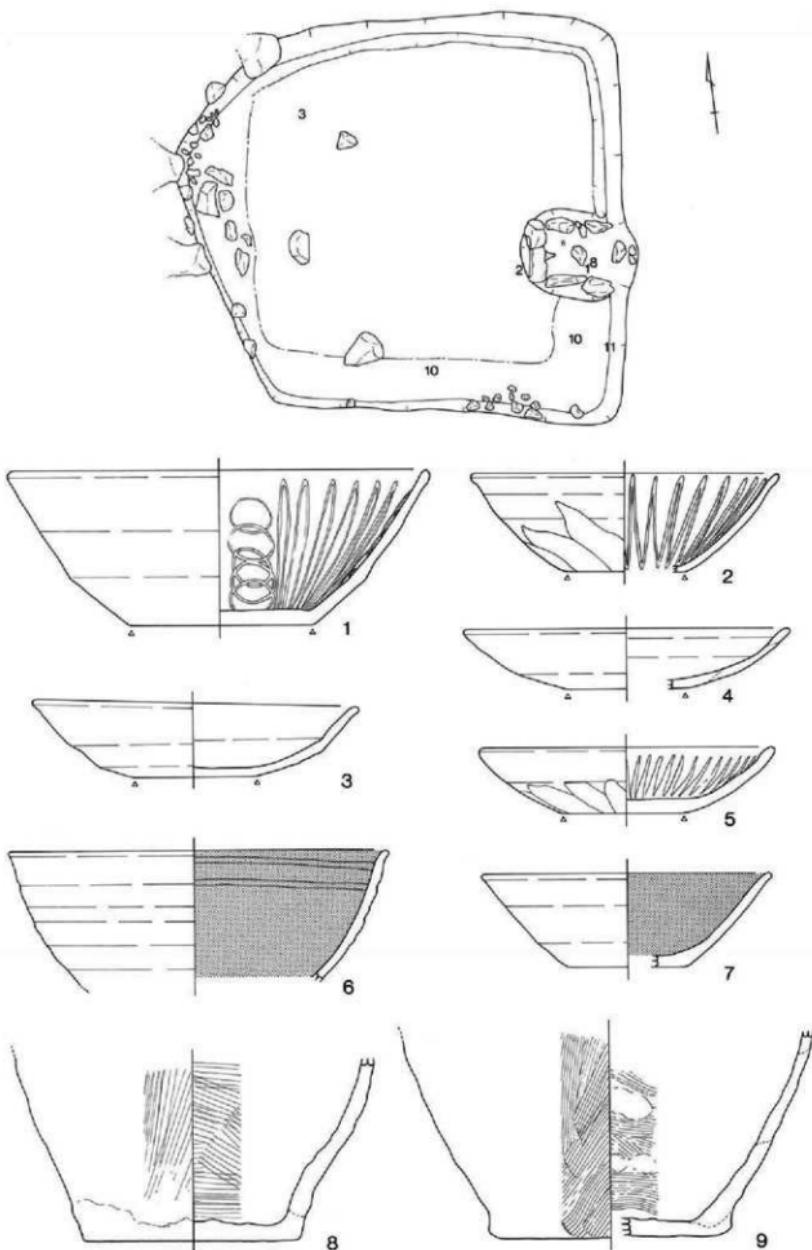
遺構の概要	両住居跡とも北壁側のほんの一部だけが検出された。
カマドの概要	北壁沿いにほんの僅かな焼上が検出されている。
出土遺物	1は土師質壺底部器片で、全体に磨耗している。底部回転糸切り未調整で、胎土はA 2類。2は8号住居焼上より出土した土師質壺で、推定口径11.3cm、器高2.9cm。3分の1個体分器片である。底部は回転糸切り未調整、胎土はE 2類。
遺構の時期	8号住居は2より平安時代末頃と思われる。7号住居も焼上址の位置から同様の時期だろうか。

9号住居（第15図、写真24）

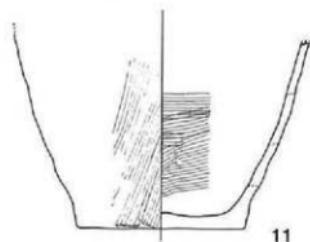
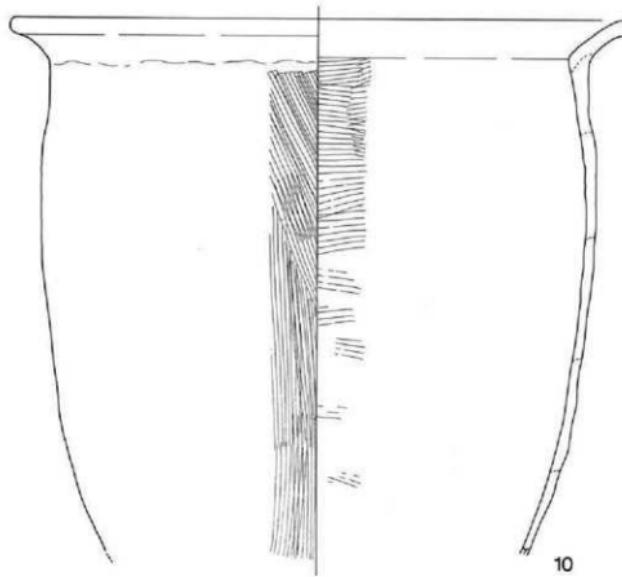
遺構の概要	北西側のみが検出された。床、周溝は検出されなかった。
カマドの概要	東壁中央部と北壁中央部の2カ所で焼土が検出された。2時期にわたり使用された住居かもしれない。
出土遺物	1は北壁沿い焼土址わきから出土した硬質の須恵器壺で、推定口径14.2cmの3分の1個体器片である。胎土質は長石粒子が混じるややざらつい質で、色調は暗青灰色。
遺構の時期	焼土址がカマド跡であると仮定して、須恵器壺から9世紀前半が北壁沿いカマドの時期と思われる。東壁沿い焼土址の時期は不明。

10号住居（第16図、第17図、写真25・26）

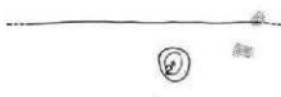
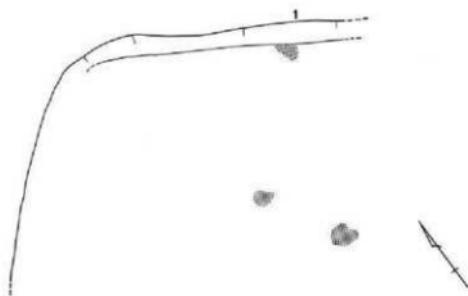
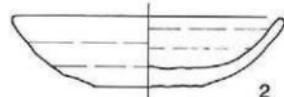
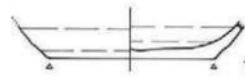
遺構の概要	4.4m×5.1mの方形の平面形をもつ。周溝、床は検出されなかった。
カマドの概要	東壁中央部で焼土と掘り込みが検出され、遺物が集中した。
出土遺物	1はほぼ完形の土師質壺で、カマドより出土している。口径12.6cm、器高4.3cm、底径5.2cm。胎



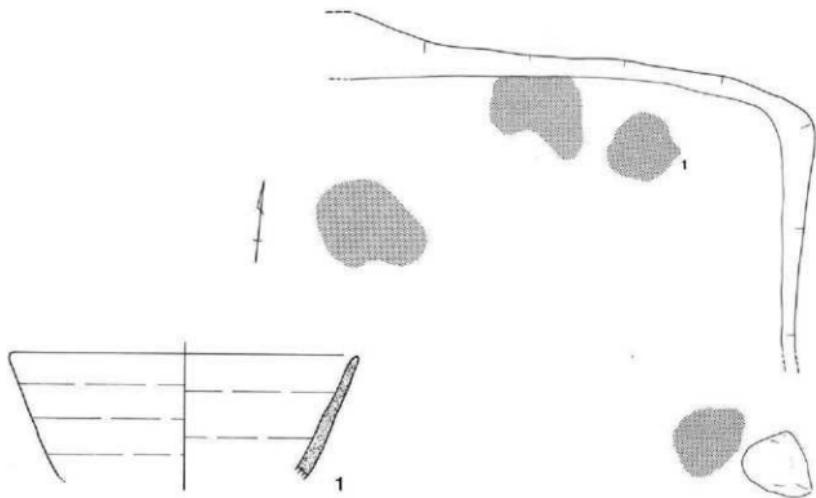
第12図 6号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



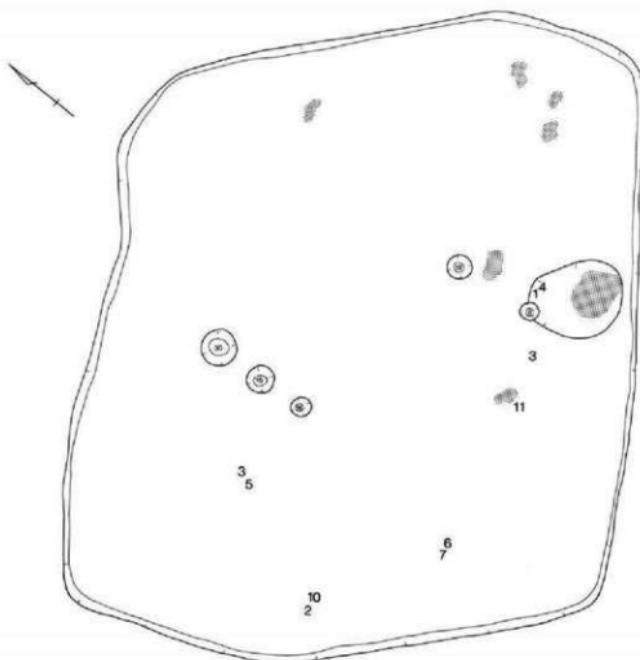
第13図 6号住居跡出土遺物(1/2)



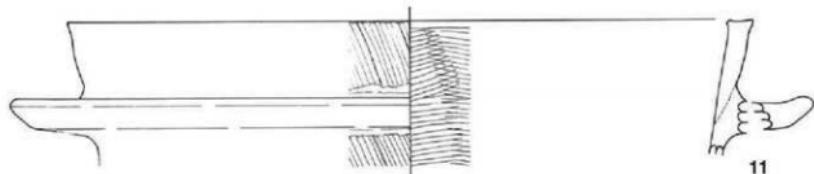
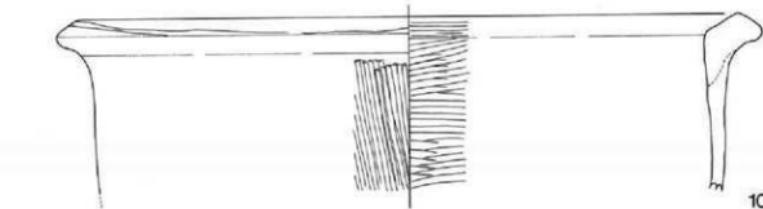
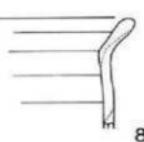
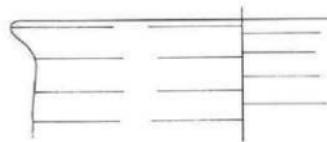
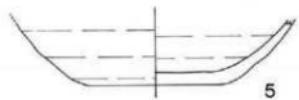
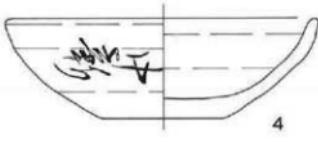
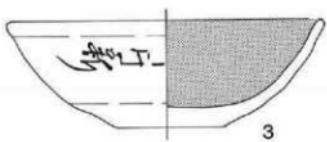
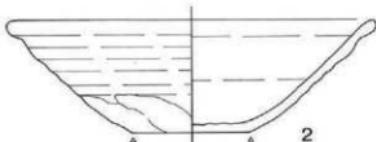
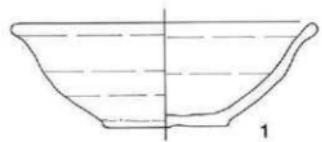
第14図 7・8号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第15図 9号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第16図 10号住居跡(1/40)



第17圖 10號住居跡出土遺物(1/2)

土はA 4類。2は3分の2個体分の甲斐型环で、口径15cm、器高4.8cm、底部と外面下半部は手持ちヘラ削り調整。胎土はA 1類。3はカマド手前と住居中央あたりで出土した环で、2分の1個体分の器片である。口径は13.1cm、器高4.4cm、底径4.4cm。4と同様の整形技法、胎土質で、内面は黒色処理される。「中新」の墨書きがある。4はカマド出土の环ではほぼ完形である。口径は12.8cm、器高4.2cm、底径5cm。胎土はC 3類。同じく「中新」の墨書きがある。5は土師質环底部片で、胎土はA 2類。6は底部のみの上師質环片で、底部は回転糸切り未調整である。胎土質はC 5類。7は上師質环底部片で、底部は回転糸切り未調整である。胎土質はA 2類。9は上師質环で、「下カ」の墨書きが底部に描かれる。胎土はC 3類。8はクロ彫整形小型甕で、推定口径19cm、胎土はD 4類。10は土師質甕で、胎土はB 1類。11はカマド横で出土した羽釜で、推定口径は28cm前後、胎土はB 2類。鉢部は胎土質より同一個体と判断し、岡上にて接合復元した。

遺構の時期 甲斐型加那期、10世紀後半頃と思われる。

11号住居（第18図、第19図、写真26）

遺構の概要 5.5m × 5mで、掘り込みは浅く遺存状態は良くない。周溝は南東隅と北西隅で検出された。固くしまった床面が南北で検出された。住居中央で周溝状の溝が床面を切るようにして検出されたが、いかなる施設なのか確認できなかった。ピットとの切り合い関係は不明である。

カマドの概要 北壁中央部と北東隅の2カ所で僅かながら焼上が検出された。

出土遺物 1は推定口径11.6cmの軟質須恵器环小器片で、床面高で出土した。焼成は悪く、色調は淡灰色である。2は住居中央床面高で出土した軟質須恵器环で、3分の2個体分の器片である。推定口径は12.5cm、器高4.8cm、底径6.8cm。1と同様、焼成が悪く軟質で色調は淡灰色である。3は覆上出土の硬質の須恵器环で、推定口径15cmの小器片である。焼成は良好で、胎土は長石粒子が混じるややざらついた質である。4は床面出土の軟質須恵器环蓋で、推定外径15.8cm、高4.2cmの3分の1個体分器片である。焼成はやや悪く軟質で、色調は淡灰色である。6は床面出土のクロ彫整形小型甕で、推定口径15.8cmの小器片。胎土はD 1類。5、7は覆上出土のクロ彫整形小型甕で、推定口径19cmの小器片である。胎土はD 1類。8は推定口径17.5cmの甲斐型小型甕の小器片、10は推定口径24.2cmの甲斐型甕である。胎土は两者ともB 1類。9は東壁沿いで凸出した須恵器蓋と思われる底部片で、内外面ナデ調整。釉は全面に厚くかかり、焼成は良好である。胎土はやや粗い。

遺構の時期 須恵器环より8世紀末～9世紀初頭頃と思われる。

12号住居（第20図～第22図、写真27・28・29・30・31）

遺構の概要 13号住居を切る。固くしまった床面が良好に検出されたが、周溝は確認できなかった。本遺跡中では3号住居と並んで大きな住居跡である。東西長5.8mほどである。

カマドの概要 東壁南寄りで比較的原形をとどめて検出された。掘り込みはほとんどみられないが、袖石が左右とも立った状態で残っている。

出土遺物 13号住居と3分の1ほどが切りあっているため、遺物は出土した位置と高さにより、12、13号住居それぞれに分離した。1は覆上出土の甲斐型环で、推定口径13.5cmの小器片である。胎土はA 1類。2は覆上出土の甲斐型皿小器片で、推定口径13.8cm。墨書きがあるが、読みは不明。A 2類。3は床面出土の甲斐型环と思われる底部片である。胎土はA 3類。4は甲斐型甕で推定口径28cm。

胎土はB1類。4は13号住居造物の可能性もある。5は覆土出土のロクロ整形窓で、推定口径28cmの小器片。胎土はD2類。6は床面出土のロクロ整形窓底部片で、推定底径9cm。胎土はD1類。7は住居中央覆土出土の土師質窓で、底部は回転糸切り未調整。胎土はE2類。8は推定口径12cmの土師質小器片で、推定口径12cm。胎土はA4類。覆土出土。9は推定口径11cmの上師質皿小器片で、胎土はA4類。10は覆土出土の上師質皿小器片で、推定口径10cm。胎土はC1類。11、12も軟質須恵器坏蓋の小片で、推定外径はそれぞれ18cm、17.8cm。13は床面出土の須恵器坏蓋の小器片で、推定外径15.8cm。焼成は良好、硬質で、色調は濃い青灰色。14は軟質須恵器坏蓋で床面出土。推定外径15.8cm。焼成はまづまずだが、色調はやや淡い青灰色。15、17は覆土出土の軟質須恵器坏で、推定口径16cmと推定底径6cmの小器片。16は覆土出土の軟質須恵器坏の底部片で、推定底径7cm。回転糸切り未調整、焼成は不良、色調は淡青灰色である。18は覆土出土の軟質須恵器高台付环底部片で、底径9cm。回転糸切り後、高台を付けている。焼成は悪く軟質で、色調は淡灰色である。25は住居中央床面高で出土した推定口径18.2cmの綠釉陶器小器片で、釉色は緑色で、濃淡がある。焼成はやや不良で軟質。26は覆土出土の綠釉陶器で、推定口径20cmの小器片。焼成は良好で硬質、釉色は緑色と淡黄色。器面は釉色によりつやつやしている。内面下半部には斜めのヘラ削きと思われる痕跡がみられる。27は住居中央床面高で出土した灰釉碗で、体部と底部はやや離れて出土した。接合はしないが胎土質より同一個体と判断し、図上で復元した。推定底径15.3cm、器高6.6cm、底径6.5cm。付け高台、釉薬は剥け掛けである。28は13とは完全形の灰釉碗で、口径15.6cm、器高7cm、底径7.6cm。釉薬は剥け掛け、焼成はやや軟質である。胎土はキメの細かい緻密な質で、色調は淡灰色。付け高台。29はカマド出土の灰釉碗で、口径14.7cm、器高5.9cm、底径7.1cmの3分の2個体分器片である。付け高台。30はカマド左側で出土した灰釉碗で、推定底径16cmの小器片である。胎土はやや粗い。31、32は覆土出土の灰釉碗小器片で、推定口径15cmと13.9cm。以上他の、置きカマドと思われる器片がある。

遺構の時期

甲斐型土師器はX～XI期と思われるが、いずれも小器片で流れ込んだものと考えられる。灰釉、須恵器からは10世紀後半頃と思われ、この時期を住居の時期としておきたい。

13号住居（第20図、第23図、写真27・28・29・30）

遺構の概要 12号住居に切られる。東西長4.6mほど。北壁沿いには刷毛が検出されたが、固くしまった床面は残らない。ピットとの切り合い関係は不明。

カマドの概要 東壁中央あたりで焼土と石組みが検出された。被石はほぼ原位置をとどめる。

出土遺物 1は住居中央床面高で出土した甲斐型坏で、3分の2個体分の器片である。口径9.8cm器高3.8cm、底径5.3cm。底部は回転糸切り未調整、外面下半部はヘラ削り調整、内面は放射状暗文がある。胎土はA5類。2は西壁沿いで出土した甲斐型坏で、口径11cm、器高4cm、底径5.2cm。底部から外面下半部にかけてヘラ削り調整、内面には放射状暗文がみられる。胎土はA1類。3はほぼ完全形の大型坏で、口径19.8cm、器高8cm、底径8.5cm。底部は糸切り後ヘラ削りされる。外面下半部は回転ヘラ削り調整。内面は黒色処理される。胎土はA5類。4は軟質須恵器高台付环底部片である。5は軟質須恵器坏で、推定口径11.6cm、器高4.4cm、底径6cmの4分の1個体分器片である。底部は回転糸切り未調整。6は軟質須恵器坏で、カマドより出土。推定口径12.2cmの小器片である。7は覆土出土の皿で、推定口径12cmの小器片である。胎土はA4類。8はロクロ整形窓底部片である。胎土はD2類。9は覆土出土の甲斐型小器片で、推定口径20cmの小器片。胎土はB1

類。10はカマドわきより出土した甲斐型小型甕で推定口径22cmの小器片である。胎土はB1類、11はカマド出土の甲斐型小型甕で、推定口径18cmの小器片である。胎土はB1類。12は甲斐型甕で推定口径28cmの小器片である。13は推定口径30cmの甲斐型甕小器片である。胎土はとともにB1で推定口径28cmの小器片、13は推定口径30cmの甲斐型甕小器片である。胎土はともにB1類。

遺構の時期 出上遺物の多くは甲斐型甕期でまとまるため、9世紀前半頃と思われる。

2 遺構外出土遺物（第24図）

平安時代の遺構外出土遺物を記す。1は0-7グリッド出土上の土師質甕で、推定口径22.7cm。0-7グリッドには焼土址があり甲斐型甕期頃の住居跡があった可能性があるが、遺構としては検出されなかった。2はU-4グリッド出土のクロクロ整形甕底部片で、底径8.6cm。3はU-4グリッド出土の須恵器壺底部片で、推定底径7cm。4は出土位置不明の須恵器壺底部で、推定底径6cm。5はU-4グリッド出土の須恵器壺蓋で、推定外径15cmの小器片である。焼成はやや悪く軟質で、色調は灰白色である。6はU-4グリッド出土上の須恵器壺口縁部片で、推定口径27cm。7はTP68出土の須恵器凸唇帯壺片である。緻密な胎土で焼成は良好硬質、色調は淡青灰色。その他、平安時代と思われる土坑3基がR-8グリッドで検出されているが、報告は第5章にゆする。

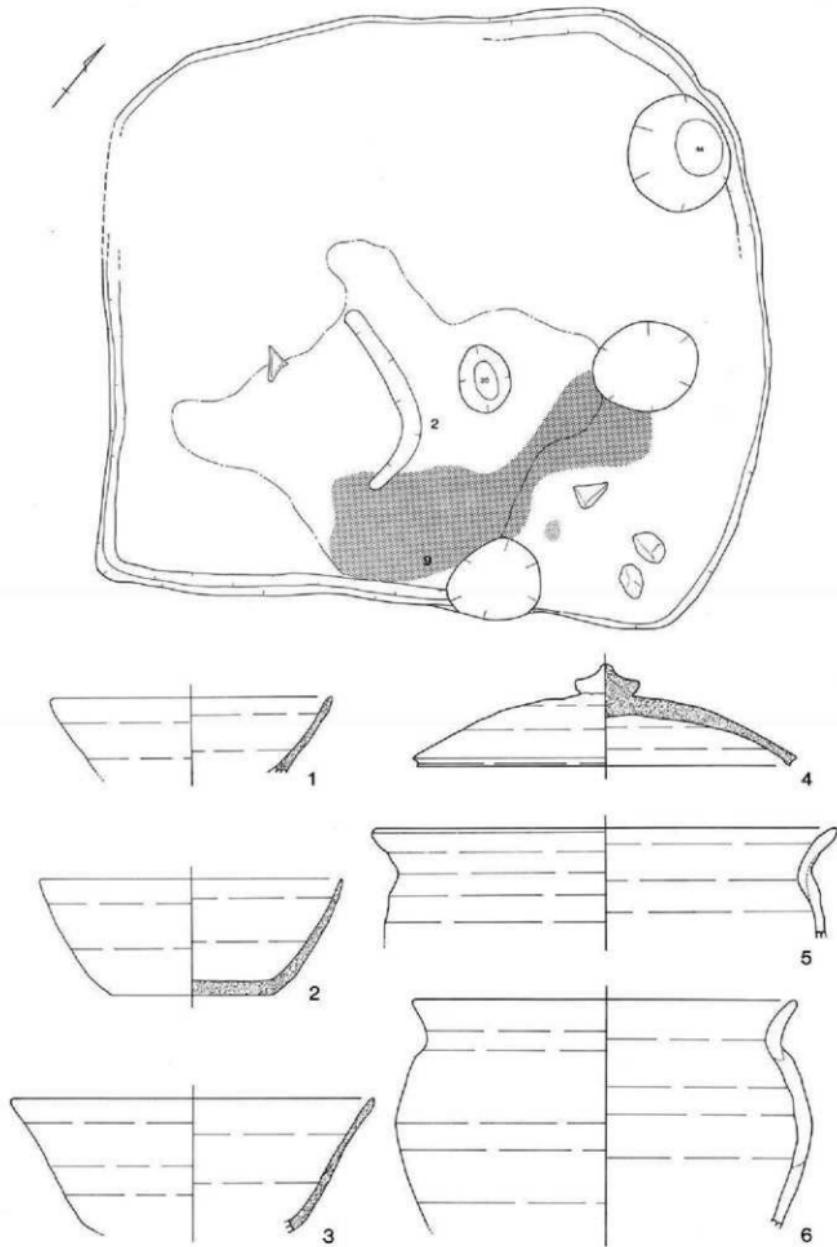
第5章 その他の時期の遺構と遺物

1 遺構と遺物（第25図、第26図、写真30・31）

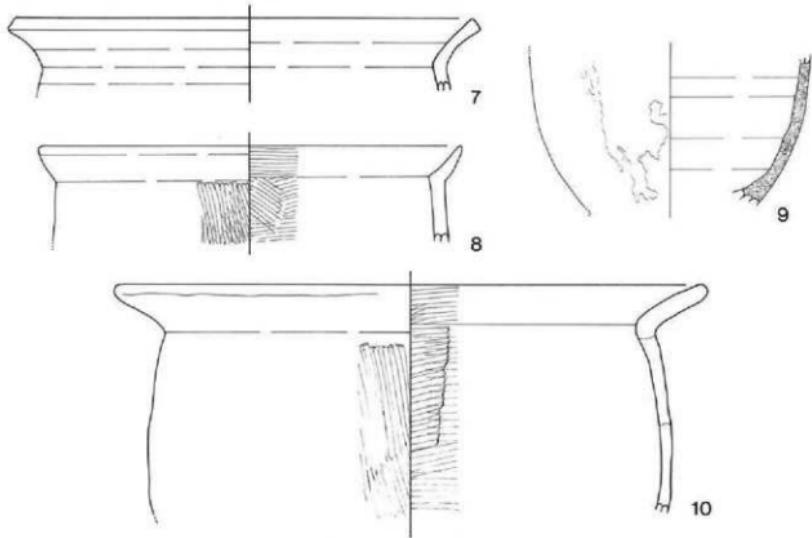
ここで報告する遺構外遺物は一点のみで25図。2はD-8グリッドより出土した、器向にくっきりと条痕が残る器片である。胎土はやや大きめの鉱物粒子が混じる砂っぽい質で、色調は乳白色。弥生時代中期頃のものと思われる。

また、遺構についてはR-8グリッドで土流が集中して検出された。遺物は出土しているが土坑の時期を特定できるのは1号土坑くらいである。

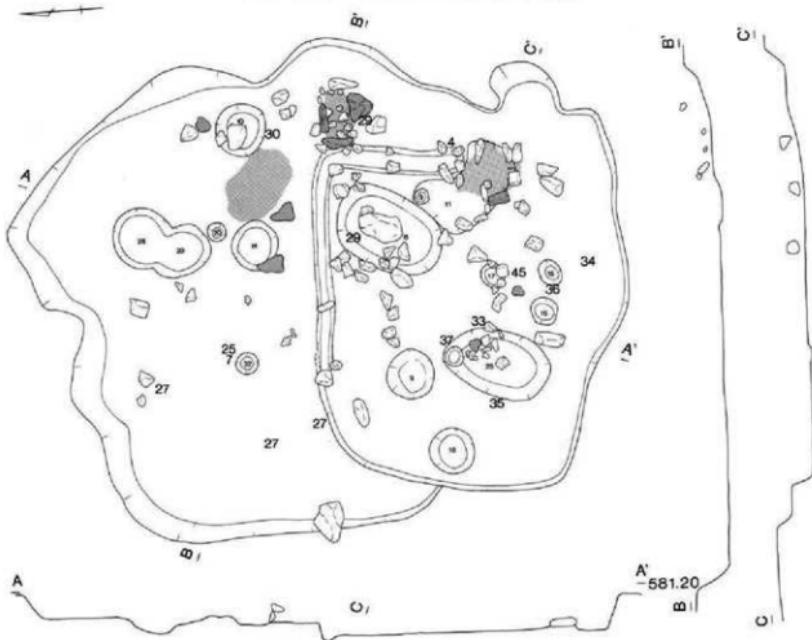
- 1号土坑 R-8グリッドで検出された古墳時代前期と思われる土坑で、S字口縁甕が出土している（1）。裏はほぼ完形、横倒しの格好で土坑壁上部で出土した。覆土は黒褐色の粘質土。
- 2号土坑 繩文時代中期末葉から後期と思われる土器片（7～10）が出土している。黒褐色土に黄褐色砂質土が混じる。
- 3号土坑 覆土より繩文時代中期末葉と思われる同一個体の土器片数点（5・6）と平安時代の土器片数点（3）が出土した。黒褐色土に黄褐色砂質土が混じる覆土。
- 4号土坑 繩文時代後期と思われる土器小片数点と底部（4）が出土した。胎土は3号土坑と同様である。
- 5号土坑 斧めに掘り込まれたピットで、人為的なものか不明。出土遺物なし。黒色の粘質土。
- 7号土坑 灰色のしまりがない覆土で、比較的新しい時期の土坑と思われる。出土遺物なし。
- 以上の土坑の他、ピットが検出されたが、遺物は構成する組み合わせは確認できなかった。



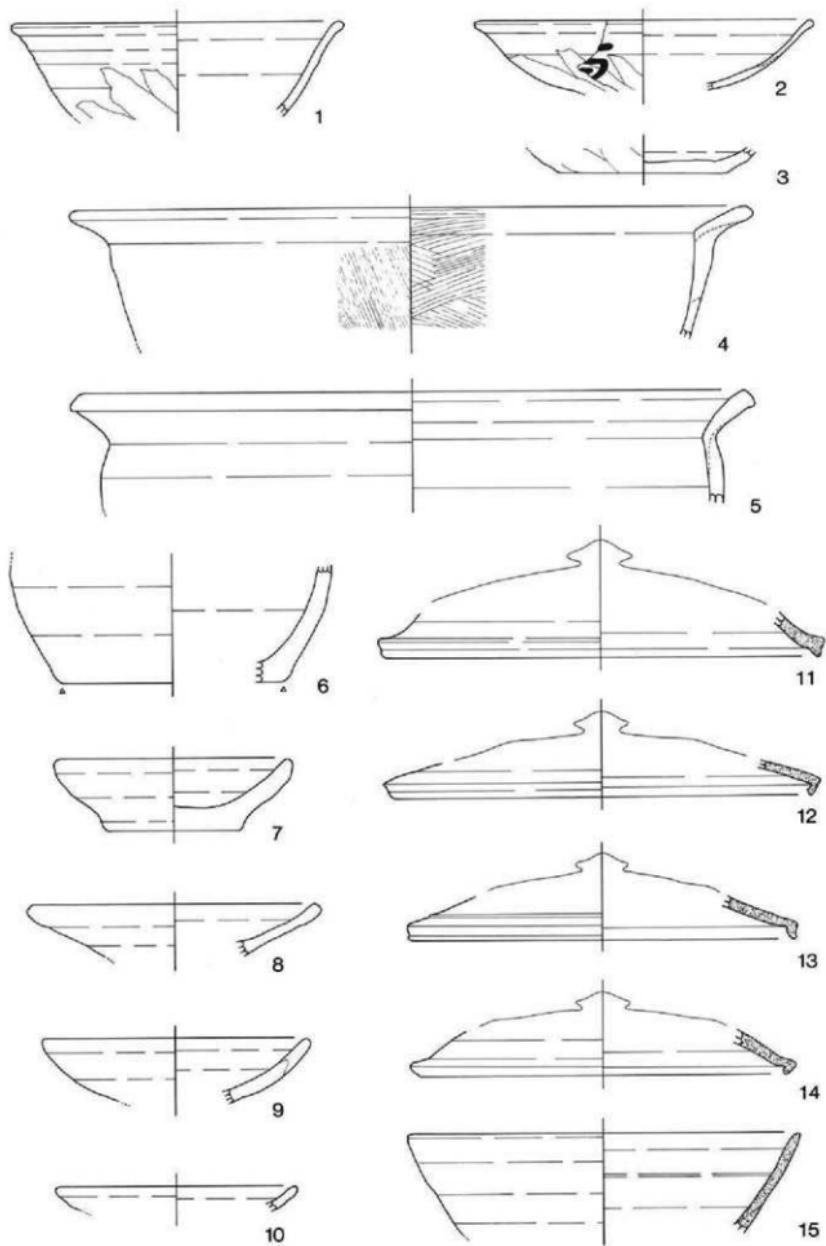
第18図 11号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



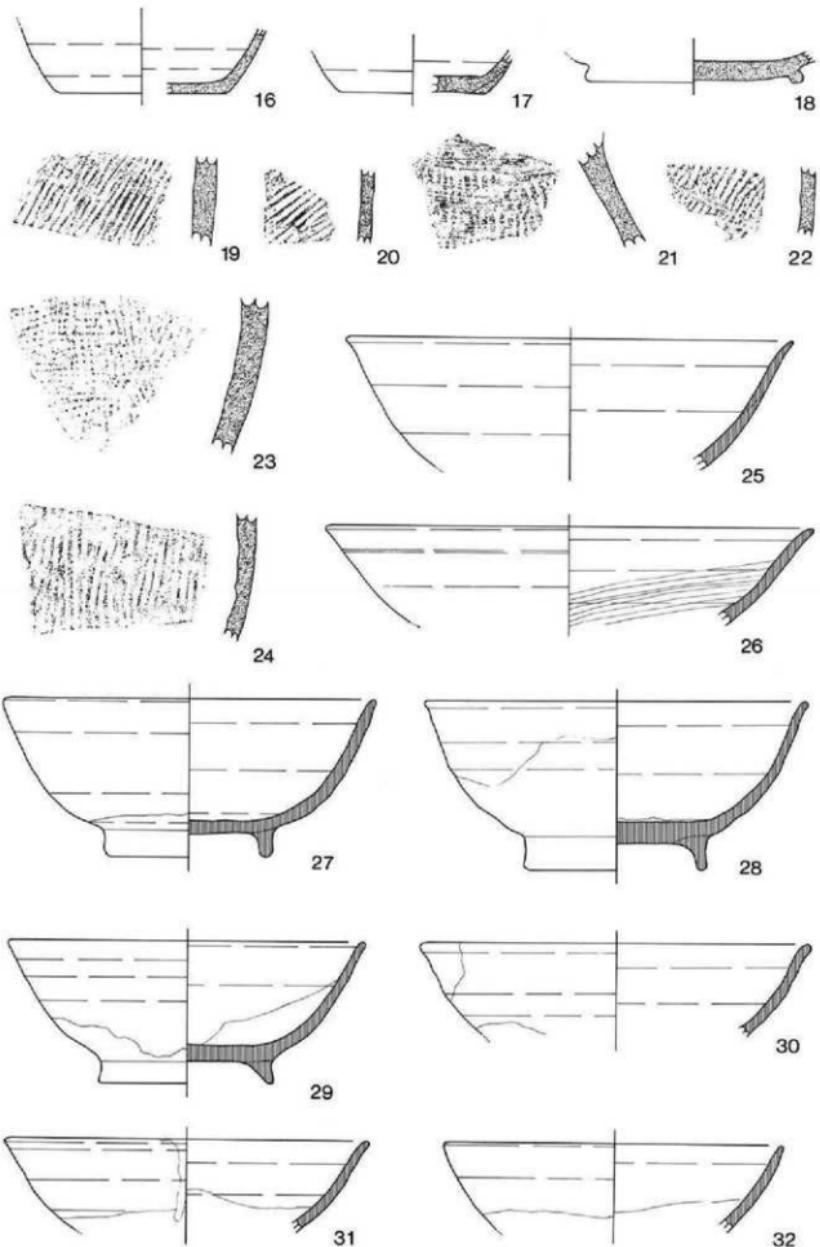
第19図 11号住居跡出土遺物(1/2, 9のみ1/3)



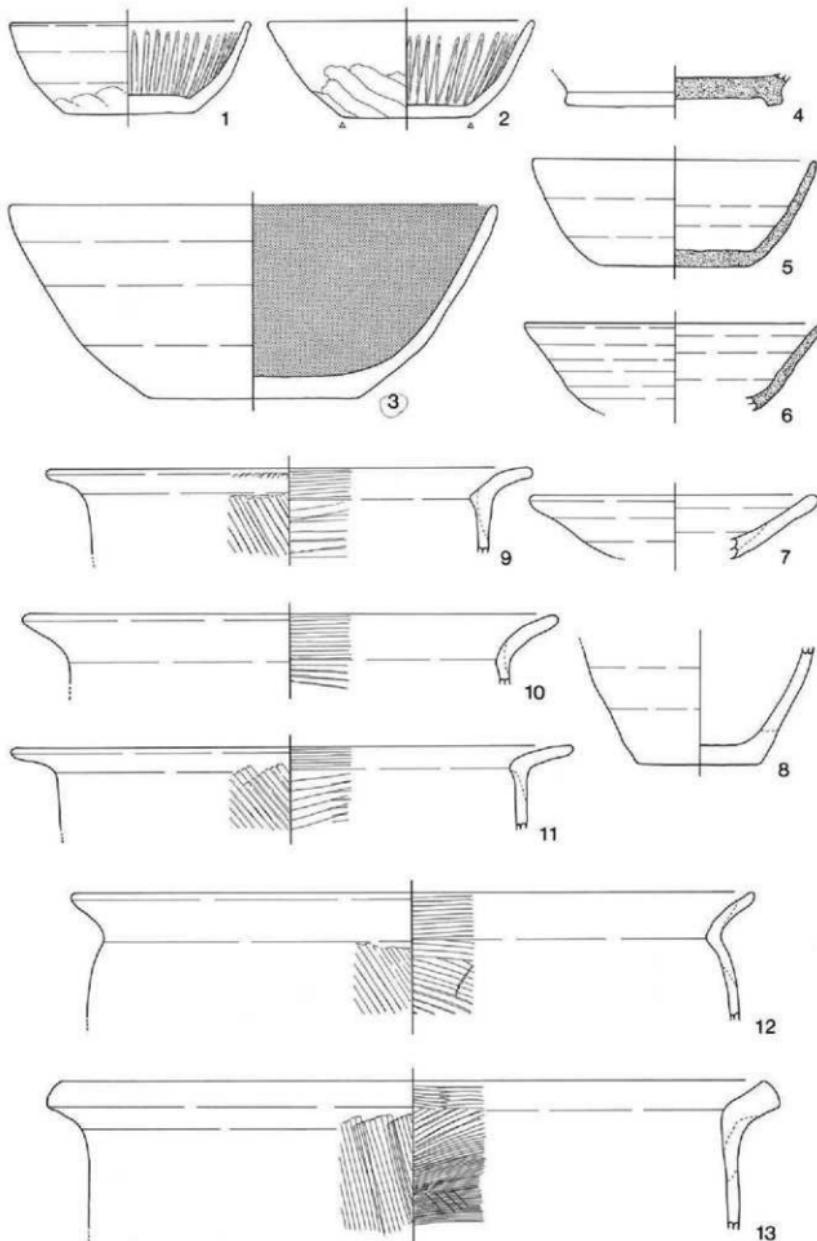
第20図 12・13号住居跡(1/60)



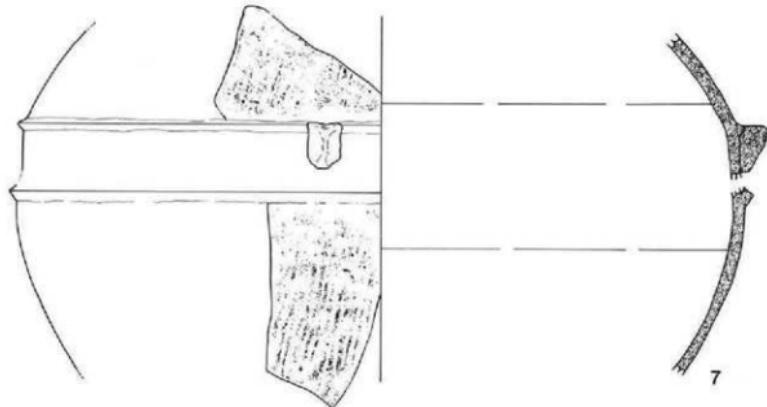
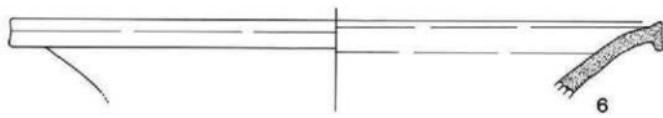
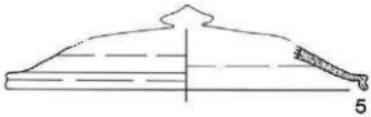
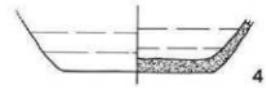
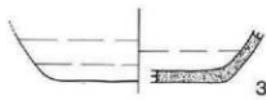
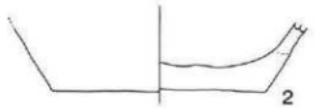
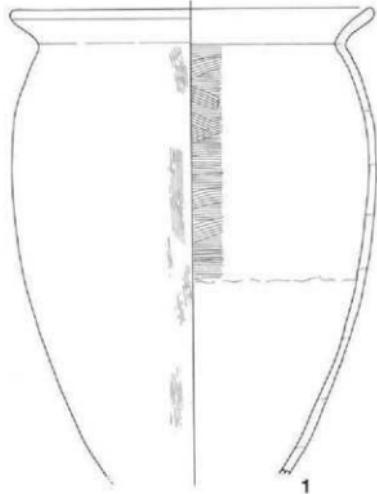
第21図 12号住居跡出土遺物(1/2)



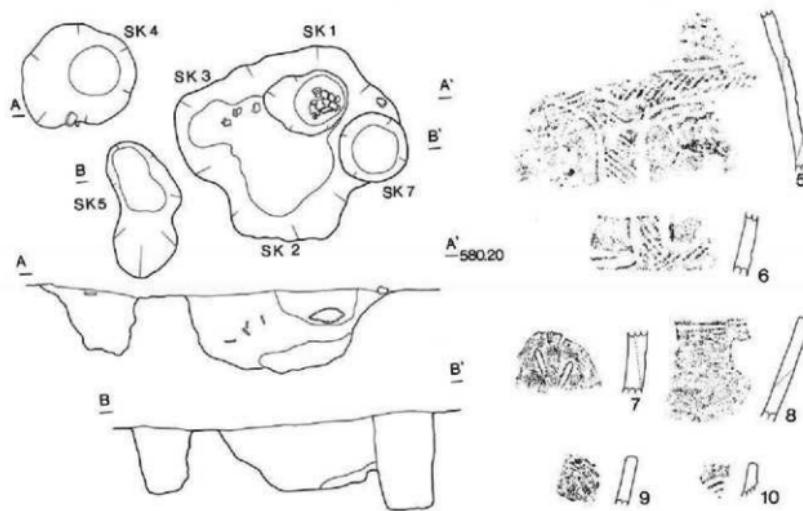
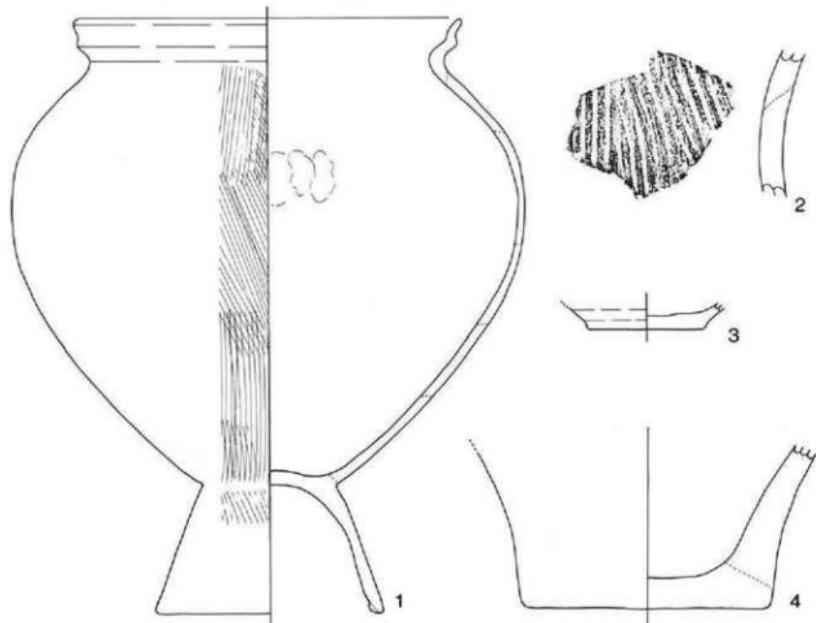
第22圖 12号住居跡出土遺物(1/2)



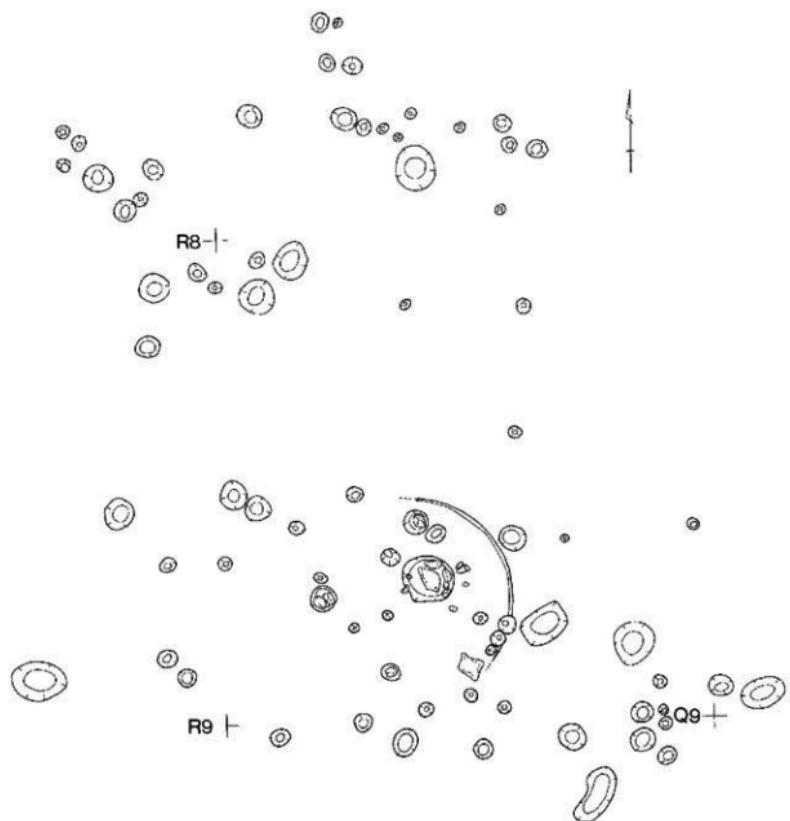
第23図 13号住居跡出土遺物(1/2)



第24図 遺構外出土遺物(1/2, 1のみ1/3)



第25図 その他の時期の遺構(1/40)と遺物(1/2, 5~10 1/3)



第26図 土坑位置図(1/90)

第6章 まとめ

以上の報告のとおり、高台・中谷井遺跡、村之内II・III遺跡は、平安時代を主体とする集落遺跡である。どちらも遺構の遺存状況に恵まれなかつたが、高台・中谷井遺跡では遺構外ではあるが多くの調文時代の遺物が出土し、村之内II・III遺跡では鐵治関連遺構が検出されている。これら特に注意を引く点について、ごく簡単ではあるが考察を加えてみたい。

調文時代 三十稻場系土器（注1）

高台・中谷井遺跡では、純文時代中期後半から後期後半までの遺構外出土土器が得られた。特に県内での出土例があまり知られていない三十稻場式の影響を受けた土器が、比較的良好な形で出土したことは注目されよう。三十稻場式は新潟県及び福島県南西部を中心に分布する後期初頭に位置づけられる形式であるが、その古段階は称名寺II式との併行関係が確認されており、北陸地方のみならず広く東北南部から中部地方西部、関東地方南部にまで出土例がみられる（田中1989）。山梨県に隣接する長野県、神奈川県などでも出土例があることから本県でも当然その影響がみられると予想されるが、本県での出土例はあまり多くない。乍見に触れた県内の出土事例は次のとおりである。

須玉町上ノ原遺跡 B46号土坑で地文に円形刺突文が施文される称名寺II式から堀之内I式と並ぶ把付深鉢が出上している（見学会資料）。胎上は在地系と変わりなく三十稻場式そのものではないらしいが、北陸地方の影響、交流を示す資料と考えられよう（梅原功一氏のご教示による）。

高根町川又坂上遺跡 7号址より把付の広口刺突土器が出上している。三十稻場式特有の刺突文はみられないが、器形に三十稻場式の影響を感じさせる例である。列点文が施文されていることから称名寺式末から堀之内I式頃のものと思われる。

小瀬沢町平出遺跡 7丁住出土の小器片に円形刺突文を地文とする堀之内I式土器片がみられる。報文に詳細な報告がないため拓影から判断するしかないのであるが、8の字形の貼付文を口縁部に施し、その下に刺突文があるように見える。平出遺跡は中期末葉の遺構を中心とする遺跡であるが、後期称名寺式から堀之内式の遺構外遺物が出土している。三十稻場式そのものというより、その影響を感じさせる例である。

都留市住吉遺跡 三十稻場式古段階を思わせる広口深鉢の小片が出土している。肩部に錫状の太い墾帯を貼付け、円形刺突文を施文する。しかし、高台・中谷井遺跡と同じく、器形は三十稻場式そのものとは異なり、関東・中部地方の中前期末葉から後期初頭にかけてみられる広口壺に近い。胎上は在地のものか不明であるが、三十稻場式の搬入品というより影響を受けた例と考えられよう。

三十稻場式が客体的に分布する他地域と同様、本県でも出土例は決して多くないようである。未報告の資料もあるものと思われるが、三十稻場式はきわめて目立つ土器であるため、見逃されていることは少ないとと思われる。本県での三十稻場式の影響を受けた土器は、本遺跡と上ノ原遺跡で確認できたとおり、在地系胎上による模倣（三十稻場式そのものの搬入品ではない）というあり方を示すようである。三十稻場式の影響は本県北西部と南東部両端で確認されたわけで、今後後期初頭の遺跡を調査するにつれて、資料数は増加するものと思われる。

鍛冶関連遺構

村之内Ⅲ遺跡1号住居では羽口、鉄滓が出土している。県北西部は鍛冶遺構、鍛冶関連遺構が多く分布する地域であるが、茅ヶ岳山麓でのこうした遺構の検出は初めてのことである。県内の鍛冶遺構、鍛冶関連遺構については既に保坂康夫氏の集成論考（保坂1992）があり、ここではそれら先学の成果をもとに、1号住居の評価をしてみたい。

1号住居を鍛冶に関連した遺構とみる第一の点は、羽口2点、鉄滓、鉄滓の付着した土器片の出土があったことである。さらに鍛冶行為とは直接関連しないが、1号住居には他の住居とは明らかに異なるいくつかの要素をみることができる。それは4点の灯明皿、墨書きされた4点の土器片、完形土器の多さである（3分の1個体まで含めると8点になる）。

遺構の特徴としては住居内に浅い窓み、小ビットがみられることが挙げられる。またカマドは、他の住居のカマドの遺存状態が悪いため比較できないが、焼上量が多くカマドを構築したと思われる窓はやや被熱して破砕しており、平安時代住居のカマドとしては被熱の具合が高いと考えられよう。一方、鍛冶遺構の決め手となる金床石や被熱、硬化した床面は検出されなかったものの、焼土と炭を多量に散在する床面がカマド右側で検出されている。

以上のような1号住居の特徴を保坂氏の鍛冶遺構の分類に沿って解説すると、鍛冶施設が存在する「地床鍛冶炉型」ととらえることができる。金床石がおそらくは移動式で住居内に残されていないことも宮間川遺跡47号址と同様である。地床鍛冶炉が壁面に近い箇所に存在することは当然火災の心配があるわけで、床面の被熱度もさほど高いわけではなく、本当に地床鍛冶炉と解してよいのか若干の疑問も残る。住居中央の浅い掘り込みは貯蔵穴などととらえるのは無理があるが、移動式とはいや大きめの金床石を定置するためのものと考えることはできよう。掘り込みの規模は宮間田33号住居と近い。また、掘り込みと住居南東隅の焼土たまりとのあいだにスケールと炭が散在していたこともそうした考え方を支持するものと思われる。従ってこの掘り込みを金床石定期用と考えれば、1号住居は「金床石敷設型」とともらえることができる。

保坂氏は金床石や地床炉などの正確な鍛冶施設を有する鍛冶遺構が甲斐型VII-X期にみられるとして、「地床鍛冶炉型」の消滅時期を甲斐型VIII期頃、「金床石敷設型」の消滅時期を甲斐型XII期頃とそれぞれ想定している。

ここでは、1号住居を金床石を敷設する地床鍛冶炉型と考え、茅ヶ岳山麓では甲斐型XII期まで存続する可能性を指摘しておきたい。

以上、思いつくままに簡単に考察してみた。浅学ゆえにとんでもない思い違いをしているのではとおそれているが、先学諸氏のご叱正、ご教示を乞いたい。

注1 ここでは三種業式の影響を受けた土器という程度の意味で用いている。

参考文献

- | | |
|--------------------------------------|------------------|
| 高宮正樹 1983 「高根町湯沢遺跡」『山梨考古』10 | 山梨県考古学協会 |
| 高宮正樹 1984 「東久保遺跡」 | 高根町教育委員会 |
| 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」「調査研究収録」5 | 港北ニュータウン埋蔵文化財調査会 |
| 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と編年」「調査研究収録」9 | 鶴横浜市ふるさと歴史財團 |
| 石井 寛 1993 「牛ヶ谷遺跡 幸藏台南遺跡」 | 鶴横浜市ふるさと歴史財團 |
| 今村啓賀 1977 「称名寺式土器の研究(上)」「考古学雑誌」63(1) | 日本考古学会 |
| 今村啓賀 1977 「称名寺式土器の研究(下)」「考古学雑誌」63(2) | 日本考古学会 |

大森隆志	1988	「北原遺跡」	明野村教育委員会
大森隆志	1989	「睡石遺跡 楽師堂遺跡 白山I遺跡」	明野村教育委員会
大森隆志	1990	「千野木I・II遺跡 池の下遺跡 磐石II遺跡 中村遺跡神遺跡」	明野村教育委員会
大森隆志	1991	「古後遺跡 浦田遺跡」	明野村教育委員会
折井 敦	1991	「上北田遺跡 新居遺跡」	白州町教育委員会
甲斐型土器	1992	「甲斐型土器—その編年と年代—」	山梨県考古学協会
研究グループ			
橋原功一	1985	「東姥神B遺跡」	大泉村教育委員会
小平和夫	1990	「古代の土器」	中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—』
櫛現堂遺跡	1989	『櫛現堂遺跡』	側長野県埋蔵文化財センター
学術発掘調査会			
佐野 雄	1992	『尾数系』	明野村教育委員会
佐野 隆	1994	『神取』	明野村教育委員会
木本 錠	1975	『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北口摩郡長坂・明野・垂崎地内—』	山梨県教育委員会
木本 健	1976	『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 北口摩郡須玉町地内—』	山梨県教育委員会
木本 健	1987	「八ヶ岳西麓の古代甲信国境」「甲斐路」59	山梨郷土研究会
瀬田正明	1994	「健康村遺跡出土の土師器について」『健康村遺跡』	新宿区区民健康村遺跡調査会
谷藤保彦編	1990	『縄文後期の諸問題』	縄文セミナーの会
関根慎二			
都留市史	1986	『都留市史資料編 地史・考古』	都留市
編纂委員会			
新津 鍾	1993	川又坂上遺跡	山梨県教育委員会
三田村美彦			
萩原三雄	1986	「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集I』	山梨県考古学協会
平野 修	1988	『宮間田遺跡』	武川村教育委員会
平野 修	1992	『宮ノ前遺跡』	足柄市遠跡調査会
橋原功一			
保坂康夫	1986	『駒井遺跡発掘調査報告書』	山梨県教育委員会
保坂康夫	1992	「山梨県下の平安時代鐵造構の様相」『山梨県考古学論集』5	山梨県考古学協会
宮沢公義	1987	『普門寺遺跡』	明野村教育委員会
森原明廣	1994	「山梨県地域における古代末期の上器様相」「丘陵」14	甲斐丘陵考古学研究会
山下孝司	1986	『金山遺跡 下木戸遺跡 中瀧遺跡』	甲斐市教育委員会
山下孝司	1987	『中木戸遺跡 堂の前遺跡』	甲斐市教育委員会
山下孝司	1988	『前田遺跡』	甲斐市教育委員会
山下孝司	1989	『後田遺跡』	甲斐市教育委員会
山下孝司	1990	『北後田遺跡』	甲斐市教育委員会
山路恭之助	1983	『大小久保遺跡』	須玉町教育委員会
山路恭之助	1984	『中尾城遺跡 原田遺跡』	須玉町教育委員会

写 真 図 版



写真図版 1

村之内 II・III

村之内 II・川瀬跡
全景(手前が村之内
III)



村之内 II・III
全景



写真図版 2
村之内 II
1号住居



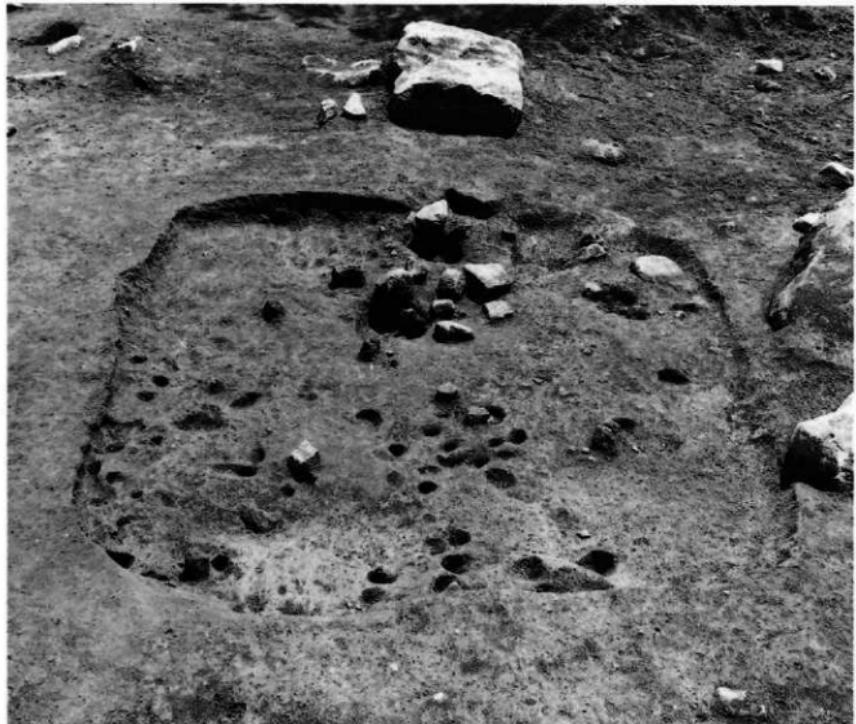
2号住居
(手前、奥は1住)



写真図版 3

村之内 II

3号住居



1号住居遺物出土
状況（左）



2号住居遺物出土
状況（右）



3号住居遺物出土
状況（左）

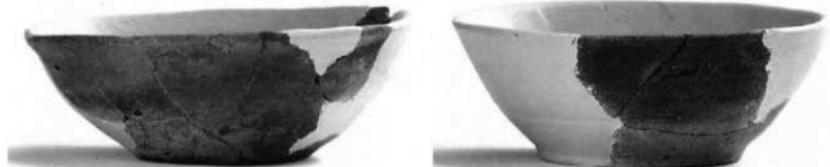


2号住居出土土器
（右：7圖-1）





4号住居カマド
(左)
4号住居遺物出土
状況(右)



4号住居出土土器
左: 3図-1
右: 3図-3

写真図版5

村之内II

4号住居出土土器

左: 9回-7

5号住居出土土器

右: 13回-4



5号住居カマド

(左)

5号住居出土土器

右: 13回-4



5号住居遺物出土

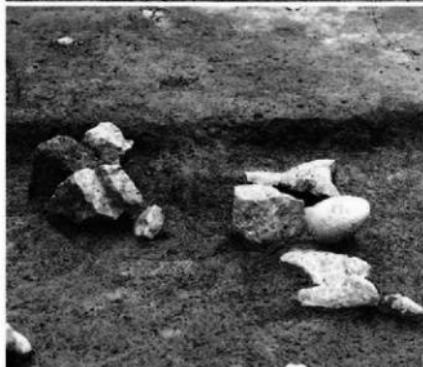
状況(右)

5~7号住居

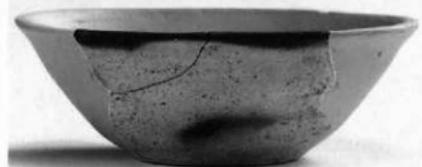




6号住居カマド
(左)
6号住居遺物出土
状況



6号住居出土土器
左: 14回-6
右: 14回-13

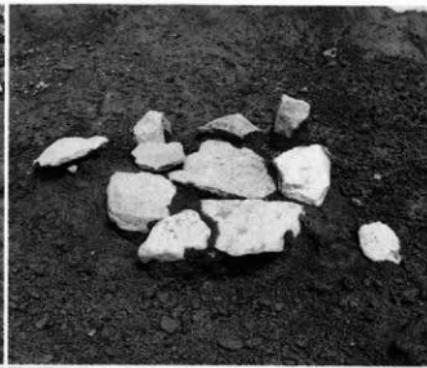


写真図版 7

村之内 II

7号住居遺物出土
状況(左)

7号住居力マド
(右)



8号住居力マド
(左)

8号住居石列(右)



8号住居





10号住居



写真図版 9

村之内 II

11号住居



9号住居出土土器

〔左: 1988-5〕

10号住居遺物出土

状況〔右〕



11号住居出土土器

左: 2188-3

右: 2388-4





13号住居



写真図版II

村之内 II

14号住居



15号住居



写真図版12
村之内II・III
12号住居遺物出土
状況(左)
15号住居出土土器
(右: 26図-3)



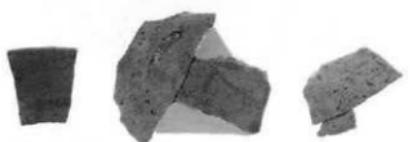
土師質小皿
(右列手前20図-
1; 右列中25図-
2; 右列奥26図-
1; 左列手前28
図-3; 左列奥28
図-2)



17号住居出土土器
(右: 26図-5)



18号住居(左)
20号住居(右)



19号住居出土土器
(左: 25図-2)
墨書き土器 上左よ
り9図-8、9図-
5、19図-3、24
図-2 下左より
31図-14、31図-
16、31図-17



1号住居出土状況
(左)

1号住居カマド
(右)



1号住居出土土器

左:30回-1

右:30回-2





左:30回-5

右:30回-6



左:31回-8

右:31回-10



左:31回-15

右:31回-21・22



写真図版15
村之内III
2号住居



溝状遺構



写真図版16

村之内II・III

薄セクション

溝状遺構

(奥は15号住居)



溝状遺構

(奥は3号住居)

14号住居内埋設土器出土状況(右)



埋設土器出土状況
(左)

埋設土器(右)



縄文時代の遺物
(4図)

遺構外出土遺物

(右2点、29図-
2・3388-1)

写真図版17

高台・中谷井

高台・中谷井遺跡

全景

(奥は茅ヶ岳)



近景





16号住居完掘状況
(左)
16号住居炉址(右)



16号住居出土土器
左: 3回-1
右: 3回-3



写真図版19

高台・中谷井

遺構外出土遺物

縄文時代の土器

(4図)



写真図版20
高台・中谷井
遺構外出土遺物
縄文時代の土器
(5図)



縄文時代の石器
(5図)

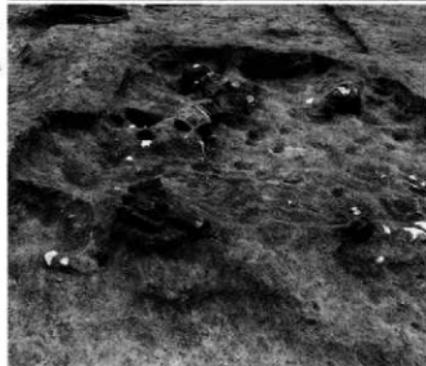


写真図版21
高台・中谷井
2号住居



2号住居遺物出土
状況（左）

2号住居出土土器
右：7図-1



左：7図-2
右：7図-7





2号住居出土土器
(左: 7図-9)
3号住居カマド
(右)



4号住居出土土器
左: 9図-1
右: 8図-5





写真図版24
高台・中谷井
5号住居力マド
(左)
6号住居力マド
(右)



6号住居出土土器
(左: 12図-3)
8号住居出土土器
(右: 14図-2)



8号住居

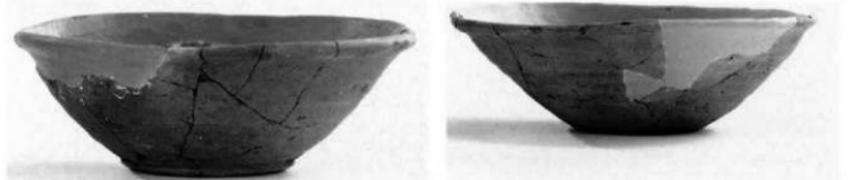
写真図版25
高台・中谷井
10号住居



10号住居遺物出土
状況



10号住居出土土器
左:17図-1
右:17図-2



高台・中谷井

10号住居出土土器

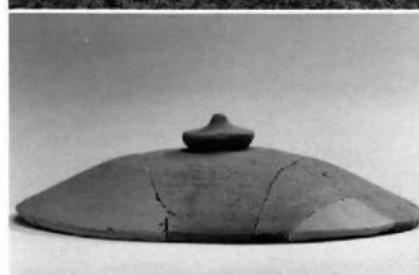
左：17回-4

右：17回-3



11号住居（左）
11号住居遺物出土
状況（右）

11号住居出土土器
右：18回-2



11号住居出土土器
左：18回-4

作業風景

写真図版27

高台・中谷井

12・13号住居



12号住居



写真図版28
高台・中谷井
12号住居出土物出土
状況（左）
12号住居カマド
(右)



12号住居出土土器
左：22図-26
右：22図-29



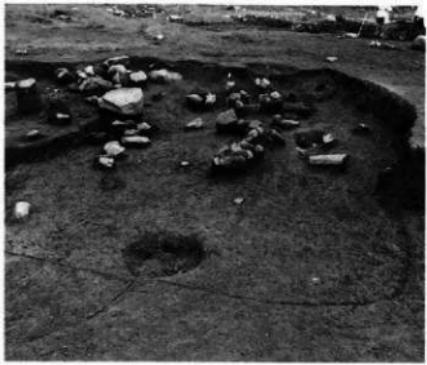
13号住居

写真図版29

高台・中谷井

12号住居出土土器
(左:21図-7)

13号住居遺物出土
状況(右)



13号住居カマド
(左)

13号住居出土土器
右:23図-1



13号住居出土土器
左:23図-2

右:23図-3



作業風景

12・13号住居カマ
ド(右)



写真図版30
高台・中谷井
12・13号住居完掘
状況



1号土坑



写真図版31

高台・中谷井

墓出土器(左)

上左: 8回-1、

上右: 8回-2、

下左: 17回-9、

下右: 21回-2

1号土坑出土土器

(右)



土坑出土遺物

(左: 25回 2~7

~10)

土坑出土遺物

(右: 25回-5・

6)

発掘調査参加者



報告書抄録

ふりがな	むらのうちII・田いせき たかだい、なかたにいいせき						
書名	村之内II・田遺跡 高台・中谷井遺跡						
卷次							
シリーズ名	明野村文化財調査報告						
シリーズ番号	第9集						
編著者名	佐野 隆						
編集機関	明野村教育委員会						
所在地	〒407-02 山梨県北巨摩郡明野村上手5219-1 TEL 0551-25 2311						
発行年月日	西暦1995年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
村之内II・田遺跡 4,552ほか	明野村上手 9,646ほか	194026 AN052-053	35°46'30"	138°26'10" 19930520～ 19930719		7,600	県管圃場 整備事業
高台中谷井遺跡	明野村上手 9,646ほか	AN003	35°46'00"	138°27'00" 19930614～ 19930916		10,700	県管圃場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
村之内II・田遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居 溝址 1条	土師器・須恵器・灰陶器 上部質土器	鎌治施設付住居1軒		
高台中谷井遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居 1軒	土器・石器	三十箱葉式板倉土器		
		平安時代	竪穴住居 12軒	土師器・須恵器・灰陶器 綠釉陶器・上部質土器			

村之内II・III遺跡 高台・中谷井遺跡

1995. 3. 31発行

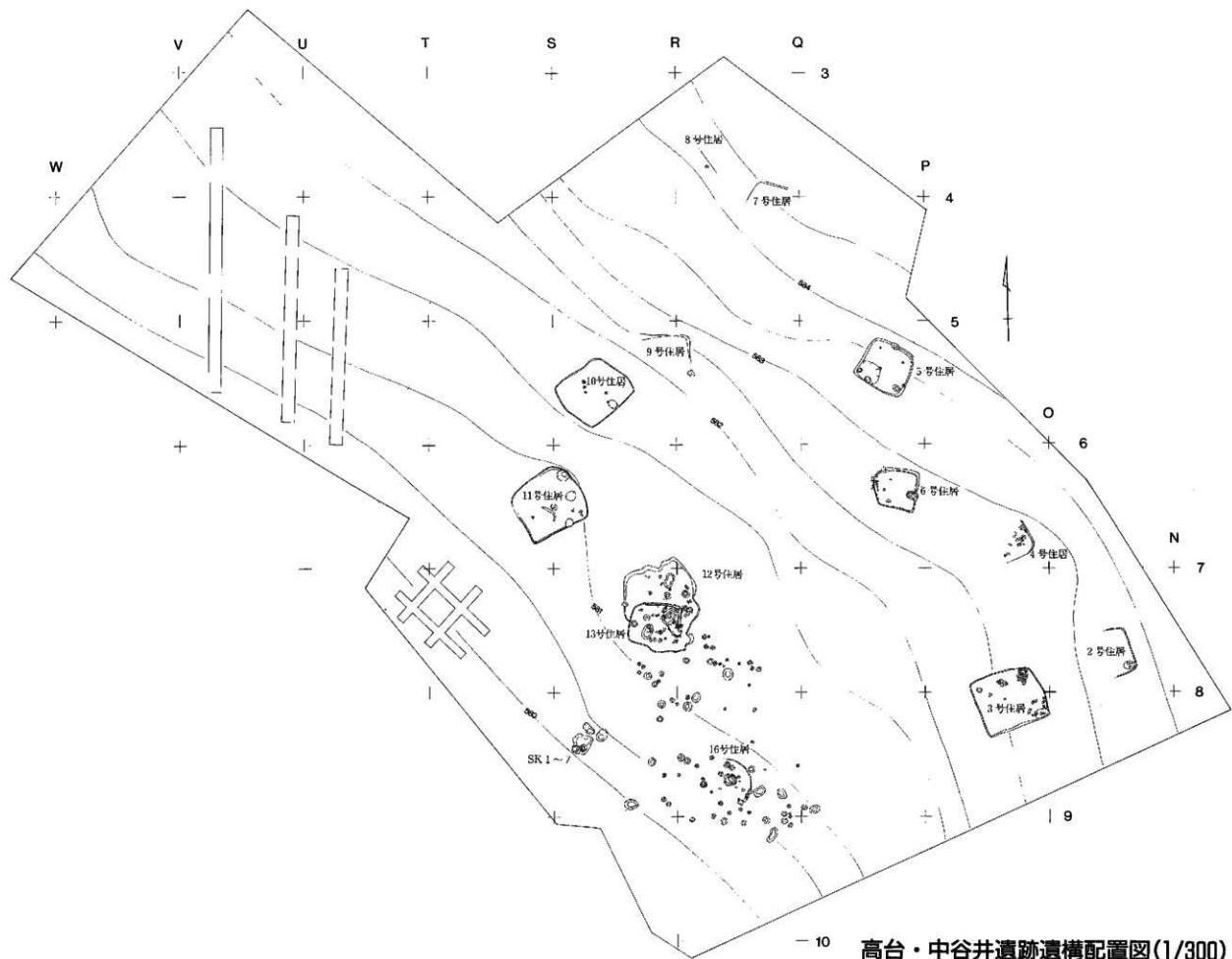
発 行 明野村教育委員会

秋北土地改良事務所

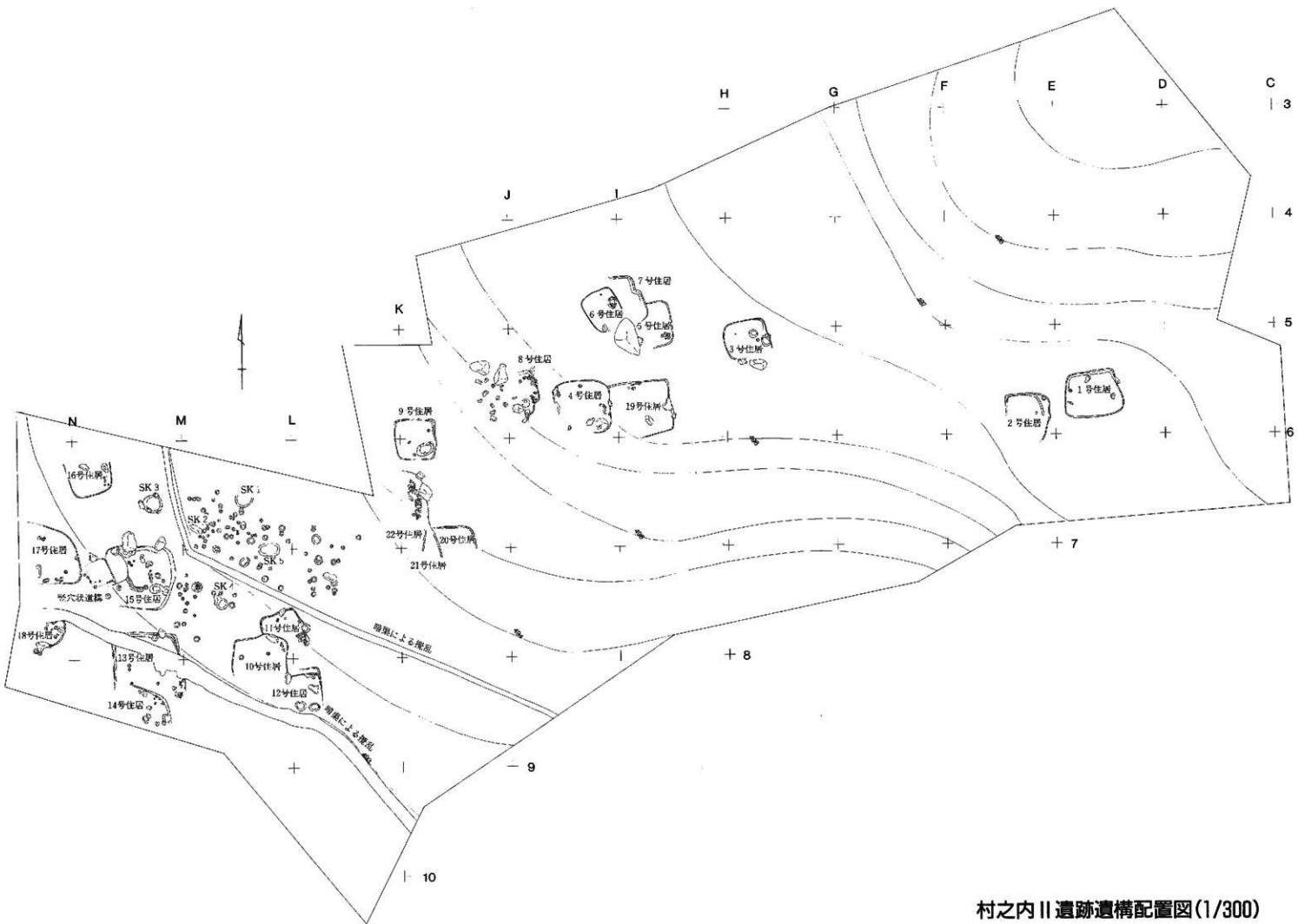
印 刷 ほねずき書籍株式会社

〒381 長野県長野市柳原2133 5

電話 (0262) 44-0235#0



高台・中谷井遺跡遺構配置図(1/300)



村之内 II 遺跡遺構配置図(1/300)

